

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 30 年度

2019 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局



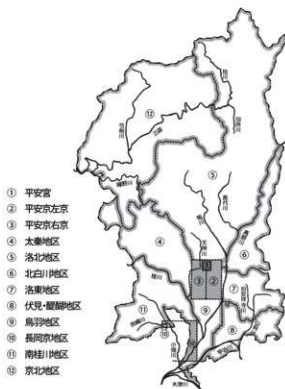
伏見城跡階段遺構検出状況

例 言

1. 本書は京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成30年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成30年1月から12月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果があったものを本文で報告し、その他のものを一覧表に列記する。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載する。
2. 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
3. 本書報告の調査のうち、基準点測量した調査の方位および座標は、世界測地系平面直角座標系VIによる。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)による。またこれ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点(KBM)として用いている。
4. 本書で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺1/2,500)を調整し、作成したものである。このほか、巻末の図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。

図版1～13 1/8,000 図版14～30 1/10,000(図版21-3のみ1/20,000)

5. 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年に準拠する。
6. 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』2016年度版に準じる。
7. 調査一覧表では各時代の「時代」は省略しており、調査日についても簡略に記している。遺跡名は、平安宮跡、平安京跡、長岡京跡については、官衙・条坊を優先して記載した。
8. 遺物整理にあたっては、上茶谷美保、上別府亜紀、早川仁志、三枝 愛、義井良作、吉本健吾の協力を得た。
9. 調査及び本書作成は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、(公財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。



地区設定概念図

目 次

巻頭図版

例 言

I	試掘調査の概要	1
II	平安宮	7
1	平安宮朝堂院跡、聚楽遺跡	7
2	平安宮右近衛府、鳳瑞遺跡	10
III	平安京左京	18
1	平安京左京北辺三坊七町・八町跡、一条三坊十六町跡、公家町遺跡、 内膳町遺跡、新在家構え跡	18
2	平安京左京一条三坊十五町・十六町跡、新在家構え跡、旧二条城跡	25
3	平安京左京四条四坊一町跡、烏丸御池遺跡	27
4	平安京左京五条三坊十三町跡、烏丸綾小路遺跡	37
5	平安京左京八条二坊一町跡、東市跡	40
6	平安京左京九条四坊一町跡、烏丸町遺跡	42
IV	平安京右京	44
1	平安京右京一条二坊十四町跡、御土居跡	44
2	平安京右京七条二坊七町跡、西市跡、衣田町遺跡	55
V	その他の遺跡	58
1	一ノ井遺跡	58
2	史跡 賀茂御祖神社境内	63
3	中臣遺跡	69
4	中臣遺跡	71
5	伏見城跡	81
VI	調査一覧	87

図版

報告書抄録

図版目次

- 巻頭図版 伏見城跡階段遺構検出状況
- 図版 1 平安宮
- 図版 2 平安京左京北辺～三条一・二坊
- 図版 3 平安京左京北辺～三条三・四坊
- 図版 4 平安京左京四～六条一・二坊
- 図版 5 平安京左京四～六条三・四坊
- 図版 6 平安京左京七～九条一・二坊
- 図版 7 平安京左京七～九条三・四坊
- 図版 8 平安京右京北辺～三条三・四坊
- 図版 9 平安京右京北辺～三条一・二坊
- 図版 10 平安京右京四～六条三・四坊
- 図版 11 平安京右京四～六条一・二坊
- 図版 12 平安京右京七～九条三・四坊
- 図版 13 平安京右京七～九条一・二坊
- 図版 14 太秦地区（1）
- 図版 15 太秦地区（2）
- 図版 16 洛北地区
- 図版 17 洛北地区・北白川地区
- 1 特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園隣接地，史跡御土居，北野天満宮，北野廃寺，上京遺跡
 - 2 栗栖野瓦窯跡
 - 3 如意寺跡
- 図版 18 洛東地区（1）
- 図版 19 洛東地区（2）
- 1 得長寿院跡，白河街区跡，岡崎遺跡
 - 2 安祥寺下寺跡
 - 3 山科本願寺南殿跡
 - 4 山科本願寺跡（寺内町遺跡），佐義長町遺跡，中臣遺跡
- 図版 20 伏見・醍醐地区（1）
- 図版 21 伏見・醍醐地区（2）
- 図版 22 伏見・醍醐地区（3）

- 1 がんせんどう廃寺
- 2 向島城跡
- 3 史跡醍醐寺境内
- 図版 23 鳥羽地区
- 図版 24 南桂川地区・長岡京地区（1）
- 図版 25 南桂川地区・長岡京地区（2）
- 図版 26 南桂川地区・長岡京地区（3）
- 図版 27 南桂川地区・長岡京地区（4）
- 図版 28 京北地区
- 図版 29 II-1・II-2 平安宮跡 遺構
 - 1 朝堂院跡遺構而検出状況（南西から）
 - 2 右近衛府跡調査区全景（南東から）
- 図版 30 III-1 平安京跡、公家町遺跡ほか 遺構
 - 1 12区築地基底部および石組溝（東から）
 - 2 17区築地基底部および石組溝（北東から）
 - 3 12区築地基底部および石組溝（南東から）
 - 4 17区築地基底部および石組溝（北西から）
 - 5 11区南北溝（北から）
 - 6 15区東壁（西から）
- 図版 31 IV-4 中臣遺跡 遺構（1）
 - 1 第2区全景（西から）
 - 2 第3区遺構検出状況（南から）
 - 3 第3区全景（西から）
 - 4 第3区全景（東から）
- 図版 32 IV-4 中臣遺跡 遺構（2）
 - 1 第5区東半部全景（南西から）
 - 2 第5区遺構検出状況（北西から）
- 図版 33 IV-4 中臣遺跡 遺構（3）
 - 1 第5区遺構検出状況（北から）
 - 2 第6-1区全景（東から）
 - 3 第6-3区全景（南東から）
 - 4 第6-7区全景（南東から）
 - 5 第6-8区全景（南東から）
 - 6 第6-9区全景（南東から）
 - 7 第6-10区全景（南東から）

図版 34	IV-4 中臣遺跡 遺構(4)
	1 第7区全景(北東から)
	2 第7区竪穴7-20 検出状況(北西から)
図版 35	IV-5 中臣遺跡 遺構(5)
	1 第7-2区全景(北から)
	2 第7-3区全景(北から)
図版 36	IV-4 中臣遺跡 遺構(6)
	1 第7-4区全景(北から)
	2 第7-5区全景(北から)
図版 37	IV-5 伏見城跡 遺構(1)
	1 石垣検出状況(西から)
	2 石敷検出状況(西から)
図版 38	IV-5 伏見城跡 遺構(2)
	1 階段検出状況(南西から)
	2 階段検出状況(南東から)

挿 図 目 次

地区設定概念図	i
I 試掘調査の概要	
図1 試掘調査件数の年間推移	2
図2 試掘調査 重機掘削作業状況	4
図3 試掘調査 土層断面観察状況	4
図4 指導に基づく調査実施状況(17H477)	4
図5 指導に基づく調査実施状況(18H100)	4
II-1 平安宮朝堂院跡, 聚楽遺跡	
図6 調査位置図	7
図7 調査区配置図	7
図8 調査区平面断面図	8
図9 出土遺物実測図	9
図10 瓦溜り部分断割り状況(西から)	9

II-2 平安宮右近衛府跡，鳳瑞遺跡

図 11 調査位置図	10
図 12 調査区配置図	10
図 13 調査区平面図	11
図 14 調査区北・西壁断面図	12
図 15 溝 1 セクション北壁断面図	13
図 16 土坑(竈) 2 検出状況(南西から)	13
図 17 土坑(竈) 2 平面図・断面図	13
図 18 土坑 3 出土遺物実測図	15
図 19 土坑 3 出土金属製品実測図	16
図 20 溝 1・土坑 2 出土遺物実測図	16

III-1 平安京左京北辺三坊七町・八町，一条三坊十六町跡，公家町遺跡， 内膳町遺跡，新在家構え跡

図 21 調査位置図	18
図 22 調査区配置図	19
図 23 11 区平面図・断面図	20
図 24 12 区平面図・断面図	20
図 25 14 区平面図・断面図・立面図	21
図 26 15 区断面図	21
図 27 16 区・17 区平面図・立面図	22
図 28 中立売御門周辺の宅地と道路	23
図 29 11 区南北溝(北から)	24
図 30 12 区築地基底部および石組溝(東から)	24
図 31 15 区東壁(西から)	24
図 32 17 区築地基底部および石組溝(北東から)	24

III-2 平安京左京一条三坊十五町・十六町跡，新在家構え跡，旧二条城跡

図 33 調査位置図	25
図 34 『内裏図』に描かれた幕末の調査地周辺	25
図 35 遺構位置図	26
図 36 遺構平面図・断面図	26

III-3 平安京左京四条四坊一町跡，烏丸御池遺跡

図 37 調査位置図	27
------------	----

図 38 調査区配置図	27
図 39 2トレンチ南壁断面図	28
図 40 1区・2区北壁断面図	29
図 41 1区・2区遺構平面図	30
図 42 1区北壁断面（南から）	31
図 43 1区2面全景（東から）	31
図 44 2区最終面全景（西から）	31
図 45 出土遺物実測図	32
図 46 左京四条四坊一町跡で調査された平安時代の主要な遺構	35
図 47 97H155 池 460 平面図・断面図	36
図 48 97H155 池 460 検出状況（東から）	36

Ⅲ-4 平安京左京五条三坊十三町跡，烏丸綾小路遺跡

図 49 調査位置図	37
図 50 調査区配置図	37
図 51 調査区平面図・断面図	38
図 52 出土遺物実測図	38

Ⅲ-5 平安京左京八条二坊一町跡，東市跡

図 53 調査位置図	40
図 54 南壁断面図	40
図 55 周辺調査との関係	41

Ⅲ-6 平安京左京九条四坊一町跡，烏丸町遺跡

図 56 調査位置図	42
図 57 遺構位置図	42
図 58 側溝断面図	43
図 59 側溝東肩（B-B' 間断面）（北から）	43
図 60 側溝西肩（A-A' 間断面）（北から）	43

Ⅳ-1 平安京右京六条三坊十一町跡

図 61 A 地点調査位置図	44
図 62 B 地点調査位置図	44
図 63 御土居跡調査地点図	45
図 64 A 地点調査区配置図	47

図 65	A 地点 1～4 断面図（土塁と溝）	48
図 66	A 地点 5・6 区断面図（土居堀）	48
図 67	A 地点 4 区全景と現存土塁（東から）	49
図 68	A 地点 4 区全景（南から）	49
図 69	B 地点調査区配置図	50
図 70	東隣接道路と調査地（東から）	50
図 71	佐井通と調査地（南西から）	50
図 72	各調査区の位置関係概念図	50
図 73	B 地点 1 区南壁断面図	51
図 74	B 地点 1 区断面（北から）	51
図 75	B 地点 1 区断面近接（層 1 など）（北東から）	51
図 76	B 地点 2 区断面図	52
図 77	B 地点 2 区断面（北東から）	52
図 78	B 地点 2 区断面近接（北西から）	52
図 79	B 地点 3 区北壁断面（反転）	53
図 80	B 地点 3 区北壁断面（南西から）	53
図 81	B 地点 3 区北壁断面近接（南西から）	53

IV-2 平安京右京七条二坊七町跡，西市跡，衣田町遺跡

図 82	調査位置図	55
図 83	調査区配置図	55
図 84	各調査区断面図	56
図 85	出土遺物実測図	56

V-1 一ノ井遺跡

図 86	調査位置図	58
図 87	調査区配置図	58
図 88	調査区平面図・断面図，セクション南壁断面図	59
図 89	溝 1 出土遺物実測図	60
図 90	出土遺物実測図	61
図 91	調査区全景（南から）	62
図 92	溝 1 断面（北から）	62

V-2 史跡 賀茂御祖神社境内

図 93	調査位置図	63
------	-------	----

図 94 調査区配置図	64
図 95 調査区実測図 (1)	65
図 96 調査区実測図 (2)	66
図 97 出土遺物実測図	68

V-3 中臣遺跡

図 98 調査位置図	69
図 99 調査区配置図	69
図 100 調査区平面図・断面図	70

V-4 中臣遺跡

図 101 調査位置図	71
図 102 調査区配置図	71
図 103 基本層序模式図	73
図 104 第2区・第3区平面図・断面図	74
図 105 第5区平面図・断面図, 遺構平面図・断面図	75
図 106 第5区遺構平面図・断面図	76
図 107 第6区平面図, 遺構平面図・断面図	77
図 108 第7区平面図, 遺構平面図・断面図	78
図 109 出土遺物実測図	79
図 110 古墳時代後期～飛鳥時代の中臣遺跡概念図	80

V-5 伏見城跡

図 111 調査位置図	81
図 112 調査区配置図	81
図 113 調査区断面図	82
図 114 階段遺構立立面図, 東壁断面図	83
図 115 階段遺構北石垣立立面図	84
図 116 階段遺構平面図	85
図 117 階段遺構南石垣立立面図, 南壁断面図	86
図 118 出土遺物実測図	87
図 119 調査区接合図	88

表 目 次

表1	平成30年の試掘調査件数	2
表2	出土遺物概要表	3
表3	平成30年 試掘調査に基づく発掘調査一覧	5
表4	御土居跡調査履歴一覧	46
表5	中臣遺跡調査地周辺の成果	72

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政と試掘調査

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は、平成17年の京北町との合併に伴う遺跡地図の改定を経てさらに増加し、現在では815件を数える。その種類は、平安京跡、長岡京跡に代表される都城跡をはじめ、宮殿跡、離宮跡、邸宅跡、寺院跡、城跡、集落跡、古墳、窯跡、散布地と、多岐にわたる。またその存続期間は旧石器時代から近現代までと幅広く、遺構面は重層的に存在する。このため集落と都城跡、古墳群と城跡など、異なる性格を備えた遺構が並列して検出されることも珍しくなく、これらが遺跡の理解をより難しいものとしている。

京都市では、これらの埋蔵文化財包蔵地を重要度に即して「重要遺跡・小規模遺跡」「一般遺跡」「一般遺跡に準ずる遺跡」の3種に分類し、要項によりそれぞれの扱いを定めている（平成19年4月10日改訂）。包蔵地内で土木工事や開発行為が計画された場合、京都市文化財保護課（以下、当課という）は遺跡の重要度と工事規模に応じて「発掘調査」「試掘調査」「詳細分布調査（立会調査）」「慎重工事」の4種の行政指導を行う。

このうち試掘調査は、遺跡の有無や遺構の残存状況、その範囲等を把握し、更なる発掘調査が必要であるか否かを判断する作業で、非常に重要な業務である。平成30年度現在、当課では計9名の文化財保護技師がその職務に従事している。

試掘調査を実施した結果、遺跡の残存状態が良好であり、かつ工事による遺構の損傷が免れないと判断された場合は、設計変更による遺跡の保護もしくは対象範囲の発掘調査が指導される。試掘調査の件数は年々増加の一途を辿り、平成30年の指導件数は計188件を数える。また試掘調査を経て本発掘調査に至るものは20件を超えており、これも増加の傾向にある。

2 平成30年の試掘調査概要

(1) 試掘調査の内訳と件数

平成30年1月～12月に文化財保護法第93条に基づいて提出された届出と、同第94条に基づく通知の件数は、あわせて1,812件に上る。この件数は、前年比で303件（16.6%）の増加である。国内及び外国人観光客に沸く京都市内では、インバウンド効果によるホテルの建設が活況を呈しており、近年では、より小規模な簡易宿泊やゲストハウスの建設も急増している。間近に迫った東京オリンピックの開催や、大阪での実施が決定した万国博覧会等のイベントは、これに拍車をかけているようである。一方、消費税増税への懸念から、住居の建築を急ぐ例も少なくはない。

届出・通知に対する保護課の指導内容は、発掘調査21件（前年比33.3%増）、試掘調査188件（同20.7%増）、詳細分布調査660件（同0.1%増）、慎重工事943件（同25.9%増）である。この

うち、試掘調査の実施件数は169件(同20.7%増)で、前年度に比べて激増の感がぬくえない。試掘調査の件数を地区ごとに見ると、平安宮城6件、平安京左京城45件、平安京右京城41件、太秦地区8件、洛北地区15件、北白川地区2件、洛東地区15件、伏見・醍醐地区7件、鳥羽地区3件、長岡京地区10件、南桂川地区15件、京北地区2件である。平安宮城の開発は減少傾向にあるものの、左京城、右京城の開発の増加には目を見張るものがある。南桂川地区、洛北地区、洛東地区の開発も堅調である。

試掘調査の結果、発掘調査による記録保存もしくは設計変更による遺構面の保護が必要と判断された件数は35件で、そのうち25件について発掘調査が実施された。なお、これ以外にも、昨年度までの試掘調査結果や隣接地の調査成果を引用して、発掘調査が指導、実施されたものもある。

平成30年に発掘調査を請け負った組織は計10団体である。公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が6件、古代文化調査会(代表 家崎孝治)が4件、関西文化財調査会(代表 吉川義彦)が

表1 平成30年の試掘調査件数

地区	1~3月 (平成29年度)	4~12月 (平成30年度)	小計	地区	1~3月 (平成28年度)	4~12月 (平成29年度)	小計
①平安宮城	2	4	6	⑦洛東地区	1	14	15
②平安京左京城	8	37	45	⑧伏見・醍醐地区	2	5	7
③平安京右京城	11	30	41	⑨鳥羽地区	0	3	3
④太秦地区	4	4	8	⑩長岡京地区	2	8	10
⑤洛北地区	4	11	15	⑪南桂川地区	7	8	15
⑥北白川地区	0	2	2	⑫京北地区	0	2	2
				合計	41	128	169

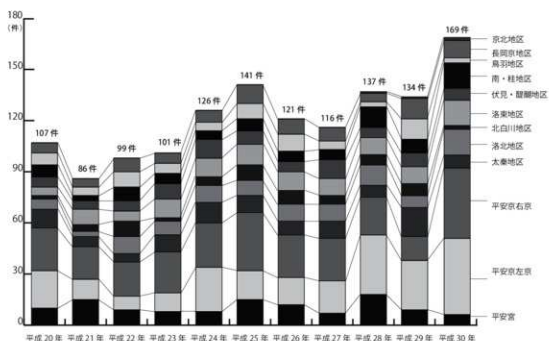


図1 試掘調査件数の年間推移

2件、株式会社イビソク関西支店（支店長 野澤直人）が2件、有限会社京都平安文化財（代表 栗田尚典）が2件、国際文化財株式会社西日本支社（支店長 森下賢司）が2件、合同会社アルケス（代表 持田 透）が2件、株式会社四門京都支店（京都支店長 青山賢二）が1件、株式会社地域文化財研究所（代表 福永信雄）が1件、株式会社文化財サービス（代表 出口弘文）が3件である。このほか、京都大学、同志社大学、京都外国語大学が学内における調査を実施している。

（2）試掘調査成果の概要

発掘調査を指導した事案は、その報告を発掘調査報告書に委ねるため、本書では本発掘調査には至らなかったもの、設計変更により遺構の地中保存が図られたもの、延長調査をおこなったものを中心として報告する。ここでは試掘調査全体の概要を述べる。

①平安宮城

平安宮城では、大藏省跡、主水司跡、右近衛府跡、史跡平安京内裏跡、朝堂院跡、豊楽院跡の調査を実施した。町屋を改造して小規模な共同住宅や簡易宿泊施設の建設に伴う開発が主体である。本書では、延長調査を行った右近衛府跡（巻末一覧表（以下同）No 43）と、龍尾壇該当地に相当する調査（No 45）について報告する。

②平安京左京域

左京域では、平安京跡、上京遺跡、公家町遺跡、内膳町遺跡、二条城北遺跡、新在家構え跡、旧二条城跡、堀川御池遺跡、烏丸御池遺跡、烏丸綾小路遺跡、寺町旧域、本禅寺構え跡、東市跡、東本願寺前古墓群、烏丸町遺跡、御上居跡の16遺跡で調査を行った。大規模なホテルやマンションの建設計画があり、試掘調査を行った後に施工時の立会を行ったものも多い。本書では、北辺三坊七町・八町跡、一条三坊十六町跡、公家町遺跡、内膳町遺跡、新在家構え跡（No 3・46）、一条三坊十五町跡・十六町跡、新在家構え跡、旧二条城跡（No 4）、四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡（No 60）、五条三坊十三町跡・烏丸綾小路遺跡（No 67）、八条二坊一町跡、東市跡（No 75）、九条四坊一町跡・烏丸町遺跡（No 80）の調査成果を報告する。

このうちNo 3・46とNo 4は、京都御苑内で実施した調査である。ともに築地基礎の石組やこれを覆う焼土層等が確認されており、幕末の京都の動乱を物語る。No 60、No 67、No 75、No 80は市街

表2 出土遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内 訳	Bランク点数 (箱数)	Cランク点数 (箱数)	出土箱数 合計
点数 及び 箱数	3箱 (189点)	土師器(106点)、須恵器(8点)、 緑釉陶器(3点)、灰釉陶器(6点) 施釉陶器(9点)、焼締陶器(2点) 青磁(3点)、磁器・染付(5点)、 瓦類(26点)、埴(1点)、 石製品(2点)、金属製品(18点)	4箱	19箱	26箱

地の調査で、小規模調査ながら土坑墓や大路の側溝、築地内溝などが検出されている。

③平安京右京城

右京城では、平安京跡、龍翔寺跡、御土居跡、西ノ京遺跡、壬生遺跡、山ノ内遺跡、西院遺跡、西京極遺跡、西市跡、衣田町遺跡、西寺跡、唐橋遺跡の12遺跡で調査を行った。右京城では、大規模な共同住宅の建設が堅調で、店舗や工場、企業の事務所建設等がこれに続く。

本書では、一条二坊十四町跡、御土居跡（No.86・119）、七条二坊七町跡、西市跡、衣田町遺跡（No.106）について報告する。No.86・119は、ともに御土居の調査成果の報告で、調査の結果、土塁の現地保存が図られた。

④太秦地区

一ノ井遺跡、嵯峨遺跡、常盤柏ノ木古墳群、太秦馬塚町遺跡、円宗寺跡、宝幢寺境内の6遺跡で調査を行った。その大半が個人住宅建設に伴う調査である。本書では、一ノ井遺跡（No.116）で確認された近世の遺構について報告する。

⑤洛北地区

大深町須恵器窯跡、鎮守庵瓦窯跡、御土居跡、史跡 御土居、栗栖野瓦窯跡、寺町旧域、史跡 賀茂御祖神社境内（下鴨神社）、北野天満宮、上京遺跡、北野麩寺の10遺跡で調査を行った。この地区では、個人住宅の建設と境内の整備が主体である。史跡 賀茂御祖神社境内（下鴨神社）の調



図2 試掘調査 重機掘削作業状況



図3 試掘調査 土層断面観察状況



図4 発掘調査指導に基づく実施状況（17H477）



図5 発掘調査指導に基づく実施状況（18H100）

査(No122)では継続的な調査を実施し、西参道や旧参道の路面等を検出した。

⑥北白川地区

如意寺跡、得長寿院跡、岡崎遺跡、白河街区跡の4遺跡で調査を行った。

⑦洛東地区

御土居跡、寺町旧城、六波羅壺寺境内、六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡、安祥寺下寺跡、山科本願寺跡(寺内町遺跡)、中臣遺跡、左義長町遺跡の9遺跡で調査を行った。山科区内の中臣遺跡では個人住宅や宅地造成が、山科本願寺跡及び山科本願寺南殿付近では小規模な共同住宅の建設が増加している。

本書では、中臣遺跡の調査成果2件(No142、平成29年度No106)について報告する。このうち後者では、中臣遺跡の遺跡範囲がより北東へ拡大することが明確となった。

表2 平成30年 試掘調査結果に基づく発掘調査指導一覧

京都市番号	遺跡名	地区	試掘日	調査団体	調査原因
17H353	三条三坊五町跡、烏丸御池遺跡	左京	2018/01/9	アルケス	ホテル
17H558	左京九条四坊二町跡、烏丸町遺跡	左京	2018/2/7	イビソク	ホテル
15H394	平安京右京	右京	2018/2/15	埋文研	市場整備
17NG500	長岡京跡	長岡京	2018/2/19	地域文化財	宅地造成
155723	上京遺跡	洛北	2018/02/23	埋文研	集合住宅
17H509	右京六条四坊七町跡、西京極遺跡	右京	2018/2/27	四門	福祉施設
17S496	嵯峨遺跡	太秦	2018/3/14	国際文化財	集合住宅
17H557	左京八条二坊九町跡	左京	2018/3/20	平安文化財	ホテル
17H620	左京九条三坊九町跡、烏丸町遺跡	左京	2018/03/23	古代文化調査会	ホテル
17H477	左京九条三坊八町跡、烏丸町遺跡	左京	2018/4/5	古代文化調査会	ホテル
17H596	八条三坊八町跡、東本願寺古幕群	左京	2018/4/16	関西文化財	ホテル
18NG053	長岡京跡左京一条三坊十町・十一町跡、一条条間大路跡	長岡京	2018/5/9	文化財サービス	工場
18H100	四条三坊十四町	左京	2018/5/18	関西文化財	店舗ビル
18H189	三条一坊四町・五町跡	左京	2018/6/26	平安文化財	簡易宿所
18H069	四条四坊七町跡	左京	2018/6/22	古代文化調査会	ホテル
17H679	二条二坊十町跡、高陽院跡、二条城北遺跡	左京	2018/6/25	アルケス	ホテル
18S203	大新遺跡、下久世構跡	南・桂	2018/7/2	埋文研	工場
18H102	七条一坊四町跡、堂ノ口町遺跡	右京	2018/07/09	国際文化財	市場
18H101	三条四坊五町跡、烏丸御池遺跡	左京	2018/7/23	イビソク	集合住宅
18S272	植物園北遺跡	洛北	2018/8/9	埋文研	集合住宅
18S007	北野麻寺	洛北	2018/8/15	埋文研	銀行
18H357	平安京左京五条四坊十六町跡、寺町旧城	左京	2018/8/31	古代文化調査会	寺院兼ホテル
18S519	中久世遺跡	長岡京	2018/10/19	文化財サービス	工場
18S160	六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡	洛東	2018/10/15	文化財サービス	ホテル
17H809	平安京跡、唐橋遺跡	右京	2018/12/10	埋文研	学校

⑧伏見・醍醐地区

がんせんどう廃寺、伏見城跡、木幡の関跡、史跡 醍醐寺境内、向島城跡の5遺跡で調査を行った。その多くが伏見城跡での調査である。

本書では、伏見城跡（No.145）について報告する。この調査では、伏見城跡では調査事例の少ない階段遺構を発見した。江戸時代初頭の遺構である。

⑨鳥羽地区

富ノ森城跡、鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡、淀城跡の4遺跡で調査を行った。区画整理と個人住宅建設に伴う調査が主体である。

⑩長岡京地区

長岡京跡、東院跡、東土川遺跡、芝ヶ本遺跡、上里北ノ町遺跡の5遺跡で調査を行った。宅地造成及び工場建設に伴う調査が主体である。

⑪南桂川地区（MK）

史跡・名勝嵐山、嵐山谷ヶ辻子町遺跡、上久世遺跡、大藪遺跡、中久世遺跡、下久世の構え跡、福西古墳群、上里北ノ町遺跡、東山古墳群の10遺跡で調査を行った。

⑫京北地区（UK）

鳥谷古墳群、塔遺跡、周山城跡の3遺跡で調査を行った。

（黒須亜希子）

II - 1 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1 調査経過

調査地は、千本通と丸太町通の交差点より南東に位置する（図6）。平安宮跡の復原によると朝堂院の北東部にあたり、敷地の北半部を龍尾壇が東西に通る。今回、この区画に共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

龍尾壇は大極殿南庭に設けられた壇で、朝堂院を東西に横断する。壇上に大極殿、壇より南には昌福堂をはじめとする朝堂が建つ。平城宮や長岡宮では築地と門が築かれたが、平安宮では壇と朱欄が設けられた。現在、平安神宮では切石積みで復原されているが、平安時代の龍尾壇がどのような構造であったのかは明らかではない。

調査地より40m西へ隔てた区画では、昭和58年度に発掘調査が行われており、緑釉瓦を含む平安時代前期の瓦溜りが検出されている（図6①）。ただし、龍尾壇に相当する範囲は大きく攪乱を受けており、平安時代の包含層を部分的に検出するにとどまっている。

一方、調査地の南を通る郁芳北通を隔てた南の区画では、平成19年度に発掘調査が行われており、平安時代の昌福堂の基壇が良好な状態で検出された（図6②）。このため、今回の調査地においても、連続する遺構への残存が予測された。



図6 調査地位置図（1：5,000）

2 調査成果

基本層序

調査区は、敷地の中央において南北方向に設定した。掘削を進めたところ、調査区の中央には大規模な近世初頭の瓦溜りがあることを確認した（瓦溜り1）。基本層序はこの瓦溜りの南北で異なる。

北半部の基本層序は、GL-0.15mまで盛土、-0.3mまで黒褐色微砂混じり粘土質シルト（近世後期包含層）、-0.6mまで暗褐色微砂混じり粘土質シルト（中世相当層？）があり、その直下において固く締まる褐色微砂混じり粘土質シルト（整地土）を確認した。龍尾壇の南端

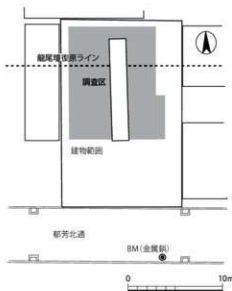


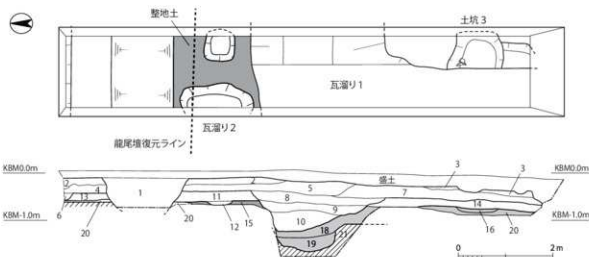
図7 調査区配置図（1：400）

ラインはこの整地土付近を通る範囲に想定される。また、調査区北端では、ほぼ同レベルで褐色砂礫を主体とする地山が一部露出した。

一方、南半部ではGL0.25mまで盛土、-0.5mまで焼け瓦を多量に含む黒褐色粗砂混じりシルト、-0.7mまで暗オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルト、-1.05mまで暗オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルト（平安時代前期包含層）、以下、掘削底である-1.7mまで黄褐色粘土質シルトを主体とする地山を確認した。瓦溜り1の下層を断割ったところ、地山上面のレベルは瓦溜り1を境として40cm程度の南へ下がること、またその境には土坑状の掘り込みが存在することが明らかとなった。

遺構と遺物

包含層の堆積状況から、遺構面は近世後期、平安時代末～中世、平安時代前期の3面が想定される。近世遺構面は近世包含層直下にあたり、瓦溜り1が成立している。その下限年代は18世紀であるが、瓦溜り1から出土した遺物はすべて平安時代中期に遡るものであり（図9）、周辺に当該時



- | | |
|--|--|
| 1) 10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 礫大の礫多量入る 瓦細片入る しまり悪い (近世以降増築) | 12) 10YR3/3 暗褐色微砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の角礫多量入る しまり良い |
| 2) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂混じりシルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック30%程度入る 径4cm未満の礫少量入る 瓦細片入る しまり悪い やや軟質 | 13) 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに 21) 層地山ブロック10%程度入る 径2cm未満の礫少量入る ややしまり悪い やや軟質 (中世?) |
| 3) 10YR3/4 暗褐色微砂混じりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る 土師器細片・炭化物入る しまり良い (近世整地層) | 14) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る (中世?) |
| 4) 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり粘土質シルト 径2cm未満の礫少量入る ややしまり悪い やや軟質 (近世後期包含層) | 15) 10YR4/4 褐色微砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の角礫多量入る しまり良い やや軟質 (平安時代整地層) |
| 5) 10YR3/2 黒褐色微砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫少量入る 瓦多量入る ややしまり悪い (近世後期包含層) | 16) 10YR3/3 暗褐色微砂混じりシルト しまり悪い (土坑埋土) |
| 6) 5Y4/1 灰色細砂混じりシルトに 20) 層ブロック10%程度入る 炭化物入る ややしまり悪い やや軟質 | 17) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルトブロックと 2.5Y4/4 オリーブ褐色微砂混じり粘土ブロックの混合層 (平安時代整地層) |
| 7) 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じりシルト 炭化物・二次焼成瓦多量入る しまり悪い (中世?) | 18) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂混じりシルトに 21) 層地山ブロック5%程度入る 土師器片・瓦片少量入る しまり悪い やや軟質 (平安時代包含層) |
| 8) 10YR2/3 黒褐色微砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 瓦多量入る ややしまり悪い やや軟質 (瓦溜り・近世?) | 19) 18) 層に近似 より軟質 (平安時代土坑?) |
| 9) 10YR3/3 暗褐色微砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 瓦多量入る ややしまり悪い やや軟質 (瓦溜り・近世?) | 20) 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりシルト・微砂に 21) 層地山ブロック5%程度入る 径1cm未満の礫少量入る 炭化物入る ややしまり悪い やや軟質 |
| 10) 10YR3/2 黒褐色微砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る 瓦多量入る しまりやや悪い やや軟質 (瓦溜り・近世?) | 21) 2.5Y5/6 黄褐色細砂混じり粘土質シルトに 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりシルトブロック2%程度入る 径0.5cm未満の礫微量入る しまり良い (地山) |
| 11) 10YR3/3 暗褐色微砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫少量入る 瓦多量入る ややしまり悪い (中世?) | |

図8 調査区平面断面図 (1:80)

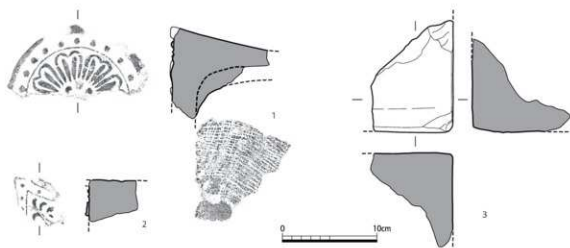


図9 出土遺物実測図(1:4)

期の遺構が存在したことを推測させる。図9-1は複弁蓮華文軒丸瓦(9世紀中～後葉)、図9-2は均整唐草文軒平瓦(10世紀)の製品で、側面の一部に朱が付着している。図9-3は塙の一部で、焼成は甘く軟質である。これらは、近世期の開発に伴い、投棄されたものと考えられる。

龍尾壇推定ライン付近の整地層上面は平安時代包含層の上面に相当する。この面では調査区南半部で土坑3を検出した。平面形状は不定形、遺構深度は浅いが、緑釉瓦の破片がままとめて出土した。また、上述のとおり、平安時代包含層の下面(地山上面)では、土坑状の掘り込みを確認した。



図10 瓦溜り部分断割り状況(西から)

3 まとめ

以上、平安宮朝堂院跡の試掘調査について報告した。今回の調査では石段等の発見には至らなかったが、固くしまった整地土とこれより南部との比高差は、龍尾壇の存在を想起させるものである。陽明文庫本『宮城図』には、龍尾壇は南に位置する昌福堂北縁より七丈三尺の距離にあるとされており、平成19年度の調査以後、その推定ラインが修正されている。今後の周辺調査により、その位置が確定されることに期待したい。

(黒須亜希子)

引用文献

- 調査①：財団法人古代学協会『平安宮朝堂院跡』平安京跡研究調査報告第9輯，1984年
 調査②：京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度，2008年

II-2 平安宮右近衛府跡，鳳瑞遺跡

1 調査経過

調査地は上京区天満屋町に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地の「平安宮跡」・「鳳瑞遺跡」に該当する。当該地において老人福祉サービス施設の新築工事が計画され、平成30年2月19日付けで文化財保護法第93条第1項の届出がなされた。これを受け、当課は平成30年4月4日に試掘調査を実施し、調査区1と調査区2を設けた(図12)。この結果、調査区1の西側で遺構面が遺存することが明らかとなったため、同年5月28日～6月8日にかけて、補足調査(調査区3)を実施した。実働は総計9日間で、調査面積は136㎡である。今回は調査区3を中心として報告する。

2 位置と環境

今回の調査地は、平安宮右兵衛府と右近衛府に挟まれた宮内道路上に比定され、敷地西端に西大宮大路東築地心想定ラインを含む。古墳時代から奈良時代の集落跡である鳳瑞遺跡の範囲内でもある。

周辺では御前通東面の複数地点で発掘調査・立会調査が実施され、平安宮の西端である西大宮大路に関連する遺構が確認されている(図11)。

それぞれの調査で西大宮大路東側溝(宮西限の溝(隍))や、西大垣(西大宮大路東築地)に関連する遺構を検出している。平安時代前期から後期にいたる掘り直しや、溝ラインの踏襲が確認できており、平安宮西限の状況が明らかにされてきた。地点によっては溝(隍)が南北方向に連続しないことが判明し、課題も多く残されている。

また平安宮跡の調査としては副次的な成果であるが、江戸時代に各所からこの付近に寺院が移転された後に大規模な開発が進み、それに伴う土取りが行われることや、墓坑などの寺院に関連する遺構が成立することも判明している。

今回の調査では、平安宮西限の整備状況や土地利用の在り方に迫る遺構の検出が期待された。



図11 調査位置図(1:2,500)
(各調査地の報告書は文末に記載)

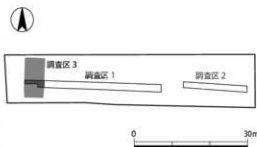


図12 調査区配置図(1:1,000)

3 調査成果

(1) 遺 構

現代盛土直下のGL-0.25mで地山となる。遺構検出は地山直上で行った。今回の調査では近世の溝・土坑などを確認した。

溝1 調査区中央を縦断する南北溝で、検出長は9.9mを測る。南北はそれぞれ調査区外へ延びる。北壁付近の東西幅1.6m、南壁付近で幅1.5m、深さ0.75mある。埋土は9層に分かれ、上層の2・3層(図14北壁、以下同)は溝の機能停止後に埋め戻した際の堆積であろう。2層は固く締まり、整地としての意味も持つか。4・5層(中層)と6～10層(下層)では土色、土質に違いがあり、この違いは掘り直しによる機能時期の差に由来する可能性もあろう。A-A'断面(図15)ではやや様相が異なるが、ここでも1～4層と5・6層では土質に違いがあり、掘り直されていることを追認できる。

出土遺物は少量で平安時代の遺物も含まれるが、A-A'断面4層から近世の施釉陶器が1点出土した。須恵器などの古い遺物が確認できるものの、確認した溝の少なくとも中層よりは近世以降に埋没したものと思われる。

土坑2(竈) 調査区の西側で溝1を切り込む形で確認した。検出規模は東西1.92m、南北0.64mの楕円形の土坑である。検出時には焼土が土坑の周りに堆積していた。

土坑の東側には幅0.7mの切石が立てられて、側石として並べられている。土坑の底部には椀瓦が三枚平置きで並べられており、東から西へと端部を上積みしている。この形状は明治の風呂吹き竈遺構のものに類似する。堆積状況から火を扱っていることは想定できることから、西側が焚口と考えられる。

この遺構の埋土から18世紀頃の陶磁器などが出土しており、近世のものと考えられる。溝1が埋没した後に町

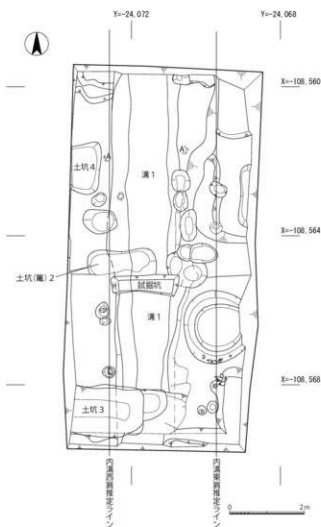


図13 調査区平面図(1:100)

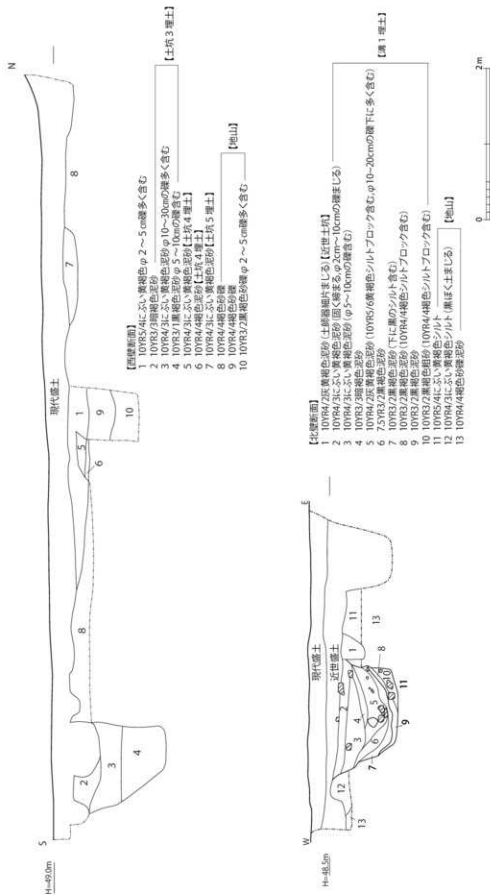


図14 調査区北・西壁断面図(1:50)

家が形成された際の遺構と判断できる。

土坑3 調査区南西隅で幅1.9m以上、深さ1.1mの楕円形の土坑を確認した。溝1を切り込んで成立する。埋土は暗褐色泥砂、10~30cmの礫を多く含むぶい黄褐色泥砂、5~10cmの小礫を含む黒褐色泥砂の3層に区分できる。埋土からは土器類・金属製品などの遺物が多量に含まれることから廃棄物処理土坑と思われる。



図15 溝1セクション北壁断面図 (1:50)



図16 土坑(竈)2検出状況(南西から)

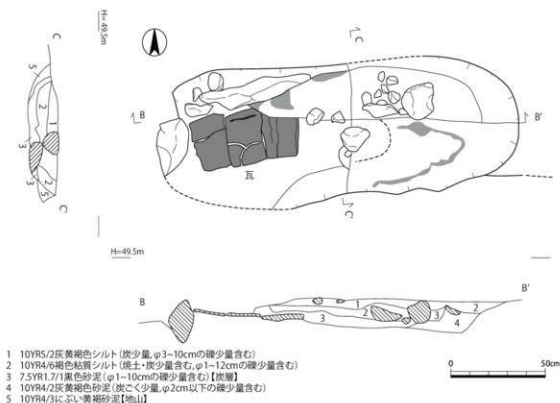


図17 土坑(竈)2平面図・断面図 (1:50)

(2) 遺物

土坑3出土土器類 (図18) 遺物の出土はほとんどが土坑3から出土している。1～4は土師器皿Nr, 5は土師器皿Sb, 7～9は土師器皿Sである。土師質土器で小型の「でんぼ」である。ロク口成形をし、口縁部はまっすぐ立ち上がる。10は小型壺でいわゆる「つぼつぼ」である。11は小型の壺型土製品である。12は土製人形で「鳥」を象ったものと思われ、羽の部分には赤く彩色が残る。13は焼塩壺である。口径が3.5cm, 器高が5.9cmで体部は寸胴であり口縁がすぼむ形状となっている。14・15は焙烙である。両方とも口縁が屈曲するものである。16は火鉢である。ハの字状に足がつき、内面に焼き跡が残る。17～20は肥前陶器で刷毛目文の椀である。ほぼ完形のものが一括で出土し、完形品の他にも同様の椀が破片で多く出土した。21・22は唐津焼の椀である。23・24は染付椀で見込みに五弁花のコンニャク印判を施す。25・26は瀬戸美濃の椀である。27は砥石である。28・29は播磨鉢である。28は信楽産のもので、底径が14.6cm, 器高が11.6cmである。内面の刷毛目は7本1単位で内面は下半部がすり減っており、使用の痕跡を残す。29は備前産である。

土坑3出土金属製品 (図19) 金1～金7は煙管である。金1～金5までが雁首で金6・金7が吸口である。金1は雁首の差込口に木片が残る。金8・金9は掛金具で釣針状を呈する。金8は断面が丸く仕上げられており、金9の断面は菱形上に面をもつ形状となる。金10は毛抜きである。11は銅製金具である。魚目状に施されており、飾り金具の一部と思われる。12は飾り金具である。2枚の銅板で釣り金具部分を挟む。3箇所を鉋で小さくかきめている。唐草の文様を施し、部分的に金鍍金が残る。これらの他にも寛永通宝の銅銭などが多数出土している。

溝1出土遺物 (図20) 25～29は溝1から出土した。25は須恵器の底部である。26は青磁染付の椀で内面に「福」の字を施す。18世紀以降のものである。27～29は平瓦片で、いずれも凹面に布目、凸面に縄叩きの痕跡が残る。

土坑2 (竈) 出土遺物 (図20) 30～33は土坑 (竈) 2から出土した。30は土師器で、炮烙の口縁部である。31は土師器皿Sで口縁部に灯明芯痕が付着する。32は陶器の蓋である。33は陶器の灯明皿である。これらの他にも土師器の灯明皿が出土している。

4 まとめ

今回の調査で近世の溝や竈、遺物を多量に含む土坑や、西大宮大路内溝の推定ラインとほぼ同じ位置に溝を確認した。溝1からは近世の陶磁器が出土しており、近世以降に埋没したものとと思われる。ただし、溝1の堆積状況からは掘り直しをしていることが見て取れ、近世の施軸陶器が出土しているのはこの掘り直し後と思われる中層からである。下層が近世以降に属するという確実な証拠は得られていない。平安時代の平安宮西限溝の埋土が遺存している可能性もあろう。溝1が埋没した後に、土坑2 (竈) や廃棄物処理土坑である土坑3が成立する。また、今回報告した2基の土坑の他に柱穴を複数確認した。切り合い関係は確認できなかったが、これらの柱穴も溝1が埋没し

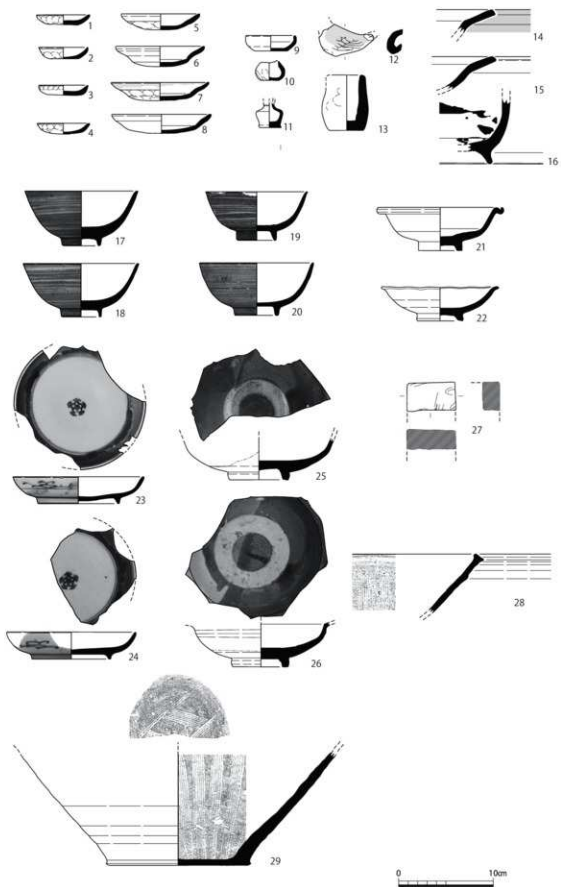


图18 土坑3出土遗物实测图(1:4)

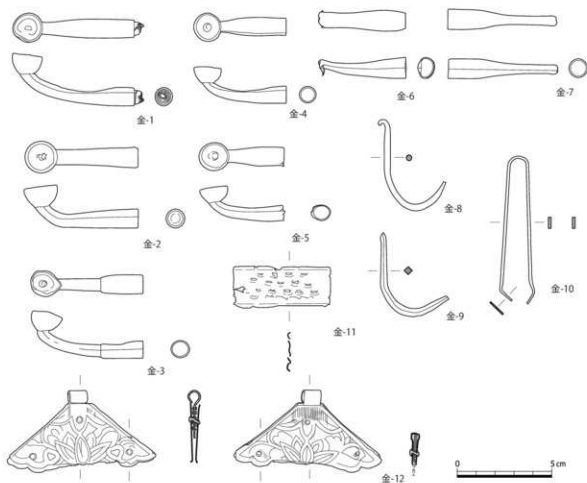


图19 土坑3出土金属製品実測图(1:2)

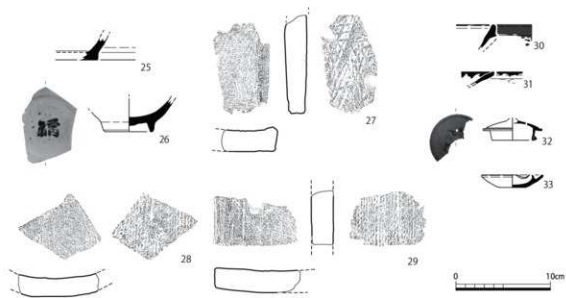


图20 溝1・土坑2出土遺物実測图(1:4)

た後、町屋が形成された時期に成立するものと考えられる。

今回の調査成果から確実に言えることは、溝1が最終的に近世に埋没したということであり、平安宮西限に関連すると断言できる遺構は検出できなかった。しかし、溝1は少なくとも、周囲の調査成果から復元されている平安宮西限溝の推定ライン上にあり、平安時代の区画が近世にも踏襲されていたことは確実である。

(清水早織・新田和央)

参考文献

- 調査地1：梅川光隆「平安宮西限跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1987年。
- 調査地2：辻 裕司「平安宮跡西限（1）」、『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 調査地3：吉本健吾「平安宮右近衛府跡、鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡立会調査概要』平成13年度、京都市文化市民局、2002年。
- 調査地4：辻 裕司「平安宮跡西限（2）」、『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 調査地5：津々池惣一「平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成25年度、京都市文化市民局、2014年。

Ⅲ-1 平安京左京北辺三坊七町・八町， 一条三坊十六町跡，公家町遺跡，内膳町遺跡， 新在家構え跡

1 調査の経緯

本件は、京都御苑内の中立売休憩所整備事業に伴う試掘調査である。平成28年10月27日に文化財保護法第94条に基づく通知がなされ、遺構面の把握を目的に試掘調査を実施した。調査は平成29年10月16日、17日、11月1日、2日、7日、10日、平成30年1月12日、4月26日、10月24日、11月20日の計10度にわたって、計30箇所を調査を実施し、公家町遺跡に関する遺構・遺物を確認している。調査面積は合計254㎡である。協議の結果、施工は遺構面への影響を極力小さくすることとなり、大部分の遺構面は保存されている。やむを得ず、遺跡に影響が及ぶ箇所については、試掘調査時に十分な記録の作成に努めた。

調査地は平安京跡および公家町遺跡、内膳町遺跡、新在家の構え跡に該当する。平安京の条坊では左京北辺三坊七町・八町および一条三坊十六町域に比定できる。北辺三坊七町には諸司厨町のひとつ、采女町が所在した（『拾芥抄』のち、平安時代後期に藤原季実の正親町となった。同八町は宇多天皇の愛妃、藤原（藤原）襲子（藤原時平の娘）の邸宅があったと推定されている¹⁾。左京一条三坊十六町は九条家本『延喜式』付図や『拾芥抄』に居住者の記述はあるものの、誰を指しているのか比定できていない。南側の調査区が含まれる新在家の構えは法華宗徒による洛中の構えで都市的性格が強く、元龜4年（1573）に織田信長の命で当地に移転してきた。公家町の形成によって、この地を離れることとなる。公家町は中世以来の禁裏御所、土御門内裏を核に形成された公家の集住地であり、豊田秀吉および徳川幕府の政策によって順次整備された。江戸時代を通して、幾度かの区画の再整備をおこなっており、時期によって居住者は変わるが、幕末段階での今回の調査地付近は、中立売通の北に施薬院および今出川家、南に日野家、烏丸家、毘沙門堂里坊、蛤御門北側に勤修寺家、穂波家が所在した。清華家である今出川家を除けば、すべて家格は名家であり、中立売御門から蛤御門の間は名家級の廷臣の居住区で

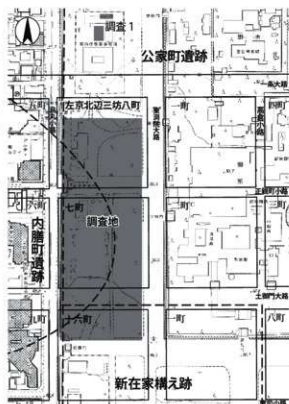


図21 調査位置図（1：5,000）

あったことが分かる。

京都御苑内で過去に行われた発掘調査のうち、今回の調査地に近いのは宮内庁京都事務所内で平成20年から同21年にかけて実施された発掘調査(図21-調査1)であり、ここでは摂家一条家邸宅にかかわる地下通路などの遺構を確認している²⁾。公家屋敷は家格によって、構造が異なる。平成9年から同14年に御苑北東の迎賓館建設に伴って実施した発掘調査地点は、名家や羽林家の邸宅が並ぶ一帯であるが、ここでは屋敷の区画施設として柵列を検出しており、築地塀による区画はされていないことが分かっている³⁾。

2 遺構

調査区は合計30箇所を設定したが、顕著な遺構を検出した中立売御門周辺(11区～17区)の成果を主に報告する。中立売通に並行し、北側に16・17区、南側に11・12・14区、中立売通に直交するように西側に13区、東側に15区を設定した。

11区 火災層上面で複数のピットを検出し、一部火災層下面まで掘り下げた箇所では南北方向

の溝を検出した。火災層は盛土直下で検出したことから、元治の大火(禁門の変・元治元年(1864))に伴う可能性が高い。以下、各区とも盛土直下の火災層は同様に認識している。

この溝は底部に上面が平らな石を並べ、黒褐色泥砂を埋土とする。火災層との間にはにぶい黄色粗砂層を挟んでおり、火災時点では埋没していたことが分かる。溝の側面には石を用いていない。

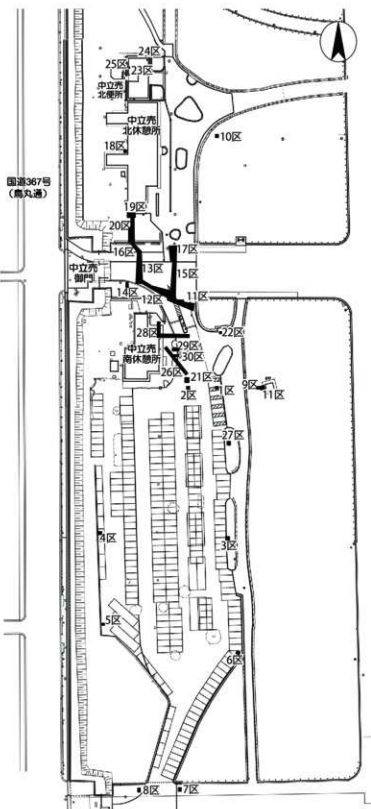
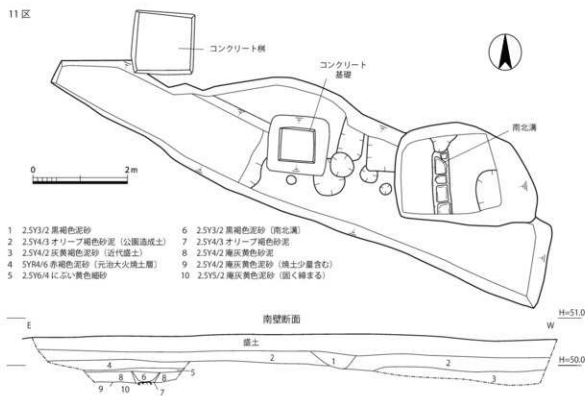


図22 調査区配置図(1:2,000)

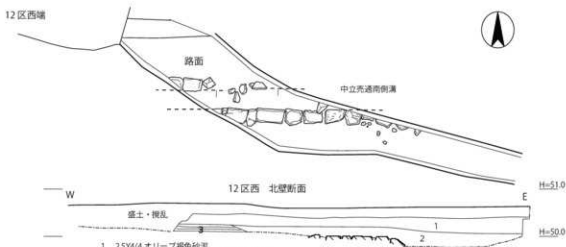
11区



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 | 6 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 (南北溝) |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (公園造成土) | 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 3 2.5Y4/2 灰黄褐色泥砂 (近代盛土) | 8 2.5Y4/2 麻灰黄色砂泥 |
| 4 5YR4/6 赤褐色泥砂 (元治大火焼土層) | 9 2.5Y4/2 麻灰黄色泥砂 (焼土少量含む) |
| 5 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂 | 10 2.5Y5/2 麻灰黄色泥砂 (固く締まる) |

図23 11区平面図・断面図 (1:80)

12区西端



12区東端



- | |
|--|
| 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
(φ10cm未満の礫、透堀、瓦片少量含む) |
| 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
(黒褐色シルトプロット含む、φ10cm未満の礫微量含む) |
| 3 3.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
(黄褐色泥砂が筋状に入る) (路面) |

図24 12区平面図・断面図 (1:40)

14区



石組溝北側立面

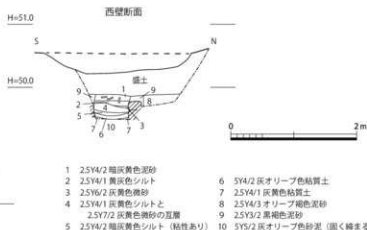
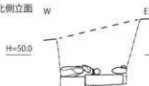


図25 14区平面図・断面図・立面図 (1:60)

15区東壁

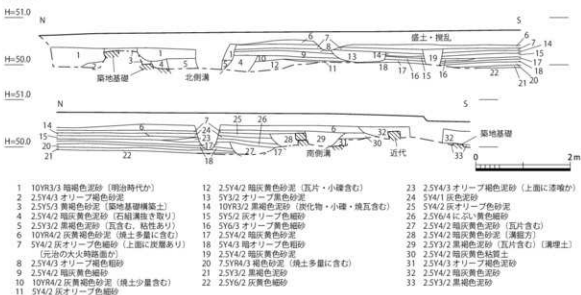


図26 15区断面図 (1:80) ※北端は17区を含む

屋敷地内から中立売通への排水機能を担った溝と考えており、屋敷地の区画も兼ねた可能性がある。

12区 東西方向に長く、西で北に振る調査区である。元治の大火に伴う火災層は確認できない。東西方向の石列と同じく東西方向の石組溝を検出した。石列は2列からなり、それぞれ外側に面を持つ。2列を合わせた幅は0.8m強となる。さらにいくつかの石にはホゾ穴が穿たれており、木材を立てるためのものであることが分かる。現在の京都御所や仙洞御所を囲む築地塼の基礎部分と同じ構造であることから、築地塼の基底部であろう。その北側2m程度の間を空けて、石組みの東西溝がある。溝幅は約0.4mである。この石組溝の北側は小礫をつき固めた路面、すなわち中立売通であり、石組溝はその側溝となる。工事に伴う掘削の影響が及ばなかったため、溝内の埋土は掘削していない。なお、14区でこの溝の続きを検出し、底部まで掘削している。

13区 中立売通を縦断する調査区であり、小礫をつき固めた路面を複数層検出した。並行する15区でほぼ同じ所見を得ており、概略は15区の項で記述する。

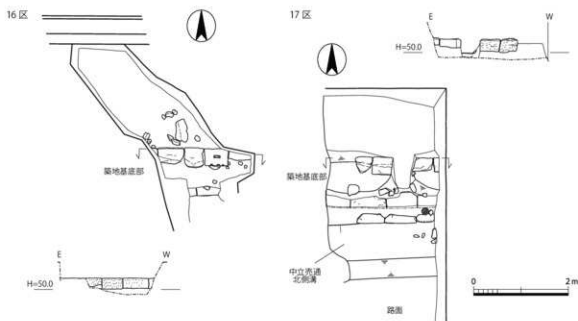


図27 16区・17区平面図・立面図（1：80）

14区 12区で検出した東西溝の延長部分を検出した。溝の幅は12区よりもやや広く、0.55m程度である。溝の石組みは2段確認できているが、断面の所見からさらにその上に1石あったと推定している。底部に粘性の強い土が堆積し、上層は砂質の土が堆積している。石組溝の直上からは盛土となることから、明治時代の公園整備直前まで機能した可能性がある。

15区 13区同様、中立売通を縦断する調査区である。北端で北築地および北側溝、南端で南側溝および南築地を検出している。7層の上面には炭層があり、元治の大火に伴うものと考えている。路面は少なくとも6層程度確認でき、出土遺物などから今回の掘削深度では、江戸時代前期以前の路面までは達していないと考えている。従って、中立売通（正親町通）がどの段階で成立したものは不明である。

16区・17区 中立売通北側の調査区であり、西側が16区、東側が17区である。16区では12区と同じく、築地基底部と推定できる2列の石列を検出した。17区でも同じく築地基底部と石組溝を検出した。両調査区で検出した築地基底部の幅は約1.0mであり、わずかながら南築地よりも幅が広い。石組溝は北側の石組みを確認できたが、南側は既設埋管による攪乱のため確認できていない。したがって、溝の幅は確定できないが断面の所見（図27）から1.1m程度と推定できる。溝は明らかに南側よりも幅が広い。北側には清華家の今出川家の屋敷が所在し、南側に居住した名家層の鳥丸家、日野家よりも家格が高い。また公家町内は基本的に北が高く、南に低くなる地形であり、北側宅地の排水を集める北側溝と、中立売通の排水を主に集める南側溝を比べれば、北側の方が排水量が多くなると推定できる。家格や地形などの複数の要因が溝幅の違いに現れているのであろう。

3 まとめ

今回の調査では、幕末段階の中立売通と公家屋敷との区画施設を検出した。道路の南北両側に石

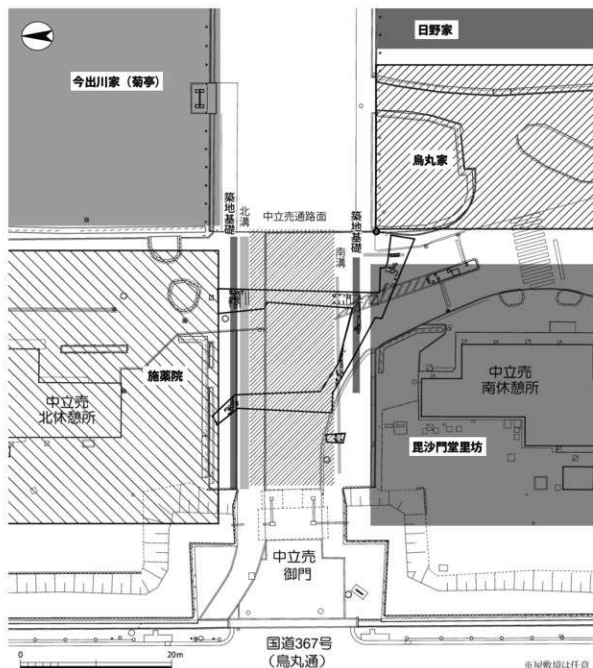


図28 中立売御門周辺の宅地と道路 (1:500)

組みの側溝を有し、さらにその外側は築地塀で区画したことが分かる。これは、中立売御門周辺の景観復元に大きく資する成果である。迎賓館地点の発掘調査では、二階町通沿い、中筋通沿いともに側溝およびピット群によって区画していることが分かっており、築地塀は用いていない。迎賓館地点に居住していたのは、柳原家や櫛笥家など、名家、羽林家の家格の公家であり、今出川家を除き、今回調査地点と大きくは変わらない。両地点の違いは中立売御門の存在が大きく影響していると考えられる。公家町には九つの門が設けられたが、中でも中立売御門は重要な門であり、後醍醐天皇の聚楽第行幸や、後水尾天皇の二条城行幸の出入りは中立売御門を用いている。御所にとってのいわば正門であり、家格の如何にかかわらず、築地を用いる必要があったのであろう。他の門周辺の状況はこれまで確認できておらず、今後の調査を経ての比較検討も必要であろう。

今回の調査では、公家町の構造を解明するための重要な成果を得た。公家町については、調査面積の大きい迎賓館地点の成果を代表させることが多いが、家格や地点などによつての振れ幅があり、一様に理解できるものではないことが分かる。今後も各地点の成果を積み上げることが、公家町の理解にとって重要である。

(新田和央)

註

- 1) 山田邦和「左京全町の概要」『平安京提要』1994年。
- 2) 丸川義広・小楡山一良「公家町遺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-5、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2009年。
- 3) 平方幸雄ほか「平安京左京北辺四坊」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2004年。



図29 11区南北溝(北から)



図31 15区東壁(西から)



図30 12区築地基礎底部および石組溝(東から)



図32 17区築地基礎底部および石組溝(北東から)

Ⅲ-2 平安京左京一条三坊十五町・十六町跡， 新在家構え跡，旧二条城跡

1 調査経過

調査地は、御苑内の皇宮警察本部敷地内に位置する（図33）。御苑西辺に立地し、北には蛤御門、南には出水口が存在する。今回、敷地内に計画された京都護衛署改修工事にあたり、深掘するハンドホール部分については試掘調査を、周辺の配管工事部分については、詳細分布調査をおこなった。本稿は、このうち後者に係る報告である。

調査地は、平安京左京一条三坊十五町、十六町の西半部のほか、法華宗徒によって造られた新在家の構え跡と、足利義昭の將軍邸である旧二条城の一部に含まれる。左京一条三坊十五町は、藤原道長の邸であるとともに一条天皇、三条天皇の里内裏であった「枇杷殿」が存在したという地歴をもつ。また、江戸時代以降は公家の邸宅が立ち並ぶ区画であったことが知られており、天保8年（1837）刊行の『再刻 内裏図』には、「庭田殿」「六条殿ヤシキ」「小倉殿」「中山殿ヤシキ」「八條殿」等の屋敷名のほか、「禁裏御修理小屋」とその棟梁が居住する「棟梁ヤシキ」の記入を認めることができる（図34）。

試掘調査では、GL-0.1mの深度において、幕末期の遺物を含む大型遺構や、蛤御門の変に由来すると推測される焼土が多量に出土した（図33①）。また今回の調査に先立つ試掘調査（図33②）では、同じくGL-0.1.3mの深度において江戸時代の整地層が確認されており、以下、礎石を有する柱穴や土坑を伴う遺構面が3面以上検出されている。このほか図33③地点では、中山家屋敷の北限に比定される地点より江戸時代後期の石組み溝が検出されたことから、今回の調査においても同様の成果が予測された。



図33 調査地位置図（1：5,000）

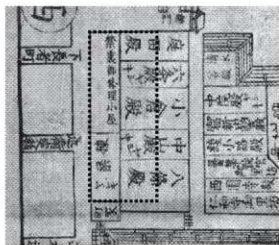


図34 『内裏図』に描かれた幕末の調査地周辺

2 調査成果

今回の調査では、計4箇所において断面観察及び平面検出を実施した。

1地点では、GL-0.38mまで盛土、-0.55mまで鈍い黄褐色砂質シルト（近世後期包含層）、以下、掘削底である-0.64mまで褐色礫混じりシルト（近世包含層）の存在を確認した。また2地点では、GL-0.2mまで盛土、-0.44mまで瓦や炭を含む黒褐色礫混じりシルト（近代堆積層）、-0.56mまで焼土を含む暗褐色シルト（蛤御門の変相当層）があり、以下、掘削底である-0.68mまで黒褐色礫混じりシルト（近世包含層）の残存を確認した。この2地点では明確な遺構は検出できなかった。

一方、弓道場付近にあたる3地点では、GL-0.4mまで盛土があり、その直下において近世後期の盛土と石列を検出した（図36）。石列は幅1mの範囲内に2列構築されており、それぞれ北側と南側に平面を持つよう配置されている。検出長は0.6mに満たないが、ほぼ直線状に連続すると見られる。このため、屋敷地を限る築地塀の基底部である可能性が高い。特に北面に一辺40cmを超える大型石を配することから、屋敷地の南限となる施設であると推測される。図2を参照するならば、庭田家屋敷の南築地に比定される。なお、盛土を覆う層からは江戸時代後期の土師器皿、瓦質土器鉢、平瓦が出土した。

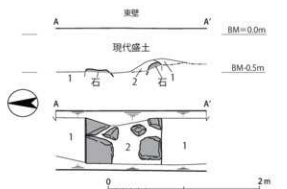
3 まとめ

以上のとおり、当該敷地には、幕末期以前の包含層及び遺構面が、ほぼ全面にわたり良好に残存することが明らかとなった。後世の土地開発の影響がほとんど認められないことから、今後は小規模な掘削であっても継続的に調査を重ねていく必要がある。

（黒須亜希子）



図35 遺構位置図（1：500）



- 1) 10YR3/2 黒褐色シルト 焼土、炭化物含む
- 2) 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 締まり良い（盛土）

図36 遺構平面断面図（1：50）

Ⅲ-3 平安京左京四条四坊一町跡，烏丸御池遺跡

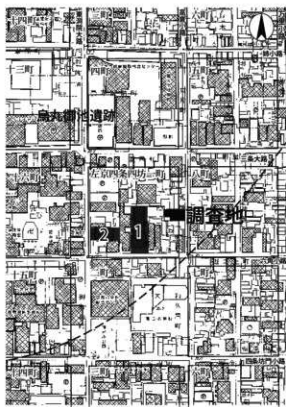
1 調査の経緯

本件は、宿泊施設建設にともなう試掘調査である。調査地は中京区高倉通り三条下る丸屋町に位置し、周知の埋蔵文化財「平安京左京四条四坊一町跡」および「烏丸御池遺跡」に該当する。

当該地は西を東洞院通、南を六角通が限り、西隣の四条三坊十六町には六角堂が所在する。平安時代前期には民部卿源俊明の邸宅が六角東洞院に一町家で造営されたといひ（「中右記」）、鎌倉時代には幕府の京都守護代源朝雅（平賀朝雅）の宿所が六角東洞院にあった（「吾妻鏡」・「明月記」）。周辺には三条高倉に鳥羽天皇の皇后待賢門院御所（「台記」）、三条東洞院には崇徳上皇御所（「百練抄」）があったと伝わり、貴族邸宅が建ち並ぶ一等地であった。また当該地の中核的存在として大きいのは六角堂であり、12世紀初頭には観音の緑日に貴族・庶民をとわず多くの人が参詣したという（『史料京都の歴史』）。中世には武士や商人などの様々な階層が居住し、商工業の担い手による街の賑わいは今日まで継続している。

周辺では多くの発掘調査が行われており、四条四坊一町では町の南半で平成9年に古代文化調査会¹⁾（図37-1）が、東洞院通り側で昭和53年に京都市埋蔵文化財研究所に調査²⁾を行った（図37-2）。

当該地では、宿泊施設建設のための文化財保護法93条の届出にもとづき試掘調査を平成30年9月25日に実施した。その結果、当該地の北側大部分を占める既存建物下は基礎によって壊されていることが判明した。ただし、残存面積は小さいが南側の敷地では遺構面が一部良好に



1. 97H155 膝屋町 H9年古代文化調査会
2. 昭和53年 京都市埋蔵文化財研究所

図37 調査位置図（1：5,000）

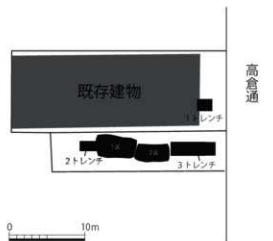


図38 調査区配置図（1：5,000）

残っており（図38）、当該地域の歴史的な重要性を踏まえ、追加の調査を行う事となった。追加調査は施主の御協力をいただき11月21日・22日に実施した。

2 調査区と層序

9月25日の試掘調査では、合計3つのトレンチを設定し調査をおこなった。その結果、1トレンチでは掘削深度2m以上の攪乱、高倉通側の3トレンチでは、多量の焼けた残瓦を含む幕末の火災処理土坑で大きく攪乱されていることを確認した。このため高倉小路の築地跡および側溝は検出できなかった。これに対し敷地西側の2トレンチでは各遺構面が良好に残っている様子が確認できた。

2トレンチの層序（図39）はGL-0.75mで暗灰黄色砂泥とその上面から掘り込まれた土抔（層1）、-1.35mで黒褐色泥砂（土坑か？）、-1.6mで所謂ウグイス色整地層である黄灰色砂泥と土坑（層8）、-2.1mで暗灰黄色細砂～粗砂（地山か）である。GL-0.75mで検出した面は戦国時代から江戸時代の中頃の年代観が推定され、以下に室町・鎌倉時代、平安時代の遺構面があると考えた。

この結果をうけ、追加調査では、対象地中央に調査区を設けた。既存建物の解体作業が継続中であつたため、残土置場確保のため便宜上2区にわけて調査を行った。

追加調査の基本層序（図40）は、1区：GL-0.6mでにぶい黄褐色粗砂からなる近世整地層、-0.8mでにぶい黄褐色砂泥（上面が第1面以下同じ）、-1.1mで褐灰色泥砂（第2面）、-1.25mで黒褐色粘質土、-1.6mで暗灰色泥砂からなる所謂ウグイス色整地層（第3面）、-1.85mで灰黄色極細砂～粗砂からなる地山である。平面検出は3面を行った。地山直上は、重機の掘削可能深度を越えていたため、バケツが届く範囲のみの確認しかできず、部分的な断面観察しか行っていない。中世の遺構などに壊されており烏丸御池遺跡に関する遺構・遺物は見つからなかった。

2区：GL-0.7mでにぶい黄褐色砂泥、-1.0mで褐灰色泥砂、-1.2mで褐灰色泥砂（第1面）、-1.5mで黄灰色泥砂、-1.8m黄灰色砂泥、-2.1mでにぶい黄色極細～粗砂（第2面）である。平面検出は2面おこなった。GL-1.0m以下が室町時代以前の地層と考えられる。2区では1区で確認できなかった地山上面を平面的に検出したが、上層の遺構に攪乱されており、烏丸御池遺跡に関する遺構・遺物は確認できなかった。

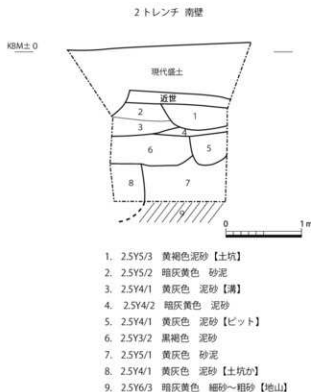


図39 2トレンチ南壁断面図（1：50）

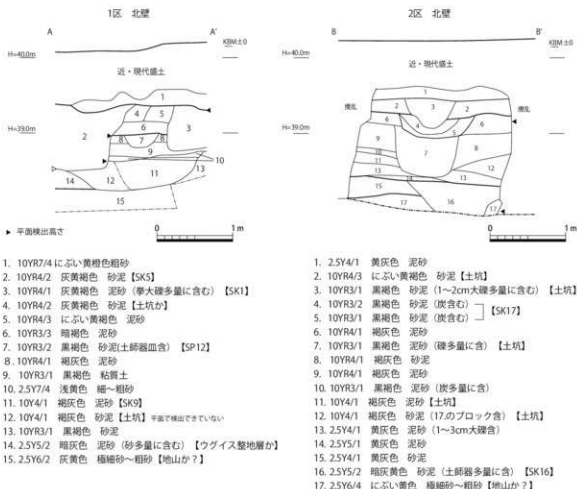


図40 1・2区北壁断面図(1:50)

3 遺構

(1) 平安時代～鎌倉時代の遺構(図41-1)

今回の調査では本来は複数あるはずの平安時代の整地層の精査はできず、1区は暗灰色泥砂上面、2区では黄色極細砂～粗砂からなる地山の上面で、平安時代中期、後期～鎌倉時代の遺構を検出した。

SD10 1区で検出した溝状遺構である。東西方向にのび幅0.3m、深さ0.15mであった。埋土は2.5Y3/1黒褐色砂泥であった。少量だがIV期中段階の土師器皿が出土しており、平安時代中期の遺構と考えられる。

SK16 2区で検出した土坑である。南肩をSK14に切られている。東西1.0m以上南北1.0m以上、北壁で確認した深さは0.4mである。埋土は灰黄褐色砂泥で多量の土師器皿を含んでいた。土師器皿はIV期中段階の様相をしており、11世紀中頃、平安時代中期の遺構と考えられる。

SK9 1区で検出した土坑で東西1.1m南北0.8m以上となる。深さは北壁で0.4m(1区北壁層11)埋土は褐灰色泥砂であった。

SE14 2区で検出した井戸で直径1.2mの不整な円形をしている。上半を後述するSK17(墓)に

图 41-1 平安時代～鎌倉時代

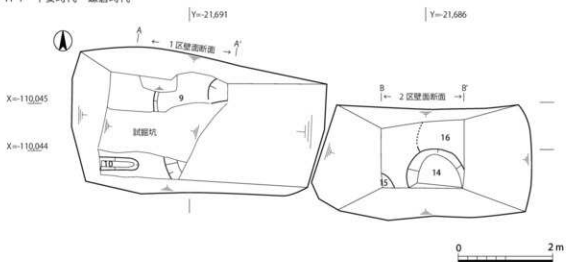


图 41-2 鎌倉時代～室町時代

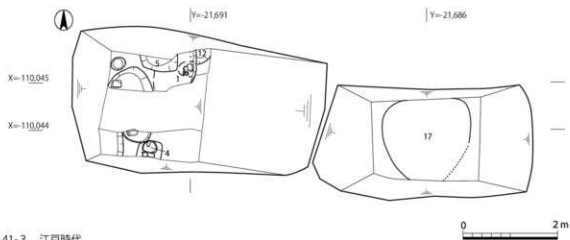


图 41-3 江戸時代

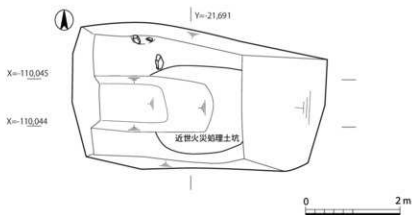


图 41 1·2区遺構平面图 (1:50)

壊されている。南壁で確認した深さは0.6m、東肩は攪乱に切られているが、部分的に人頭大の石が残ることから石組みの井戸であった可能性がある。埋土は粘質土を含む黒褐色泥砂であった。少量だがⅥ期古～中段階の遺物をふくみ、鎌倉時代の遺構と考えている。

SP15：2区で部分的に検出した小穴で南北0.3m以上、東西0.3m以上の規模となる。南壁ではにぶい黄色細砂からなる整地層の上面から掘り込まれているのを確認しており、埋土は炭が混じる黒褐色泥砂であった。少量だが鎌倉時代の土師器が出土している。

(2) 鎌倉時代～室町時代の遺構 (図41-2)

SP4 1区で検出したピットで、掘形は東西0.5m南北0.4m以上、柱当は直径0.3mの円形で北よりに検出した。埋土は10YR4/1 褐色泥砂である。少量だがⅥ期の土師器皿が出土しており鎌倉時代の遺構と考えられる。

SK5 1区北壁側で検出した土坑で東西0.8m南北0.3m以上を測る。上半を削平した状態で平面的に検出したため小さくなっているが北壁で確認した深さは0.9m(1区北壁層2)あり、幅も1m以上あったと考えられる。埋土は灰黄褐色砂泥である。

SK17(墓) 2区で検出した土坑で、東西1.7m、南北1.7m以上の不整な円形をしている。深さは0.6mで埋土は黒褐色泥砂で炭を多量に含んでいた。多量の土師器、木質が付着した釘、銭などが出土しており、精査できていないが土壇墓の可能性が高い。土師器皿はⅦ期中段階の様相を示しており、13世紀末～14世紀前半の年代観が考えられる。

その他 1区では、遺構面の残りを確かめるため2トレンチ第1面で平面精査をおこなった。その結果、根石を含む柱穴を1基と1区東半が幕末の火災埋土坑で攪乱されている状況を検出した。



図42 1区北壁断面(南から)



図43 1区2面全景(東から)



図44 2区最終面全景(西から)

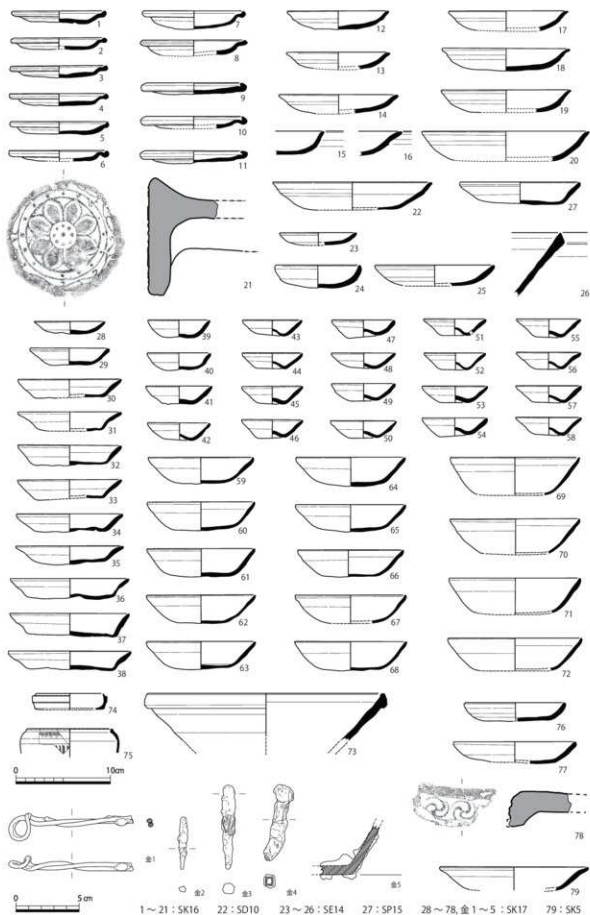


图 45 出土遺物実測図

4 遺物

調査面積は狭小ながら、多量の土師器皿や青白磁などが出土した。遺物は平安時代のものと南北朝期のものが主体である。

SK16 多量の土師器皿と細片のため図化できなかったが白色土器高杯の口縁部、軒瓦21が出土した。1～8までは土師器皿Aで口径10.0～11.3cm, 9～11は皿Acで口径11.2～11.4cm, 12～20は皿Nで口径10.8～11.0cm, 12.6cm, 13.2～13.8cm, 17.8cmである。9～11の底部には口縁部を調整する工程の名残と推定されるナデがまわり、IV期から見始めるAc出現期の特徴をしめしている。これらはIV期中段階の様相をしめしており11世紀中頃の年代観が考えられる。

軒瓦21は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。文様構成は中房は凹型で1+8の蓮子を配す。花卉は凸型の輪郭線で先端が界線と接する。外区には珠文と唐草が巡る。調整技法は瓦当成形は瓦当貼り付けて、瓦当裏面に補足粘土を加えナデる。瓦当から丸瓦部凸面にかけて縦ナデ、瓦当側縁押さえ、丸瓦部凹面は布目を残し、側縁面取りを施す。胎土は多量の砂粒を含む、焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。11世紀中頃、池田瓦窯産である。

SD10 図化できたものは1点で、22はIV期の土師器皿Nである。口径は16.8cmある。

SE14 土師器皿、東播系須恵器鉢、図化できなかったが丸瓦・平瓦が出土した。23～25は土師器皿N, 26は東播系須恵器鉢で内面はかなり磨滅している。VI期。

SP15 図化できたものは1点で、27はVI期の土師器皿Nである。口径は12.8cmである。

SK17 (墓) 多量の土師器皿、東播系須恵器鉢、青白磁合子・小壺、軒丸瓦、釘、金属製品、銭などが出土した。28～38は土師器皿N, 39～41, 59～72は皿S, 42～58まではShである。Nは口径7.5cm・8.5cmと10.9～11.4cm, 12.6～13.0cmの3群にわかれ、Sは6.7～7.0cm, 11.2～11.9cm, 13.8～14.2cmの3群、Shは口径6.3～7.1cmであった。51は底部と体部の境目あたりに直径1mmの穿孔がある。焼成前にあけられていた。73は東播系須恵器鉢である。74は青白磁合子で内面は全面施釉、外面は胴部のみ施釉で、口縁部と底部は露胎である。75は青白磁の小壺である。金1はカギ状金属製品で二本の針金をねじって成形する。金2～5は釘で、図化したものその他10片以上が出土した。金3には木質が遺存していた。他にも錆の塊に木質が遺存しているものがあった。金5は錆がかなりわまっているため詳細は不明だが、錆だと考えられる。これらはVII期中段階の様相を示す。なお銭は、拓本・実測に耐えられる個体がなかった。

このほか古手の遺物の混入品として土師器皿Nの76・77、軒平瓦78が出土した。78は連巴文軒平瓦で右巻の巴文を配す。製作技法の特徴は瓦当成形は折り曲げ。瓦当面上端部はケズリ、凹面布目、顎部凸面横ナデ、平瓦部凸面から裏面にかけてナデ、側縁面取りを施す。胎土は砂粒を含む、焼成は硬質である。生産年代は12世紀頃である。76～78は重複している下層遺構SE14の遺物だと考えられる。

SK5 図化できたものは1点で、79は土師器皿Sである。口径15.8cmである。

5 まとめ

今回の調査は調査面積23.5㎡ではあったが、3面以上の遺構面と南北朝期の墓、鎌倉時代の土坑、平安時代中期の土坑などを確認することができた。南北朝期の墓は、土師器皿が多量に埋納されていることと鉄釘が出土することが特徴で、下京域で南北朝期に盛行する土壇墓（京都下京型土壇墓）だと推定される。この墓は下京の商・工業の担い手との関係が指摘されているが³⁾、当該地周辺では、四条烏丸周辺に比べて検出率が少ない。今回調査では精査できなかったが、六角堂に近い当該地でも墓が検出された意味は大きい。また、今回の調査区では、大きな土坑は通りに近い2区で、柱穴は1区で検出される傾向にあった。

ほかに、平安時代中期の土坑SK16からは、多量の土師器皿のほか図化できなかったが白色土器の高杯が出土した。本遺構の出土土器と同時期の遺物は周辺の発掘調査でも見つかっており、大口径の皿が含まれていることから、当該地の所在する左京四条四坊一町にも貴族邸宅にかかわる施設があった可能性がある。

本町では、六角通に面した場所で、平成9年に古代文化調査会が発掘調査（図46）をしており、平安時代から室町時代までの多くの遺構を検出している。遺物は弥生時代から中世にいたるまで整理箱で150箱におよぶ。

この調査では平安時代の遺構が複数確認されている。11世紀中葉の土師器皿が多量に出土した土坑420、11世紀後葉の土師器皿が出土した溝398・461のほか、一町の中央部に位置する調査区の北側で池（遺水）460が検出された（図47、48）。溝と小さな池跡で構成されており、池の遺水跡と推定されている。溝は最大幅1.5m、深さ0.1m、東西約3m、池は最大幅2.7m、深さ0.7m、長さ6mを確認している。溝から池へは瀬落としの造作がしてあり、盛土上に長径0.8m、短径0.5m、厚さ0.4mの礎石を転用した花崗岩の景石が置かれていた。池460からは12世紀初めの大量の土師器皿が出土したという。

本町の平安時代中期以降は文献史料などから明確な持主を特定できないが、平安時代の中期以降には活発な利用があったと推定される。以後も遺構密度は高く、六角堂の近隣という場所柄もあり、通時代的に栄えていた様子が想像される。

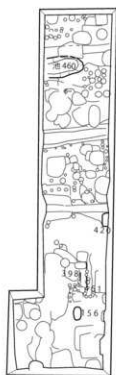
（赤松佳奈）

注

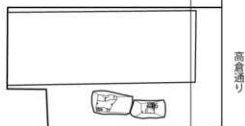
- 1) 古代文化調査会「97H155 平安京跡」終了報告 1997
- 2) 「18 平安京左京四条四坊一町」『昭和53年 京都市埋蔵文化財調査概報』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011
- 3) 柏田有香、「中世京都、下京の墓」、『第13回出土銭貨報告会2014年 出土銭貨報告会発表資料』、出土銭貨研究会、2014年。

参考文献

京都市、「日影学区」『史料京都の歴史 第9巻 中京区』、1985年。



97H155 古代文化調査会 H9



本調査地

左京四條四坊一町築地推定線

高倉通り

六角通り



図46 左京四條四坊一町跡で調査された平安時代の主要な遺構（1：500）

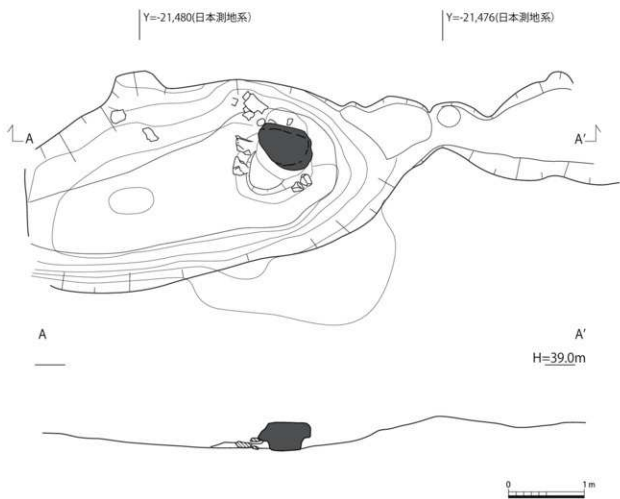


图47 97H155 池460平面図・断面図(1:50)



图48 97H155 池460検出状況(東から)

Ⅲ-4 平安京左京五条三坊十三町跡・烏丸綾小路遺跡

1 調査の経緯

本件は、ホテル新築工事に伴う試掘調査である。対象地は下京区東洞院通高辻下る灯笼町562ほかに所在し、因幡堂平等寺の北東にあたる(図49)。平安京左京五条三坊十三町跡の北東に該当し、敷地の東半に東洞院大路西薬地心が復元されている。「拾芥抄」によると、当該町は平安時代には因幡堂平等寺の寺域とされている。

周辺の調査では、発掘調査(調査1)や試掘調査(調査2・3)などが行われている¹⁾。いずれの調査でも平安時代から江戸時代までの遺構が多数確認されている。特に調査1では、G L -1.12mで室町時代の溝や土坑、-1.6mで鎌倉時代の土坑や東西方向の濠、-1.95mの地山上面で平安時代の溝や土坑が確認され、長期にわたり土地利用が行われていたことが分かっている。

今回の調査では、東洞院大路西薬地及び左京五条三坊十三町内の状況把握を目的として調査を行った。

2 層序と遺構

対象地の中央に東西方向の調査区を設けた(図50)。

近現代盛土の下、G L -1.2mで近世の整地土である黄灰色礫混じり粘質土、-2.0~2.2mで室町時代の整地土である黄灰色粘質土、-1.9~2.3mでにぶい黄色シルトの地山、-2.0~2.4mでオリブ黄色砂礫混じりの細砂の地山に至る(図51)。

遺構検出は地山上面で行った。結果、近世の土坑や溝が大半を占めるものの、一部、平安時代から室町時代と考えられる南北方向の溝2条と柱穴2基を確認した。

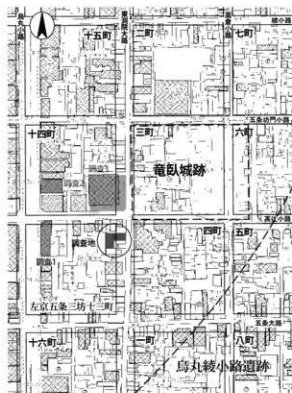


図49 調査位置図(1:2500)

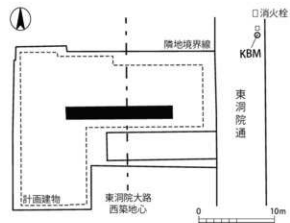


図50 調査区配置図(1:500)

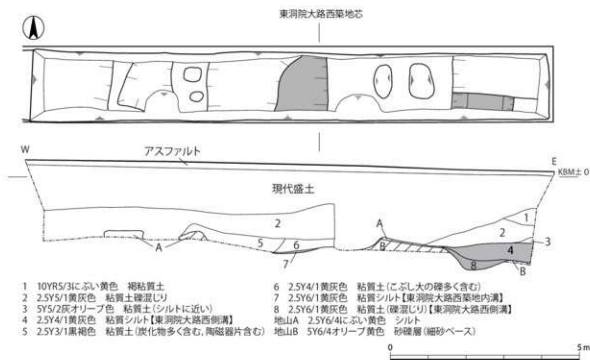


図51 調査区平面図・断面図 (1:100)

確認した南北溝はその検出位置から、東側の溝が東洞院大路西側溝、西側の溝が東洞院大路西築地内溝と考えられる。内溝の堆積土は2cmほどしか確認できなかったが、大路西側溝は幅2.5m以上、深さ0.75mを確認した。西側溝の埋土は上下2層に区分でき、上層(4層)には近世の遺物が含まれる。下層(8層)からは、土師器や須恵器、瓦など平安時代後期の遺物が出土した。最終埋没土と考えられる上層が近世に埋まっていることから、長期間にわたり溝が踏襲されていたことが分かる。

3 出土遺物

東洞院大路西側溝の下層(8層)から遺物が出土しているものの、いずれも細片で、図化できるものは少ない。一部図化できたものを報告する(図52)。

1～4は土師器皿である。1は内湾する口縁部に二段ナデを施す。2は口縁部にナデを施した後、端部を上面に摘み上げ、端部外面に面を持たせる。3は口縁部に強いナデを施し屈曲させ、端部を摘み上げる。4は口縁部にナデを施し外反させた後、端部を丸くおさめる。5は灰胎陶器である。口縁部は外反し、端部外面に面を持たせ、断面三角形に仕上げる。6は平瓦である。胎土は砂を多く含み、やや黄色みを帯びる。凹面に布目痕が確認できる。これらのことから、平安時代後期と考えられる。

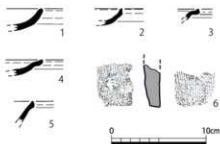


図52 出土遺物実測図 (1:4)

4 まとめ

今回の調査では、東洞院大路西側溝及び東洞院大路西築地内溝と考えられる溝を確認した。これまで東洞院大路西側溝は、発掘調査や試掘調査などで数多く確認されている。しかし調査地にもっとも近い検出事例は、北側で左京三条三坊十三町跡内²⁾、南側で左京六条三坊十四・十五町跡内³⁾と、やや離れている⁴⁾。今回、この範囲で西側溝及び築地内溝の一部が確認でき、条坊施工についての良好な資料を得ることができたといえる。

(奥井智子・廣富亮太)

註

- 1) 調査1：「15 左京五条三坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983。
調査2：「3 平安京左京五条三坊(HL159)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1986。
調査3：「調査一覧表平成2年度 4～12月期 五条三坊十四町(10-132)」『京都市内遺跡試掘調査立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991。
なお、対象地についても昭和56年に立会調査が行われている記録は残るが、未報告である。(「調査一覧左京四・五条三坊 図版34 56」、『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』)
- 2) 「平安京左京三条三坊」、『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995。
「平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡」、『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2016-10』(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2017。
「II-1 平安京左京三条三坊十三町・烏丸御池遺跡(17H035)」、『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』, 2018。
- 3) 「14 平安京左京六条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1991。
- 4) 左京五条三坊十六町跡内で東洞院大路西側溝の推定位置で南北方向の溝(SD1330)が確認されている。この溝は室町時代末から桃山時代頃に開削され、江戸時代には埋め戻されたと考えられている。またこのSD1330より古い時期とされているL字に曲がる溝(SD1314)の南北方向部分も東洞院大路西側溝の推定位置に位置するが、古い神社を取り囲む溝の可能性が示されている。SD1330が東洞院大路西側溝の影響を受けている可能性は否定できないが、東洞院大路西側溝である可能性も低い。このため今回、この事例については保留とする。
『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会 1998。

Ⅲ-5 平安京左京八条二坊一町跡・東市跡

1 調査の経緯

本件はホテル新築工事に伴う試掘調査である。対象地は、左京八条二坊一町跡の西辺中央にあたり、大宮大路東築地想定位置及び、東市外町にあたる(図53)。対象地周辺では、龍谷大学学舎を中心に多数の発掘調査が行われており、対象地の北側に近接する平成20年(調査1)の発掘調査¹⁾、対象地の南隣接地で平成25年に行なわれた発掘調査²⁾(調査2)などがあげられる。これらの調査では概ねGL-0.4～1mの間で、大宮大路東築地の内溝をはじめ平安時代前期、平安時代後期から中世、中世末から近世の建物や溝、土坑、井戸などのほか、鑄造関連遺構なども確認されている。

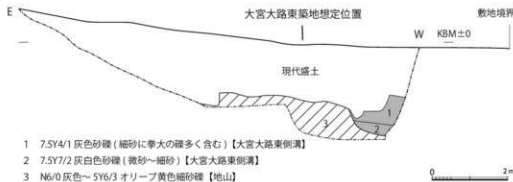
今回、隣接地で確認されている遺構の有無を確認するために、調査を行った。



図53 調査位置図(1:2,500)

2 層序と遺構

調査区は、大宮大路東築地想定位置を含むように設定した。現代盛土以下、GL-1.3～1.6mで灰色～オリーブ黄色細砂礫の地山に至る。対象地の大半が既存建物基礎により削平を受けており、調査区西端の地山上面で南北方向溝を1条確認できたのみである。溝埋土は上下層に区分でき、上層は細砂や拳大の礫を多く含む灰色砂礫、下層は灰白色微砂や細砂を含む砂礫である。下層には13世紀前半と考えられる土師器や瓦器の小片が少量含まれている。この溝は大宮大路東築地想定位置より西側で確認していることから、大宮大路東側溝の可能性が高い。



- 1 7.5Y4/1 灰色砂礫(細砂に拳大の礫多く含む)【大宮大路東側溝】
- 2 7.5Y7/2 灰白色砂礫(微砂～細砂)【大宮大路東側溝】
- 3 N6/0 灰色～5Y6/3 オリーブ黄色細砂礫【地山】

図54 南壁断面図(1:100)

3 まとめ

今回の調査で確認した南北溝は、大宮大路東築地想定位置付近で確認したことから、大宮大路東側溝と考えられる。また今回の調査区の北隣接地、南隣接地で行われている発掘調査で確認されている同大路東築地内溝（北側：SD85、南側：SD2103）よりも約2m、西に位置していることも（図55）、東側溝である傍証となる。

（奥井智子・廣富亮太）

註

- 1) 調査1：「平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査」, 龍谷大学, 2009。
- 2) 調査2：「平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 龍谷大学大宮学舎白亜館建設に伴う発掘調査」, 龍谷大学, 2011。

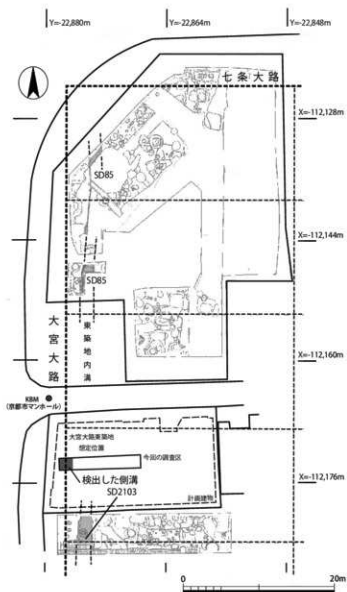


図55 周辺調査との関係（1：500）

Ⅲ-6 左京九条四坊一町跡，烏丸町遺跡

1 調査の経緯

本件はホテル新築にともなう調査である。試掘調査（平成29年9月4日）では，東洞院大路東築地推定位置の掘削が不可能であったため追加で調査を行った。

調査地は京都駅の南側，南区東九条東山王町14-1に位置し，平安京左京九条四坊一町跡および烏丸町遺跡に該当する。同町は平安時代後期の権中納言藤原長実創建の寺院「弘誓院」やその邸宅「八条第」があったとされる。周辺の調査事例では，当該地より東側は河川の氾濫堆積が広がっており遺構・遺物があまり確認されないが，東洞院通の西側で昭和54年度に実施された発掘調査⁽¹⁾では，平安時代～鎌倉時代に活発な土地利用があったことがわかっている。当該地の試掘調査では氾濫堆積が広く分布しており，遺構・遺物は希薄であった。このため追加の調査は東洞院大路の側溝や築地跡を確認することを目的として平成30年5月28日に行った。

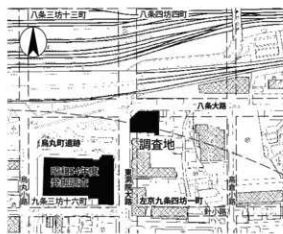


図56 調査位置図（1：5,000）

2 層序と遺構

調査は築地推定ラインを挟むようにトレンチを設定し東側から西に向かって掘削を行った。この結果，敷地西端から7mの地点，現地表（以下GL）下0.7mで南北方向の溝を検出した（B-B'）。東洞院大路の東側溝の可能性があるため，残土置場を確保する目的で，一部を埋戻し，トレンチを西側に展開させ溝の続きを検出した（A-A'）。

検出した溝は，幅2.4m，深さ0.6mである。上部は平安時代末～鎌倉時代の遺物を含みブロック土を含む暗灰黄色泥砂で埋められていた。肩および底は，地山の砂礫が崩れたもので埋まっていた。溝の両サイドにはわずかに包含層が残っており，GL-0.8mで暗灰黄色泥砂，-1.0mで黄褐色細砂からなる整地層の可能性のある地層を確認した。以下は氾濫堆積からなる



図57 遺構位置図（1：1,000）

所謂地山で側溝の東側はGL-1.0m、西は-1.3m以下灰黄色の砂礫であった。

3 まとめ

今回の調査では東洞院大路東側溝を検出し、八条大路以南にも東洞院大路が整備されていたことを確認した。周辺の調査事例から東洞院大路より西には遺構が展開するが、東側は氾濫堆積層が広がり遺構が希薄であることがわかっている。鴨川に近い平安京の南東域では東洞院大路が大きな役割を果たしていたと推測される。

(赤松佳奈)

註

- 1) 「29平安京左京九条三坊十六町」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2012

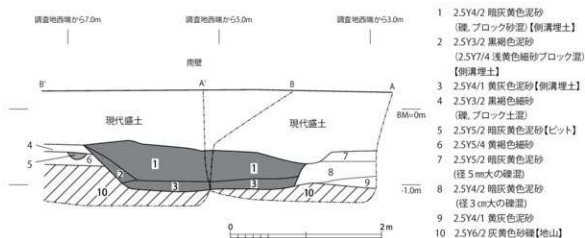


図58 側溝断面図 (1:50)



図59 側溝東側 (B-B'間断面) (北から)



図60 側溝西側 (A-A'間断面) (北から)

IV-1 平安京右京一条二坊十四町跡，御土居跡

1 調査の経緯と経過

調査地は北区大宮西脇台町内に所在する大宮交通公園内（A地点）と中京区西ノ京円町に所在する円町公園内（B地点）である。A地点は周知の埋蔵文化財包蔵地「御土居跡」、B地点は「平安京右京一条二坊十四町跡・御土居跡」に該当する。

A地点の大宮交通公園は、昭和44年に整備された交通公園であるが、地域の防災機能の向上を図るため、公園内に消防局を移転させる計画がなされ94条の通知が提出されたため5月14日と15日及び6月4日に試掘調査を実施した。公園内には天正19年（1591）豊臣秀吉が築いた「御土居跡」の土塁の一部が遺存しており、当該地の測量図を見ると、昭和26年頃までは土塁の北側に土居堀が開口していたことが分かる。このように、公園内には史跡相当の「御土居跡」が残されていることが明らかであり、計画は、「御土居跡」を十分に保護した上で進めることが必要となった。そこで、「御土居跡」の正確な位置を把握する必要がある、京都市建設局みどり政策推進室と協議を重ね公園南西隅地に6箇所の調査区を設定した。このうち1～3区は推定土塁内側（南側）、4・5区は推定土塁、5・6区は推定堀の両肩口に設定した。

B地点は、円町公園の再整備に伴う調査である。公園内のトイレ設置箇所および電線引き込み箇所についての記録をとることを主な目的とし、8月22日に実施した。円町公園の現況は、周辺部分より一段高くなっており、御土居跡の推定線にのった南北に細長い現況地割りから、地層が良好に残っていることが推定された。調査区は工事掘削の予定箇所に設定し3区の調査を行った。



図61 A地点調査位置図（1：5,000）



図62 B地点調査位置図（1：5,000）

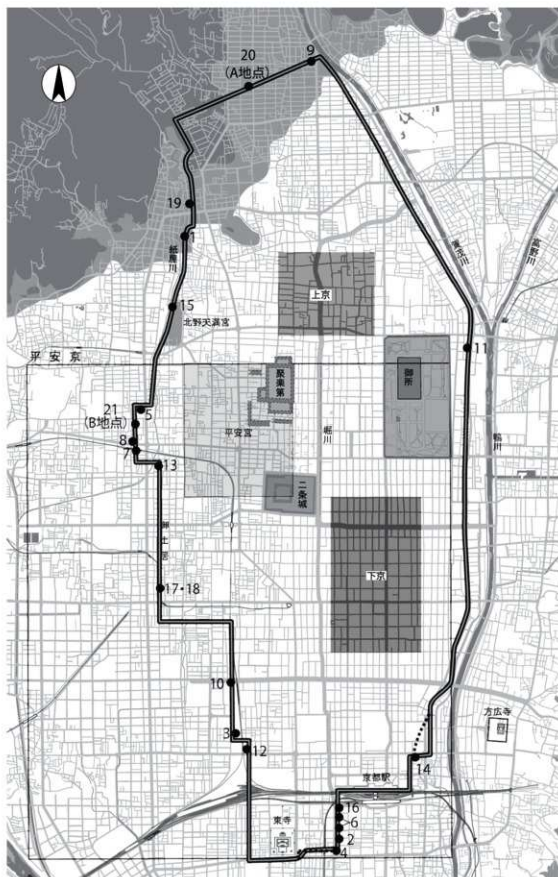


图63 御土居跡調査地点图 (1 : 40,000)

表4 御土居跡調査履歴一覧

調査No.	調査地	調査期間	調査概要	文献
1	北区次笠寛見町(旧野口町)	1918	測量	『京都市史蹟踏査調査報告書』第2冊
2	南区西九条春日町13(九条弘道小学校)	1980.09.16~ 1980.10.09	堀を掘出。東西幅約17.5m、深さ約2mを測る。堀は江戸時代を通じて湿地帯あるいは水路として存続し、近代になり完全に埋没する。	『財』京都市埋蔵文化財研究所2011『平安京左京九条二坊十三町』『昭和55年 京都市埋蔵文化財調査概要』
3	下京区朱雀堂ノ町	1982.01.27~ 1982.10.15	土塁と堀を掘出。土塁は幅15m、高さ2m、堀は南北幅20m、深さ2mを測る。底に凹凸が認められる。堀から、文楽人形の頭部や大量の木製品と6体分の入骨が出土した。	平田泰博ほか1984『平安京七条一坊』『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
4	南区西九条春日町19	1984.05.21~ 1984.10.01	堀を掘出。東西幅約20m、深さ約1.5mを測る。堀底は作業単位を示す連続した凹みが認められた。堀からは土師器などの他に、「寛永二十一年」(1644)・「正保4年」(1647)などの紀年木簡、ポルトガル語で記したキリシタン関係の荷札が出土。	丸川義広ほか1987『平安京左京九条二坊』『昭和59年 京都市埋蔵文化財調査概要』
5	中京区西ノ京中保町1-4(北野中学校)	1987.10.08~ 1987.11.30	堀の内溝を掘出。御土居に関連する幅0.5~1mの溝を確認。	菅田薫1991『平安京右京一条二坊』『昭和62年度』京都市埋蔵文化財調査概要
6	南区西九条鳥居町1	1991.05.01~ 1991.10.17, 1991.11.05~ 1992.03.21	堀を掘出。東西幅14m以上、深さ約2.5mを測る。堀底に凹凸が認められる。堀から「保四年 八月申」・「正保四口 八月口」などの文字資料が400点以上出土。	菅田薫1995『平安京左京九条二坊』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
7	中京区西ノ京内町地内	1997.08.08~ 1998.02.13	江戸時代に築かれた御土居の内側の排水溝(南北方向)を掘出。東西幅1.5m、深さ0.3mを測る。	小嶋山一良ほか1999『平安宮左馬寮・朝堂院跡』『平安京右京一・二条二~四坊』『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
8	中京区西ノ京内町55-1	1999.11.01~ 2000.03.25	土塁基部部と内溝を掘出。基部部は東西15~16mを測る。断面形状は台形を呈す。内溝は東西幅2m、深さ約0.4mを測る。	小島俊寛ほか2002『平安京右京一条二坊』『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
9	北区紫野上堀川町	2000.02.14	土塁基部部と内溝を掘出。基部部は河川氾濫地積の上面に整地し造成している。	京都市文化財保護課2001『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』
10	下京区中堂寺南町地内	2001.01.18~ 2001.04.06	堀を掘出。東西幅12.5m以上、深さ約1.5mを測り、断面は中央部が大きく開いた「V」字形を呈す。堀から寛永通寶が20枚連なつた状態出土。	平尾敏幸ほか2002『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』
11	上京区御幸道今出川下二丁目栄町361	2008.02.25	土塁の内溝を掘出。幅1.6m以上、深さ0.6m。	馬淵智光2009『御土居跡・寺町旧城』『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』
12	下京区朱雀正金町1-20	2009.03.09~ 2009.04.30	土塁の基部部を掘出。東西約12m、南北約5mの範囲で高さ0.05~0.25mの盛土を確認。	小嶋山一良2009『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』
13	中京区西ノ京笠殿町38	2012.04.15~ 2012.12.09.07	土塁基部部と堀を確認。土塁基部部は東西幅14m以上を測る。堀は東西幅14m以上、深さ2.5mを測る。	高橋深ほか2012『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』
14	下京区小堀前町22-2(ほか)	2013.04.15~ 2013.06.12	17世紀に付け替えた土塁と排水溝を掘出。	近藤章子ほか2014『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』
15	上京区鳥喰町・北野	2013.06.03~ 2013.08.09	土塁と石組み暗渠を掘出。土塁は幅約17m、暗渠長は19.3mを測る。	南幸雄2014『御土居の姿』京都市考古資料館文化財講座第257回
16	南区西九条北ノ内町6(ほか)	2014.05.20~ 2014.09.26	堀を掘出。東西幅8.5m以上、深さ0.75m、南北45m分を掘出。	松吉祐希ほか2015『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』
17	右京区壬生源田町	2014.09.01~ 19	土塁を掘出。東西20m、南北9m、高さ1mを掘出。	鈴木久史2015『京都市内遺跡詳細分布調査報告』
18	右京区壬生源田町	2015.01.21~ 2015.04.30	堀を掘出。幅6m以上、深さ1.7m以上。	布川豊治ほか2015『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』
19	北区紫野北ノ坊町31	2016.09.01~ 2016.12.02	土塁基部部と排水暗渠を掘出。東西43mと9.8mの範囲を確認。	神田透ほか2016『御土居跡』
20	北区大宮西橋台町	2018.05.14~ 06.04	土塁・堀・排水溝を掘出。	本家 A 地点
21	中京区西ノ京大炊御門町	2018.08.22	土塁基部部を掘出。	本家 B 地点

今回の報告ではいずれも御土居跡に関する成果のため、一つにまとめて報告するが、個別の地層や成果については各地点毎に段落を改めて説明する。

2 A地点（北区 大宮交通公園）の調査

(1) 層序と遺構（図53～55）

1～3区 層序は1区を代表として述べる。現代盛土直下のGL-0.6mでぶい黄褐色砂泥砂（土塁崩落土）、-1.08mで明褐色シルトの地山となる。地山直上で遺構検出を実施し、溝1を確認した。

4・5区 層序は4区を代表に述べる。GL-0.5m～1.75m（掘削底）まで土塁の構築土となる。なお、5区で堀の南肩口を検出した。

6区 GL-1.1mで造成土もしくは地山となる。この層の直上で遺構検出を実施し、堀の北肩口を検出した。

(2) 遺構

溝1（図65） 1区の南側で検出した東西方向の溝である。地山を掘り込んで成立し、幅約1.8m、深さ0.4mである。埋土は直上のぶい黄褐色泥砂（⑤・⑥層）と近似し、二層に分層できる。溝が土塁の南側（土塁内側）に位置していることから、悪水抜きを目的に開削された溝と推測する。

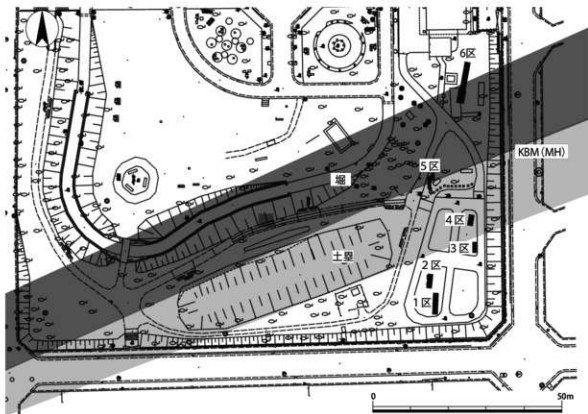


図64 A地点調査区配置図（1：1,000）

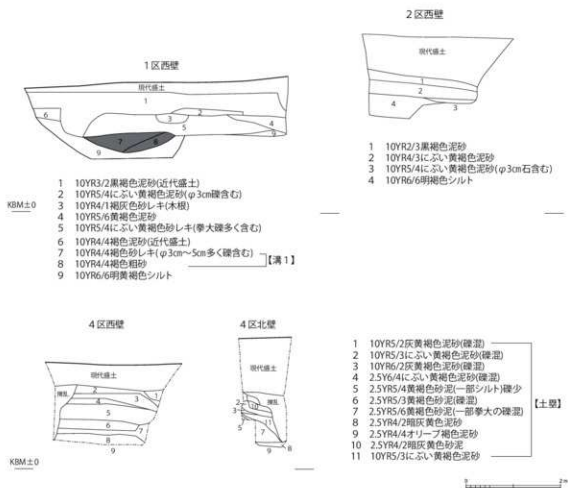


図65 A地点1~4区断面図(土塁と溝)(1:80)

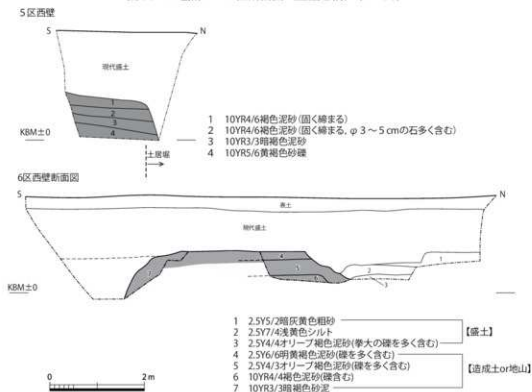


図66 A地点5・6区断面図(土層堀)(1:80)

土塁 2 (図65) 現況土塁の東側延長部で確認した土塁の構築土である(4・5区)。構築土は礫が混じる泥砂と砂泥が主体となり、西から東に傾斜して堆積している。面的な広がりを確認していないが、土塁の幅は南北16m以上となる。

堀 3 (図66) 5区で南肩、6区で北肩を検出した。堀は地山もしくは造成土を掘り込んで成立している。面的な確認は出来ていないが、幅は約21.4m、深さ1m以上である。堀底が深いことから埋土下層の様相は不明であるが、約1mまでは現代遺物を多量に含んでいる。

(3) まとめ

今回の調査では、「御土居跡」の位置を把握するとともに、土塁・堀・悪水抜き溝を検出することができた。

土塁は想定通り、現況土塁の延長上で確認することができた。構築土は礫と泥砂が互層になっており、その他の調査成果と齟齬はない。土塁の構築方法は、①内側から外側に向けて盛土する方法と②旧地形に合わせて(旧地形を最大限利用しながら)、構築土を投入する方法がある。当該地の土塁は旧地形に沿って西から東に向かって構築土を投入していることから、後者の方法を採用したと判断できる。また、当該地が東に張り出した舌状の先端に位置していると想定することができ、御土居はこの地形を最大限利用している。

また、堀は一部造成土を開削して成立している。したがって、旧地形に起伏がある場合、まず土塁と堀の構築予定範囲を造成した後、堀を開削した可能性がある。本調査成果のみで断定することはできないが、今後の調査で留意しなければならない。(鈴木久史・清水早織)



図67 A地点4区全景と現存土塁(東から)



図68 A地点4区全景(南から)

3 B地点（中京区 円町公園）の調査

(1) 調査地と調査区（図69～72）

調査地は円町駅の北西に位置する円町公園（図62）である。円町公園は、昭和初期に遺存していた御土居の土壇を利用して設けられたと伝わる公園で、現在も東を通る佐井通りおよび西隣接道路から一段高くなった状態にある（図70・71）。つまりこの公園は全体が御土居の基底部である可能性が高く、調査は、今回工事で掘削する範囲の土層遺存状況の確認およびその記録を主目的とした。

調査地の現状は、御土居の外にあたる西（佐井通）側が低く、東が高い。また北にむかって高くなる地形である。

調査区は、工事掘削範囲内で東西と南北の様子が見えるように分散させて3区を設定した。この結果、全ての調査区で御土居跡と推定される積土を検出した。記録は土層の遺存状況が良い断面で行ったため、主に南壁の状況を掲載している。

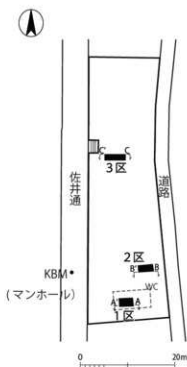


図69 B地点調査区配置図（1：800）



図70 東隣接道路と調査地（東から）



図71 佐井通と調査地（南西から）

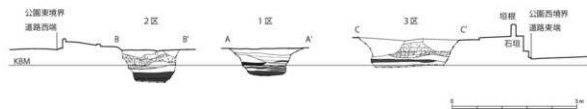


図72 各調査区の位置関係概念図（1：600）

(2) 遺構 (図73～81)

本調査で確認した遺構(地層)は、立地と歴史的な経緯による状況証拠から御土居の構築土と推定されるものである。以下、各調査区毎に概要を示す。

1区 (図73～75)

最も南側の調査区で、人為的な盛土や包含層が良好に遺存している状況を検出した。黒色砂泥・黒褐色泥砂の上に、黄色粘土、黒褐色泥砂、礫が混ざった土あるいはそのどれかを母材とする土が互層状に確認できた。褐色の色調が類似する

2区褐色泥砂中から細片ではあるが平安時代の遺物が出土していることから、1区の黒褐色泥砂等も時期は不明だが包含層と推定される。この土の上に礫を多量に含む粗い盛土層(層7)や互層と表現できるほど綺麗ではないが層厚5cm程度の層が幾重にも重なった層(層6)などが積み上げられ、層2・3のようにマウンド状に積み上げられた部分も観察された。図上で表現できていないが、層1は各層厚約5cmの橙色粘土と褐色泥砂、礫の互層である。

これらは人為的な盛土であり、御土居構築土の一部であると判断される。いずれも多量の礫が含まれていた。

2区 (図76～78)

東側に位置する調査区である。御土居構築土(層1～7)と平安時代以前の包含層(層8～10)、灰白色シルト(層11、地山)を検出した。2区の御土居構築土は1区のものよりも礫が多い。特筆すべきは、平安時代の包含層と考えている褐色泥砂の上に層厚1～3cmの黄色粘土の薄層(図76層7、図78)を検出したこと

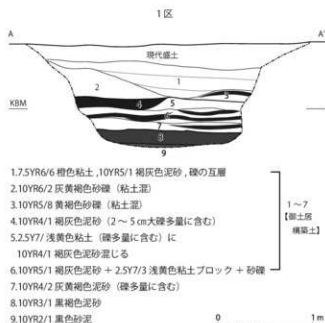


図73 B地点1区南壁断面図(1:40)



図74 B地点1区断面(北から)



図75 B地点1区断面近接(層1など)(北東から)

である。御土居を構築する初期段階の層と推定され、盛土を始めるにあたってなにかの整地がなされた痕跡かもしれない。この層7上に、褐色泥砂と砂礫による盛土(層3～6)があり、その上に黄褐色粘土と砂礫による盛土(層1～2)が積み上げられていた。色調の違いによる大きな単位は作業単位を表している可能性がある。

3区(図79～81)

北西の調査区で、1・2区に比べて高い位置にある。このため、1・2区で検出した褐色泥砂の包含層は検出できなかった。

3区で検出した黒褐色泥砂(図68層6)は途中で途切れていること、礫を多量に含むことから、御土居の構築土と推定する。比較的厚く堆積する褐灰色泥砂(層5)は粗い整地層で、それより上は砂礫の間に黄褐色粘土の薄層が観察される互層状の堆積である。3区ではマウンド状の堆積が確認できなかったが、これは北側が高くなっている地形のため、基底部の造成では高低差を利用し高い側には土留めが必要なかったためかもしれない。ただし、今回調査は各調査区が狭小であり、南北の調査区も設定できなかったため詳細は不明である。

図72は隣接道路と現況の公園地表面、各調査区の東西関係とその比高が分かるように配置した概念図である。図からもわかるように3区は一段高くなっており、地山である層8がKBMと同じ高さである。1・2区との堆積状況の違いは、地形によるものと推測される。

なお、今回調査では、2区の平安時代



図76 B地点2区断面図(1:40)



図77 B地点2区断面(北東から)



図78 B地点2区断面近接(北西から)

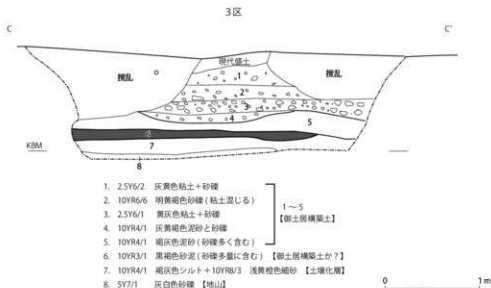


図79 B地点3区北壁断面図(反転)(1:800)



図80 B地点3区北壁断面(南西から)



図81 B地点3区北壁断面近接(南西から)

の土師器、須恵器細片以外の遺物は出土しなかった。伏見城跡や御土居跡など豊臣期の大地業からは遺物がほとんど出土しないことが調査事例の蓄積から分かっている。今回遺物が出土しなかったこともまたこの盛土が御土居の構築土と考える根拠の一つである。

(3) まとめ

今回の調査で、円町公園下には御土居跡が良好に保存されていることがわかった。3区の御土居構築土中、最も下の層6(図72, 図79)はおおよその高さが佐井通の道路面と同じで、裾がこの高さであると推定すると佐井通下には濠が残っている可能性も指摘できる。また東隣接道路が佐井通と比べて高いのも、この路地下に御土居積み土が残っているためと考えられる。

御土居構築土は、黄褐色粘土の地山、砂礫、そして褐色泥砂の包含層を母材とし、分層が困難な細かい単位が観察された。かなり丁寧な施工をしているように見える。また盛土内に砂礫以外のもの(土器片や瓦片)が含まれていなかった。構築土全てに何も含まないとは無論言えないが、平安時代の遺物包含層などを母材としていると推定されるのに、遺物を含まないことも、施工にな

んらかのルールがあったことを想像させる。

4 まとめ

天正期に豊臣秀吉が造成させた御土居は南北約8.2km、東西約3.5km、総延長約22.5kmの京都中心部を囲う壮大な土塁および堀である。その性格については外側からの防衛施設、鴨川の氾濫から市街地を守るための堤防など様々な機能を有していたと考えられ、中・近世京都の市街地：洛中の意識をも明示する重要な遺跡と言える。江戸時代の間は社寺等に払い下げられた部分や鴨川に近接する部分は失われていったが、大堰川や高瀬川を開削した角倉家によって管理されたことから大部分は良好に維持されていたという。しかし、明治以降、市街地の拡大とともに急速に失われ、現在は9カ所の国指定史跡以外には痕跡となつて部分的に市内に散在する状況である。今回調査した2つの公園は、史跡の他で御土居跡が比較的良好に残る本市にとって貴重な場所であり、そのいずれもで排水溝や構築土が確認できた成果は大きい。

豊臣期の造成・地業の具体像については、近年の発掘調査によって様々な新視点が与えられてきたが、その規模が大きい故にまだ解明されていない問題点も多数ある。発掘調査による記録はもちろん、試掘調査や詳細分布調査の記録を積み重ねる事で、点的であっても広範囲の状況を掴むことが可能であり、こうした積み重ねに、今回の調査ではA地点：東に張り出した舌状地形を最大限利用して西から東に向かって構築土を投入していること。B地点：高低差によって構築土の堆積状況が異なり、高い側では構築土が比較的レベルに堆積していることから、高低差を埋めるように基底部を構築していった可能性があること。などの成果を加えられたように思う。

最後に、本文ではあるが、宅地化が進む市内で部分的に残っていた御土居跡を利用して公園を整備した先達の仕事と今回ご協力いただいた各局に感謝を申し上げます。

(赤松佳奈)

参考文献

馬瀬智光、京都市文化財ボックス第31集『天下人の城』附第34回京都市指定・登録文化財、2017。

IV-2 平安京右京七条二坊七町跡，西市跡， 衣田町遺跡

1 調査の経緯

本件は、マンション新築工事に伴う試掘調査である。対象地は下京区西七条石ヶ坪町に所在し、右京七条二坊七町跡，西靱負小路の路面及び西側溝想定位置に該当する。当該町に関わる史料などは確認できず，居住者などについては明らかでない。

周辺の調査¹⁾では，市立七条第三小学校敷地内（調査1）や対象地の西側にあたる場所で行われた発掘調査（調査2），花屋町通で行われた立会調査（調査3）などが挙げられる。調査1では古墳時代の流路が調査区全体に広がることと，幅5.5m以上の平安時代中期の東西溝の存在が確認されている。調査2では，GL-0.5m以下，平安時代前期の溝，土坑，柱穴のほか，平安時代後期から室町時代にかけての流路や幕末の西高瀬川の河川跡などが確認されている。調査3では，GL-0.4～0.9mで灰色砂礫や灰色粘土の地山が確認されているのみである。以上のように，調査地付近では条坊関連遺構は確認されておらず，湿地状堆積土や流路埋土などが確認されているのみで，宅地内の様相などは明らかではない。

今回の調査では西靱負小路西側溝及び七町内の状況把握を目的として行った。

2 層序と遺構

建物計画範囲を主に，南側（1区）と北側（2区）に東西方向の調査区を2箇所設定した（図72）。1区の大半が近現代の解体により攪乱を受けていたため，七町内の様相や西靱負小路西側溝などを確認することはできなかったものの，西靱負小路路面に想定される調査区の東側6mの範囲では遺構面が遺存していることを確認した。1区の基本層序は，現代盛土の下，黄灰色粘質土を挟



図82 調査位置図（1：2,500）

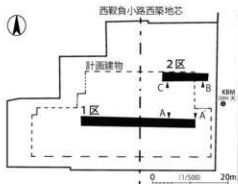


図83 調査区配置図（1：500）

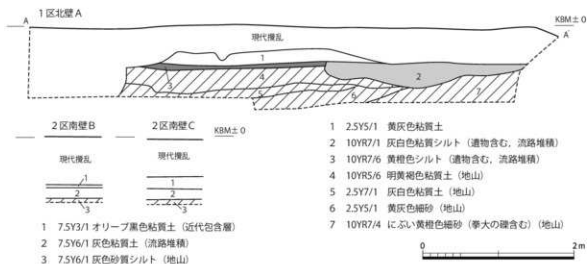


図84 各調査区断面図 (1:50)

み、G L -0.5mで平安時代の遺物を含む灰白色粘質シルト (2層) や黄褐色シルト (3層)、-0.6mで明黄褐色粘質土の地山 (4層)、-0.9mで灰白色粘質土、-0.9~1.0mで黄灰色細砂や砂礫に至る。3層上面で南北方向の溝状遺構 (図3-2層) を確認した。東西幅は2.2m以上、検出長は1.2m、深さは0.3mである。遺構の平面上の輪郭は不明瞭で、断面にて検出を行った。埋土からは土師器、黒色土器、緑軸陶器、瓦などの小片が出土している。3層からもこれらと同時期と考えられる土師器、須恵器、緑軸陶器、瓦などが出土している。これらの検出位置は路面に相当する。3層については整地土の可能性も検討したが、層境が不明瞭であることや路面上の整地土には締りが無いことなどから、2・3層とも流路堆積土であると判断した。周辺調査で確認されている流路の堆積の一部である可能性が高い。

2区では、現代攪乱の下、近現代の遺物包含層であるオリーブ黒色の粘質土を

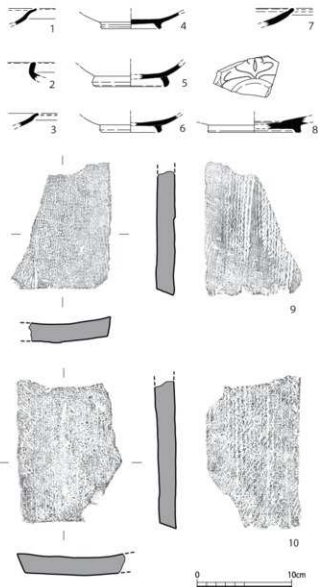


図85 出土遺物実測図 (1:4)

挟み、G L -0.65 mで遺物を多く含む灰色粘質土、-0.73 mで灰色砂質シルトの地山に至る。1・2区ともに路面部分に相当するため、周辺調査で確認されている流路埋土の一部である可能性が高い。土層観察から、1区3層と2区2層は同一層と考えられる。

3 出土遺物

対象地全体に広がっている流路堆積土(1区3層・2区2層)からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦などが出土しているが、その多くは破片であり、図化できたもののみを報告する。

1は土師器皿、2は須恵器の葉壺の口縁部である。3～6は灰釉陶器である。3は皿、4～6は碗と思われる。特に5の胎土は灰白色で、精良である。7・8は緑釉陶器である。7は皿の口縁部である。端部内面はナデにより段を持つ。胎土は軟質で、淡灰白色に近い。釉葉は明るい淡緑色で薄いが、内外面ともに施される。8は皿の高台部分である。見込みの外側は一段凹み、内面には印刻花纹が施される。貼り付け高台である。胎土は硬質で、青灰色に近い。釉葉は淡緑色で薄いが内面の他、外面や高台見込みにも施されている。猿投産。9・10は平瓦である。凸面には縄目叩きが施され、凹面には布目痕が残る。側面はケズリが施される。ともに弧の湾曲が緩い。10の両表面には離れ砂が認められる。これら遺物の時期は、9世紀後半と考えられる。

4 まとめ

今回の調査では、西叡負小路西側溝及び七条二坊七町跡の状況把握に努めたが、現代攪乱により明確な遺構が確認できず、宅地内だけでなく、条坊側溝についてもその様相を把握できなかった。しかし路面に相当する対象地東端では平安時代中期の遺物を含む流路堆積土を確認した。流路堆積土から出土している遺物の表面には摩滅がほとんど確認できず、また周辺調査でも、同時期の遺物を含む東西溝や湿地堆積土は確認されていることから、対象地及び対象地周辺にこれら遺物を使用した何らかの施設が存在が窺える資料であるといえる。

(奥井智子・廣富亮太)

註

1) 調査1:『32 右京七条二坊』、『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1982。

調査2:『IV 右京七条二坊』、『平安京跡発掘調査概報』、京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所、1984。

調査3:『11 右京七条二坊(1)』、『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1982。

V-1 一ノ井遺跡

1 調査の経緯

本件は共同住宅新築に伴う試掘調査である。平成29年12月26日に文化財保護法第93条第1項の届出がなされたため、平成30年4月19日と20日の2日間で試掘調査を実施した。調査面積は74㎡である。対象地は右京区太秦一ノ井町に所在し、東映太秦映画村から城北街道を挟んだ東向いにある(図86)。奈良時代から平安時代の遺物散布地であり、東には和泉式部町遺跡、西には常盤仲之町遺跡といった古墳時代から飛鳥時代にかけての集落が広がる。また対象地の南西には、渡来系氏族である秦氏が造営した仏隆寺が存在する。

近隣では、調査地西側の城北街道において平成20年～平成24年に発掘調査が行われている(図86調査地1・2)。このうち調査地1では、幅2mを測る中世の南北溝が確認されている¹⁾。また、調査地2では飛鳥時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物のほか、室町時代の城北街道及び、区画溝等が確認されている²⁾。

このほか、対象地の北西に位置する東映太秦映画村建物建設に伴う発掘調査(常盤仲之町遺跡内)では、飛鳥時代の竪穴建物や平安時代の遺構などが確認されている(調査地3)³⁾。

また、南に位置する調査地4では、昭和63年度に立会調査が行われており、鎌倉時代の小型の柱穴や土坑が多数確認されている⁴⁾。特に北半部では地山(遺構面)までの深度が浅く、GL-0.2mで遺構面に達している。

このため、今回の調査においても浅い深度での遺構検出が予測された。



図86 調査位置図(1:5,000)

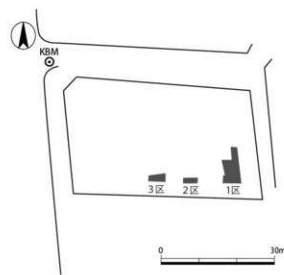


図87 調査区配置図(1:5,000)

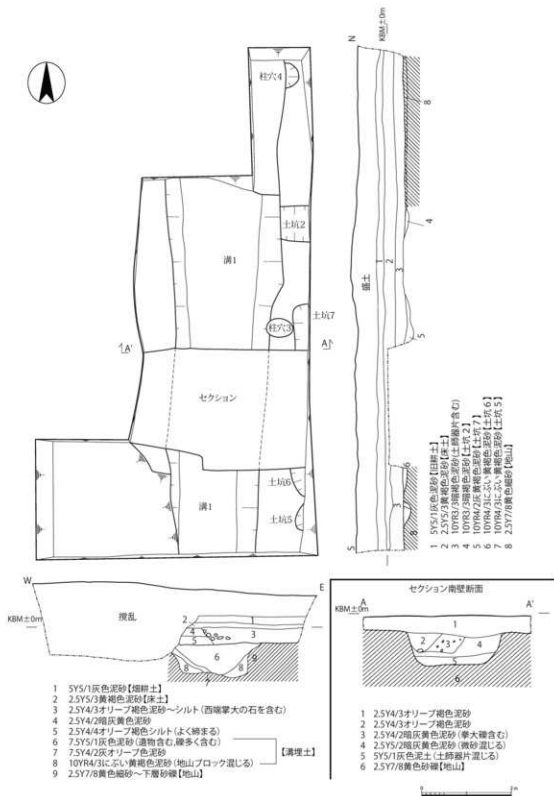


図88 調査区平面図・断面図、セクション南壁断面図（1：80）

2 層序と遺構

基本層序は現代盛土以下、GL-0.5mで灰色の旧耕土（1層）、-0.65mで黄褐色泥砂の床土（2層）、-0.75mで拳大の礫・中世の遺物を含むオリーブ褐色泥砂～シルト（3層）、-1.1mで黄色粗砂～砂礫の地山（4層）に達する。遺構検出は4層の地山上面で行った。その結果、柱穴や土坑・近世の南北溝を1条確認した。このうち本文では、近世の南北溝を中心に報告する。

溝1

南北方向の溝を1条確認した（図88溝1）。検出規模は、長さ8.0m以上、幅2.5m、深さ約0.7mである。溝の西肩口は上層に削平されているため不明であるが、東肩口は地山上面において成立することを確認した。埋土は3層に大別できる。拳大の礫を多く含んだ灰色泥砂層（図88-6層）と灰オリーブ褐色泥砂（図88-7層）、にぶい黄色泥砂（図88-8層）である。溝の最下層には地山ブロックとにぶい黄褐色泥砂の流入が認められること、またセクション南壁では、底面付近に灰色泥土が残存することから、溝の機能時には滞水する状況にあったものと考えられる。また南壁断面6層には礫が多く含まれることから溝廃絶時に、人為的に礫を投棄したものと考えられる。灰色シルト～泥土から近世の遺物が出土した。

3 遺物（図89・90）

1～3は溝1から出土した。1は土師器皿で、口縁端部は丸く仕上げる。2は焙烙である。口縁部は外反する。外面はススが付着している。3は高杯の脚部である。外面には8面の面取りをし、ナデで仕上げている。古代の製品であり、混入したものと思われる。この他、近世の陶磁器片などが出土している。

4～7は土師器皿で、端部がまっすぐ立ち上がる。4は口縁部にススが付着することから灯明皿と思われる。8は灰釉陶器の椀で口縁が外反する。9は青磁碗、10は須恵器甕である。10の口径は25.6cm、残存高は3.8cmで屈曲して外反する。肩部外面はタタキ、内面は回転ナデ調整を施している。11は緑釉陶器の輪花椀である。高台部分を浅く削り、意匠を加えたものである。12は須恵器片で、外面に波状文を施し、内面には自然釉が付着する。13は須恵器甕片で、内面を同心円タタキで調整している。

4 まとめ

今回の調査では、これまで一ノ井遺跡では報告されていない近世の遺構を確認した。周辺に比べて遺構面までの深度が深かったこと、また解体攪乱が及んでおらず、遺構が損傷を受けていなかったことが今回の発見につながったと考える。当該時期の出土遺物は僅かであるが、調査区北東部では、柱穴や土坑などを複数検出しており、人々の居

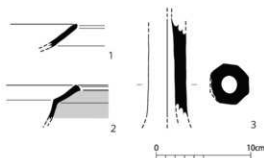


図89 溝1出土遺物実測図（1：4）

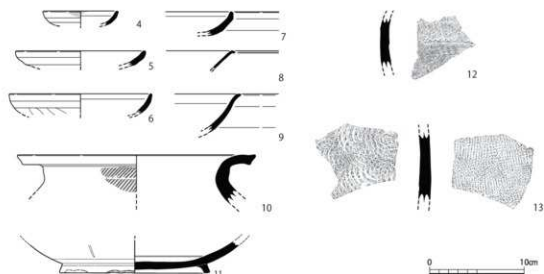


図90 調査区出土遺物実測図（1：4）

住があったことは確実視される。今回確認した溝が集落内の区画溝等であるならば、対象地の周辺においても遺構が展開する可能性は高い。

現在、一ノ井遺跡は奈良時代から平安時代の遺物散布地として周知されているが、今後は近世期にも集落跡が存在したことに留意する必要があるだろう。今後の周辺調査により、集落の様相がより明らかとなることに期待したい。

（清水 早織・黒須亜希子）

注

- 1) 前田義明「常磐仲ノ町遺跡」『京都市文化財研究所発掘調査報告』2008-21、(財)京都市文化財研究所、2008年。
- 2) 近藤章子・布川豊治「常磐仲ノ町遺跡・一ノ井遺跡」『京都市文化財研究所発掘調査報告』2012-11、(財)京都市文化財研究所 2013年。
- 3) 吉川義彦 関西文化財調査会 発掘調査実績報告書
- 4) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』立会調査一覧表、88UZ25、1988年。



图91 調査区全景（南から）



图92 溝1断面（北から）

V-2 史跡 賀茂御祖神社境内

1 調査の経緯

史跡賀茂御祖神社境内では、平成20～22年度にかけて、国宝東西本殿他三十一棟防災施設事業を実施し、文化財建造物を中心とした防災防犯体制の構築を行った¹⁾。しかし、平成29年4月1日、境内複数箇所にて油のような液体が撒かれる事案が発生したため、神社側では境内全域の防犯防災体制の強化を計画した。事業の実施にあたっては、既設管の掘削範囲に埋設を行うよう配慮されたが、やむを得ず新たな掘削が発生する地点を中心に、試掘調査及び立会調査を実施することとなった。

試掘調査は、平成30年4月12日から10月29日までの延べ10日間で境内の11箇所、合計69㎡、立会調査は4月16日～11月2日までの延べ37日間、合計38地点の調査を実施した。

調査の結果、西参道、表参道、馬場の路面整地層や両側溝、ピットや礎石、築地基底部等の遺構のほか、平安時代後期の瓦等を確認する成果を得た。ここでは、主だった遺構・遺物を確認した試掘調査成果について述べる。



図93 調査位置図(1:5,000)

2 遺構

今回の計画では、対象範囲が境内全域に及ぶため、これまでの調査成果及び平安時代の社頭景観を描いたとされる「鴨社古図」(以下、古図という)や寛永永年に描かれた「下賀茂社堂絵図」等の古絵図を参考に特に重要と考えられる地点に調査区を設定した。

各調査区の設定箇所と目的を述べる。1区は供御所の北側にあたり、古図にもある境内から西へ向かう西参道の堆積状況、2区は大炊殿西側で、「下賀茂社堂絵図」にある大炊殿北辺に接続する堀の確認、3区は御手洗池北側で古図に描かれている境内北東にあったとされる経堂の確認、4区は表参道の樓門正面で、参道の堆積状況、5区は河合神社前の西鳥居際で、かつて平安京から下鴨社への参詣道であった河合大路の堆積状況、6区は同東鳥居際で大路の延長線上にあたる御蔭道

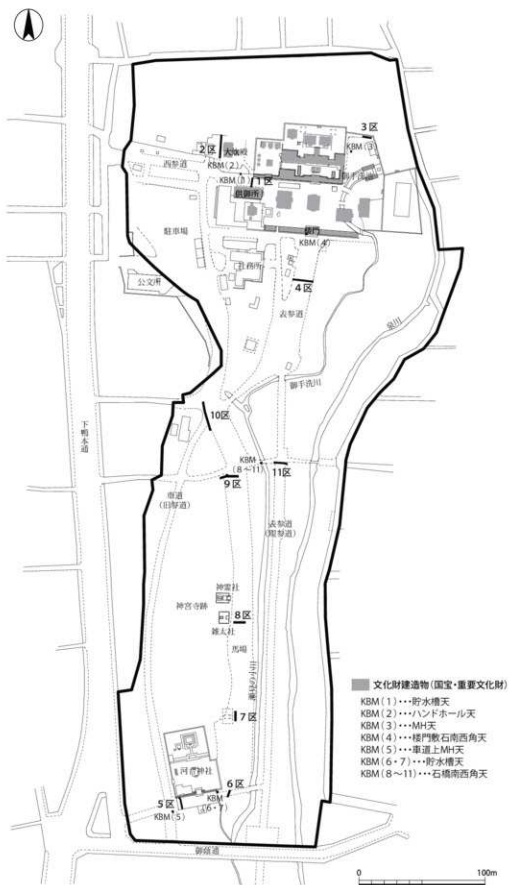


図94 調査区配置図 (1:3,000)

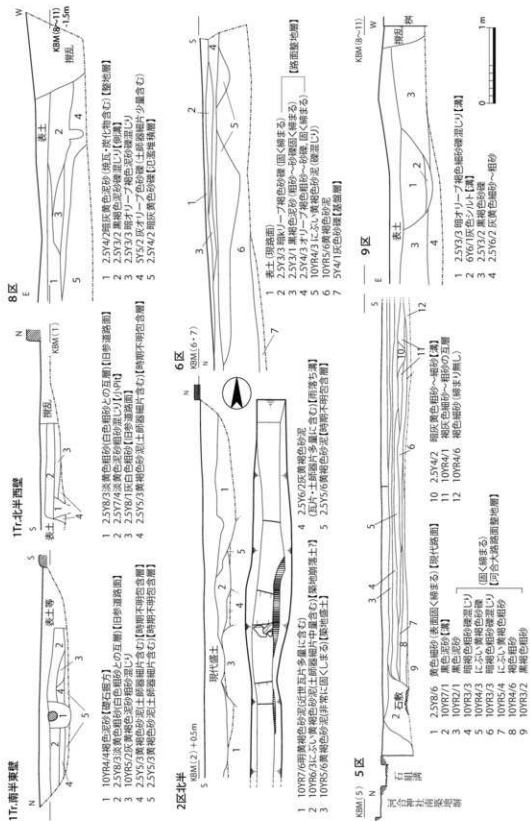


図95 調査区実測図 (1:50)

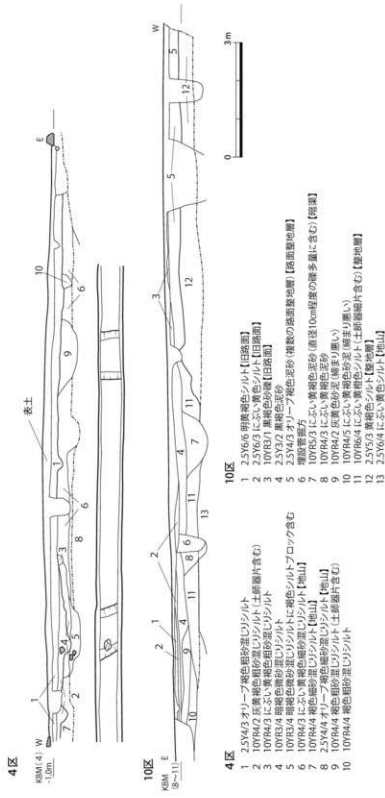


図96 調査区実測図 (1:100)

の確認、7区は廃仏毀釈まで河合神社北側に所在した神宮寺内にある元祿の池から瀬見の小川へ流れの出る水路の確認、8・9区は馬場上に位置し、そのの成立年代、10区は現在の主要参道上で、その成立年代、11区は現車道上に位置し、「古図」に描かれた古代以降、近代に至るまで河井社から本殿へと向かう参道の確認である。

(1) 層序

層序は、1区が盛土以下、GL-0.1~0.2mで淡黄色粗砂を主体とする複数の路面整地層、-0.2mで灰白色粗砂の時期不明路面、-0.25mにて黄褐色砂泥の時期不明包含層となる。2区は盛土以下、GL-0.15~0.25mにて瓦片を多量に含む近世整地層及び-0.25mにて固く締まった黄褐色砂泥の築地基底部、-0.35mにて黄褐色砂泥の時期不明包含層となる。3区は盛土以下、GL-0.25~0.4mにてにぶい黄褐色

～黄褐色泥砂の時期不明包含層となる。4区は表土以下、近現代路面と続き、GL-0.35mにてにぶい黄褐色細砂混じりシルトの地山となる。5区は表土以下、GL-0.1mにて黒色砂泥の腐植土層で、-0.14m以下、掘削底の-0.4mまで複数の路面整地層が続く。6区は表土以下、GL-0.1~0.15mにかけて路面整地層で、以下、氾濫堆積層となる。7区は表土以下、GL-0.25mで黒褐色砂泥礫混じりの時期不明包含層、-0.7~0.8mで明黄褐色砂礫の氾濫堆積層となる。8区は表土以下、暗灰

黄色泥砂の馬場整地層、GL-0.25m以下、暗灰黄色砂礫が続く。9区は表土直下で、暗オリーブ褐色細砂礫混じりの固く締まった旧馬場整地層となり、GL-0.20mにて黒褐色砂礫の氾濫堆積となる。10区は表土直下GL-0.05mにて時期不明の路面整地層となる。整地層は3層以上、合計0.25mの厚さが残り、-0.3mにてふい黄橙色シルトの中世整地層、-0.8mにてふい黄色シルトの地山となる。11区は表土直下GL-0.1mにてオリーブ褐色砂礫の時期不明包含層、-0.25mにて褐色砂礫の地山となる。

(2) 遺構

1区では、時期の特定はできなかったが、複数の路面整地層を確認した。また、路面上で成立する小規模の礎石や小ピットが認められ、参道沿いであることから、柵列の存在が想定される。

2区では、幅0.7mの東西方向の盛土を確認した。北側面には径0.15～0.2mの石で押さえ側石としている。北側面は大炊殿北壁面と揃い、「下賀茂社堂舎絵図」にある築地の基底部にあたる。また、基底部北側には幅0.5mの凹みがあり、雨落溝と捉えられる。溝からは平安時代末期～鎌倉時代の土師器皿片が出土している。

3区では、樹木の根による攪乱で顕著な遺構は確認できなかったが、近世土坑から平安時代後期の軒平瓦、鬼瓦が出土している。4区では、調査区両端で、地山で成立する南北方向の溝2条を調査区東西端にて確認した。東の溝は幅2.0m、深さ0.35m以上、やや斜交する西の溝は幅3.3m、深さ0.55mを測る。遺物は両溝から時期不明の土師器細片と東溝から平安時代後期の軒丸瓦が出土した。

5区では、複数の路面整地層と調査区北端にて底に河原石を並べた幅0.8m以上、深さ0.4mの東西溝を確認した。河合神社の堀と並行しており、雨落ち溝と捉えられる。6区では、表土の路面直下で路面整地層を確認したが、5区と比べると整地層の厚みは薄い。

7区では、顕著な遺構は認められず、時期不明の包含層から平安時代後期の軒丸瓦が出土した程度である。8区では、焼け瓦片を多く含む馬場整地層と調査区西端で南北溝を確認した。溝の幅1.5m以上、深さ0.4m以上で、西肩は調査区外である。馬場の側溝と考えられる。焼け瓦を含む整地層は、隣接する神宮寺の火災処理に伴う廃棄物を再利用したものとして捉えられる。

9区では、調査区西端にて幅1m、深さ0.4mの南北溝を確認した。遺物は出土しなかったものの、8区同様に馬場の側溝、又は古図にある神宮寺の元札の池に流れ込む水路と考えられる。10区では、表土直下にて複数の路面整地層を確認した。路面は少なくとも3面確認でき、長く参道として機能していたことを示している。11区では、薄い包含層を確認したのみである。

3 遺物

今回の調査で出土した遺物は平安時代後期～鎌倉時代と江戸時代にほぼ限定できる。平安時代後期では土師器皿、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦が、近世では土師器皿・軒丸瓦が出土している。ここでは、平安時代から鎌倉時代の遺物の報告を行う。

1・2は2区4層の溝から出土したもので、口縁端部が上方に突起する形状を呈す。Ⅵ期に属するもので、平安時代末期～鎌倉時代に属するものである。3・4は平安時代後期の巴文軒丸瓦である。3は7区掘削中に出土したもので、左巻きの3巴文を配す。尾部は長い。4は4区東溝から出土したもので、右巻きの3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接し界線となる。5～8は3区の近世土坑から出土した瓦で、5～7が軒平瓦、8が鬼瓦である。5・6の文様は、剣頭文と右巻き3巴文を交互に配する。曲線顎で瓦当成形は折り曲げ技法である。7の文様は剣頭文である。段顎で瓦当成形は折り曲げ技法である。3～5は山城産で平安時代後期に属する。8は鬼瓦で外区のみが残る。大型の殊文が巡る。成形は范型である。焼成は軟質。平安時代後期に属するも。

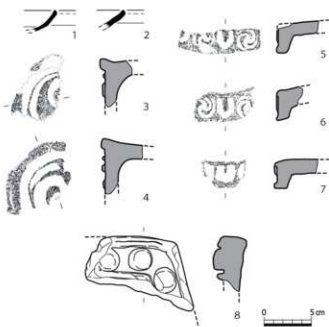


図97 出土遺物実測図（1：4）

7の文様は剣頭文である。段顎で瓦当成形は折り曲げ技法である。3～5は山城産で平安時代後期に属する。8は鬼瓦で外区のみが残る。大型の殊文が巡る。成形は范型である。焼成は軟質。平安時代後期に属するも。

4 まとめ

今回は境内全域が対象であったため、広範囲にわたって調査区を設けた。したがって、これまで調査が実施されていなかった地点での成果を得ることができた。特に5区の河合神社前参道や、11区の近代までの主要な参道であった現車道、4区の楼門前参道の各路面整地層は路面整地層を初めて確認したものである。中でも河合大路や現車道下の参道は路面堆積層が厚く、長く参道として維持されてきたことを示している。また、御手洗池北側の3区では、遺構に伴うものではないが、平安時代後期の軒平瓦や鬼瓦が出土している。本殿周辺では、古くから当該期の瓦が一定量出土することが知られており、本殿廻りを囲う土塀が瓦葺であった可能性が提示されている³⁾。今回は、鬼瓦も出土していることから、土塀に葺かれたとは考えにくく、「古図」に描かれた瓦葺の経堂所用瓦の可能性が考えられよう。これまで絵図等でのみで知られていた経堂の存在を裏付ける貴重な成果といえよう。

（西森正晃）

註

- 1) 『史跡賀茂御祖神社境内』、京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-14、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011。
- 2) 『発掘からみた糺の森』、『世界文化遺産 賀茂御祖神社 下鴨神社のすべて』、賀茂御祖神社編、淡交社、2015。

V-3 中臣遺跡

1 調査経過

調査地は、京都市立動修小学校の南東に位置する。縄文時代から中世に至る複合遺跡である中臣遺跡の南西部に相当し、遺跡の東限である山科川の河岸からは50mの地点にある。今回、この区画に共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

周辺では、昭和53年度、昭和55年度、昭和56年度に近隣区画及び前面道路で発掘調査が行われており、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代、平安時代の各遺構面が発見されている。

昭和53年度に調査地の北西区画と前面道路において実施された発掘調査では、GL-1.0mの深度において、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物7棟と掘立柱建物5棟、奈良時代の廂をもつ掘立柱建物1棟、溝が複数条検出されている(図98①)。

また、昭和55年度に調査地の北東区画で行われた発掘調査では、GL-2.0mの深度において弥生時代後期の土坑、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物と掘立柱建物、奈良時代の掘立柱建物が同一遺構面で検出されている(図98②)。

一方、調査地周辺では近年大規模な造成工事が行われており、平成9年度に実施された南隣接地の試掘調査では2.5mに及ぶ盛土を確認するとどまっている(図98③)。このため、今回の調査においても遺構面の残存及び、これを覆う厚い盛土の存在が予測された。

2 調査成果

当初、調査区は建物計画範囲のほぼ中央において東西方向に設定した。しかし掘削を進めたところ、予測通り厚い盛土を確認したため、崩落の危険性を考慮して、3箇所の手掘り(第1



図98 調査位置図(1:5,000)



図99 調査区配置図(1:400)

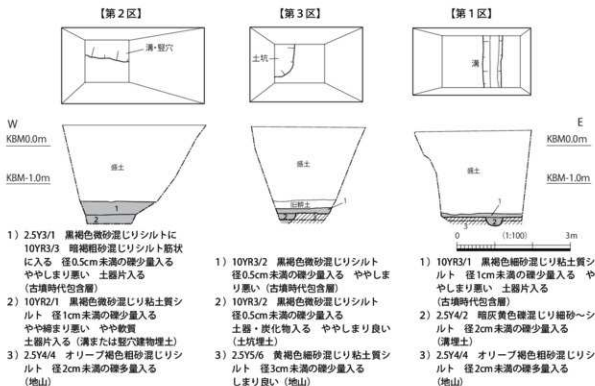


図100 調査区平面図・断面図(1:50)

区～3区)に切り替えた。

基本層序は3調査区いずれも同様で、GL-2.25mまで盛土、-2.35mまで暗褐色～黒褐色微砂混じりシルト(古墳時代後期包含層)、以下、掘削底である-2.5mまで褐色礫混じりシルト～黄褐色シルト(地山)が連続する。東端に設けた第1区では、包含層除去面(地山上面・古墳時代遺構面)において南北方向に伸びる小溝を検出した。西半部に設けた第2区では、北方向に落ちる溝(もしくは大型土坑)を検出した。中央部に設けた第3区では、土坑もしくは大型ピットを1基検出した。いずれの遺構も埋土に古墳時代の遺物を含む。第2区の土坑からは、奈良時代の土師器甕の破片がまとまって出土した。

3 まとめ

以上、既往の調査成果が示すとおり、今回の調査においても遺構面の残存を確認した。中臣遺跡では近年、住宅や店舗の建て替えが進んでおり、これに伴う試掘調査、発掘調査も増加の傾向にある。特に、山科川流域付近では遺構検出の報告が相次いでおり、小規模な開発であっても看過できない状況にある。なお、今回の工事計画では、改良杭の変更と保護層を設けた基礎深度を設定することにより、遺構面の保存が図られたことを追記しておきたい。

(黒須亜希子)

引用文献

- 調査①:財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』,2011年
調査②:財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』,2011年

V-4 中臣遺跡

1 調査に至る経緯と経過

調査地は、山科川の右岸にあり、市立山科南小学校より南東へ150mの地点に位置する。現状は東西に長い水田地4筆であり、西に接する市道（西野道）路面より1m程度の下がる。平成29年4月、この区画において宅地造成が届出されたため、6月20日に試掘調査をおこなった。

調査は、対象地中央を東西に通るよう計画された専用道路路地内に、計4箇所の調査区を設定して実施した（図101：第1区～第4区）。その結果、GL-0.2～0.3mという非常に浅い深度において、古墳時代後期の遺構面が残存することを確認した。これをうけて届出申請者は、遺跡保存のための設計変更を行い、工事掘削が遺構面に抵触しないよう、大幅な盛土を行うことを計画した。

その後、この盛土の敷設にあたり、敷地北辺及び南辺の一部において擁壁を設営する必要が生じた。擁壁工事は地盤改良を伴う内容であったため、遺構面の深度を把握する必要が生じたことから、当課においてさらに試掘調査の延長を実施した（11月20日、29日、12月7日）。



図101 調査位置図（1：5,000）

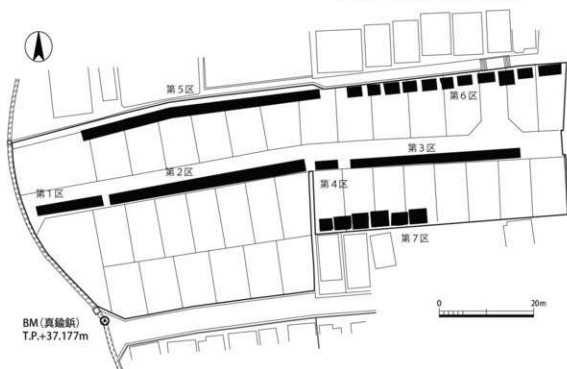


図102 調査区配置図（1：800）

この延長調査では、対象地の北西部に第5区、北東部に第6区、南辺中央部に第7区を設定した。なお第6区及び第7区は、仮設堀の脚部を避けて開口したため細かいトレンチの連続となっている(第6-1～11区、7-1～6区)。調査はその後、施工時の立会を経て、平成30年1月31日に完了した。本文はこの一連の調査に係る報告である。

2 位置と環境

調査地は縄文時代から室町時代までの集落跡として周知される中臣遺跡の北東辺に相当する。中臣遺跡は山科盆地屈指の集落遺跡であり、調査地周辺でも縄文時代～近世に至る遺構が数多く報告されている(表5参照)。

調査地より西野道を隔てた西側の区画では、平成9年度に試掘調査が行われており、GL-1.1mの

表5 調査地周辺の調査成果

(センター:旧京都市埋蔵文化財センター、埋文研:(公財)京都市埋蔵文化財研究所、No.は図1と対応)

No	京都市番号	所在地	種類	調査事由	調査内容	調査団体
①	97N276	山科区東野森野町 1-4	試掘	宅地造成	平安/土坑、柱穴(礎石) 遺物/土師器、弥生土器、須恵器	保護課
②	16N177	山科区東野森野町 1-4.10.1.11.1.11-3	試掘	デイ サービス	平安以後/河川 遺物/土師器、弥生土器	保護課
③	11N064	山科区東野森野町 21 他	試掘	宅地造成	遺構/確認できず。	保護課
④	92N472	山科区東野森野町 10-2	試掘	共同住宅	遺構/確認できず。	センター
⑤	15N303	山科区東野舞台町 63.2.67.3.69-7	試掘	共同住宅	遺構/確認できず。	保護課
⑥	(54 次)	山科区柳辻封七川町 (山科川河川敷)	発掘	河川改修	室町/水田跡野、溝 遺物/縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器	埋文研
⑦	(51 次)	山科区柳辻封七川町 (山科川河川敷)	発掘	河川改修	縄文晩期/埋裏 弥生前～中期/自然水路 古墳後期/溝 遺物/縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 緑輪陶器、灰輪陶器、瓦器、石鏡、磨石、石皿、 凹石、石鏡、石籠、石包丁	埋文研
⑧	(23 次)	山科区東野舞台町、 山科区柳辻番所ヶ口町 (山科川河川敷)	発掘	河川改修	縄文晩期/土器植墓、土坑 弥生前期/方形周溝墓、土器植墓 弥生中期/土器植墓、竪穴建物、土坑 古墳後期/竪立柱建物、土坑墓 飛鳥/竪立柱建物、竪穴建物 遺物/打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、石鏡、 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、 近世石仏	埋文研
⑨	07N402	山科区東野舞台町 77-2	試掘	店舗	古墳後期/土坑	保護課
⑩	04N086	山科区東野舞台町 97、97-28	試掘	宅地造成	時期不明/土坑 復乱多く調査不要を指導。	保護課
⑪	05N673 (83 次)	山科区東野舞台町 97-6	発掘	宅地造成	古墳時代/竪穴建物、竪立柱建物、柱列 平安～鎌倉/竪立柱建物、溝、柱列 遺物/縄文土器(後期)、弥生土器、土師器、須 恵器、緑輪陶器、灰輪陶器、石鏡、凹石、石斧、 銅片	埋文研
⑫	94N601	山科区東野舞台町 95-1	試掘	宅地造成	古墳後期/柱穴、土坑 遺物/土師器、須恵器。	センター
⑬	18N018	山科区東野舞台町 93-1	試掘	住宅	遺構/確認できず。	保護課
⑭	06N508	山科区栗柄野孤塚町	試掘	工場	中世?/石敷き遺構	保護課
⑮	04N137	山科区栗柄野中臣町 10-1	試掘	共同住宅	遺構/確認できず。	保護課
⑯	82N862	山科区栗柄野孤塚町 18-4	試掘	工場	遺構/確認できず。	センター
⑰	87N677	山科区栗柄野孤塚町 10-6	試掘	工場	遺構/確認できず。	センター
⑱	87N480	山科区栗柄野孤塚 5-1 他	試掘	宅地造成	時期不明/南北溝	埋文研
⑲	82N826	山科区栗柄野孤塚町 10.11.11- 7.27.27.1.27-2	試掘	工場	遺構/確認できず。	センター
⑳	18N085	山科区東野森野町 45-1	試掘	共同住宅	時期不明/土坑	保護課

深度において古墳時代後期～平安時代の遺構面が検出されている（図101①）。この調査では、平安時代の土坑（もしくは大型の柱穴）が3基確認されたが、その埋土からは弥生時代後期～古墳時代前期の土器が複数出土した。このため、下層に当該時期の遺構が存在する可能性が示された。

また、これを遡る昭和54～56年度に行われた山科川河川改修に伴う発掘調査では、河岸段丘斜面地において古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物が複数確認されている（図101⑥～⑧）。このため、今回の調査対象地においても、連続する遺構面の存在が予測された。

3 調査成果

(1) 基本層序

ここでは、対象地を東西に横断する第1区～第4区の堆積層を基準として記述する（図103）。

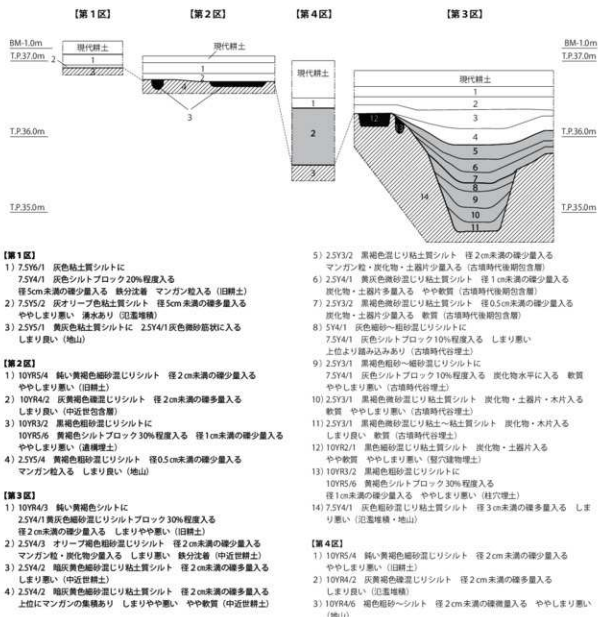


図103 基本層序模式図

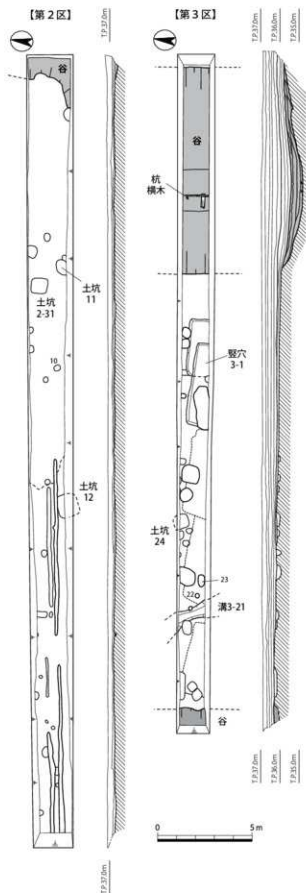


図104 第2区・第3区平面図・断面図(1:200)

対象地の地表面は、山科川が流れる東へ向かって階段状に整形されている。地山面もこれに即して傾斜するが、小谷が籐の歯状に介在するため、平坦地は限られている。

もっとも標高が高い第1区では、近現代耕土以下、GL-0.2～0.35mの深度において黄灰色粘土質シルトを主体とする地山に達する。ただし後世の削平により、遺構の残存状態は悪い。

第2区は、近現代耕土以下、GL-0.35mまで灰黄褐色礫まじりシルトを主体とする中世耕土があり、これを除去した段階で地山に達する。遺構面は地山上面で成立しており、ピット、土坑、溝を有する。1区同様、後世の削平により、残存する遺構は深い掘方を持つものに限られている。

第4区は、この地点を谷が通過するため、大きく落ち込む。その両肩は、第2区の東端、第3区の西端にかかる。GL-0.6mまで近現代耕土、-1.3mまで灰黄褐色礫まじりシルトを主体とする谷埋土があり、この深度で地山に達する。

第3区の西半部には、近現代耕土以下、GL-0.55mまでオリブ褐色粗砂まじりシルトを主体とする中世耕土があり、この直下に地山が存在する。地山上面は、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構面に相当する。地山の土壌はやや軟質であるが、もっとも遺構密度が高い区域である。

第3区が東半部には、ふたたび小谷が存在する。最大深度は1.2m程度、埋土は非常に軟質で、黒褐色微砂まじり粘土を主体とするオリジナルな谷埋土である下層と、上これを覆う古墳時代後期包含層

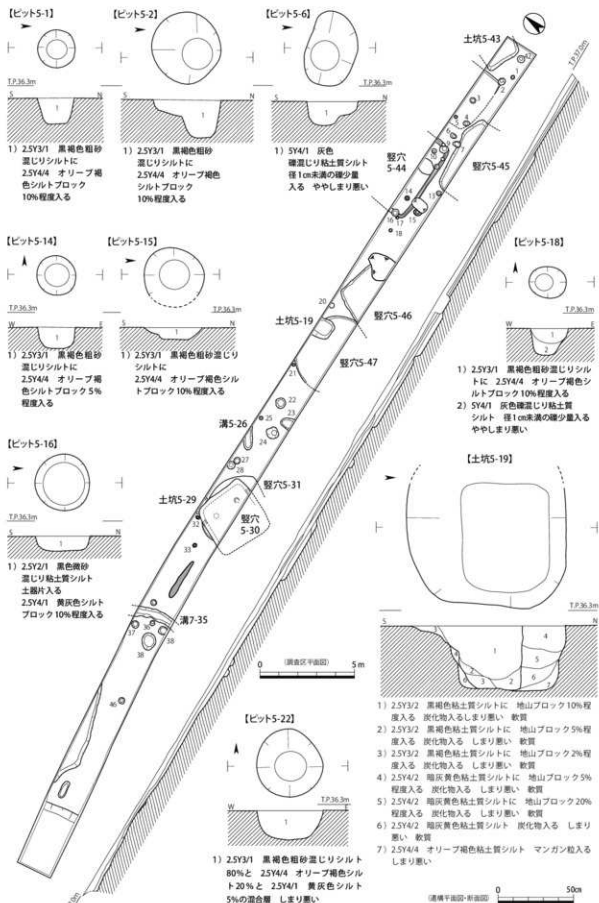


図105 第5区 遺構平面図・断面図 (1:200), 遺構平面図・断面図 (1:25)

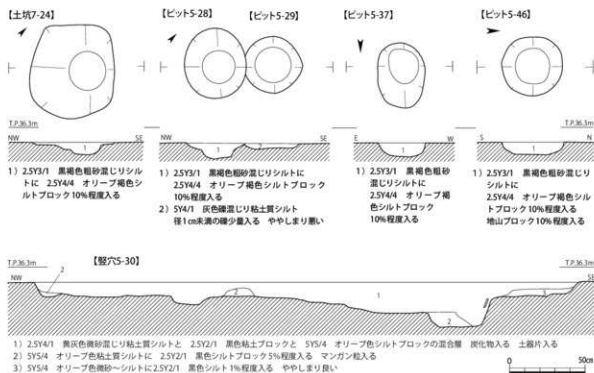


図106 第5区 遺構平面図・断面図(1:25)(1:50)

である上層に大別できる。この包含層は、約0.3mの層厚を保ちながら第3区東半部を覆うため、この付近では地表面から遺構溝に達するまで-1.05m程度の土壌の堆積がある。

(2) 遺構と遺物

今回検出したのは、主に古墳時代後期～飛鳥時代の遺構群である。第2区では、掘削中に弥生土器壺の底部の小片が出土したが、この時期に遡る遺構は確認できていない。遺構は、第2区、第3区、第5区、第6区、第7区で検出した。なお、今回の調査では遺構面の地中保存が図られるため、遺構埋土の掘削は最小限にとどめている。

第2区 第2区では、ピット、土坑、溝を検出した。西部部には中世の耕作溝が複数あり、これらに切られて古墳時代のピット、土坑が残存する。遺構の残存深度は非常に浅く、明確な掘方を認める遺構は少ない。

土坑2-31は、平面形状が一辺0.8mを測る隅丸方形の遺構で、埋土は黒褐色粗砂混じりシルトブロックと黄褐色シルトブロックの混合層を主体とする。土坑2-8、土坑2-11も類似した遺構であり、素掘りの井戸や貯蔵穴としての機能を想起させる規模をもつ。2-31からは土師器甕と高杯の破片が出土した。世紀末～7世紀初頭の製品である。

第3区 第3区西部では、竪穴建物、溝、土坑、ピットを複数検出した。竪穴や土坑の切りあいは少なくとも3時期の重複が確認できる。竪穴建物は東西ないし南南西～北北東に主軸をもつ方形プランである。このうちいくつかは削平により形骸をとどめるのみであるが、比較的、残存状態が良好な竪穴3-1の一部を断ち割ったところ、須恵器杯身(図109-1)、土師器甕(図109-

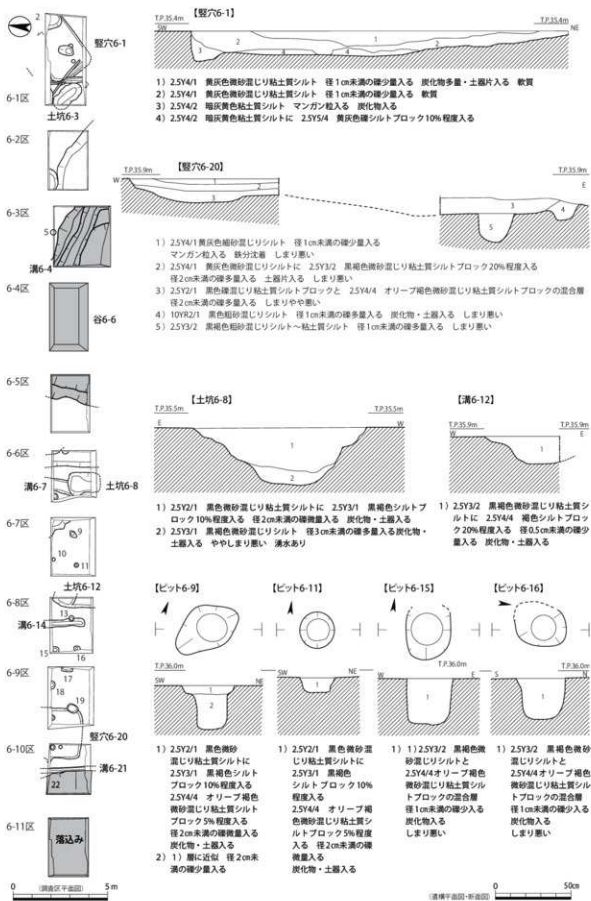


図107 第6区平面図(1:200)、遺構平面図・断面図(1:25)

3), 土師器高杯脚部(図109-7)のほか, 須恵器高杯の破片が出土した。概ね5世紀末~6世紀初頭の製品である。このほか, 大型土坑3-24からは須恵器杯身(6世紀)の破片が出土した。

調査区東半部の谷は, 最大幅10mを測る規模を持つ。遺構面の存続時期には流れの緩い小河川が存在したと推測される。埋土は非常に軟質で, 静かな堆積環境下にあったとみられる。底面付近からは, 2本の杭とその間に渡された横木の破片が出土した。岸から底面に至る斜面には壇状の造作が認められることから, 集落内の水場として機能した可能性が高い。埋土からは, 須恵器甕, 坏, 土師器甕等の破片が出土した。6世紀後半~7世紀に埋没したと推測される。

第5区 第5区では, GL-0.4mの深度において, 遺構面(地山上面)に達する。標高は高いが, 削平された範囲が少なく, 遺構の残存状態は良好である。竪穴建物, 溝, ビット, 土坑を複数検出した。

竪穴建物は円形プランをもつものと方形プランを持つものがあり, 前者が後者に先行する。竪穴5-30を断割ったところ, 北西から南東にかけて傾斜をつけて掘り込んだ地山上面と, 貼床土(し

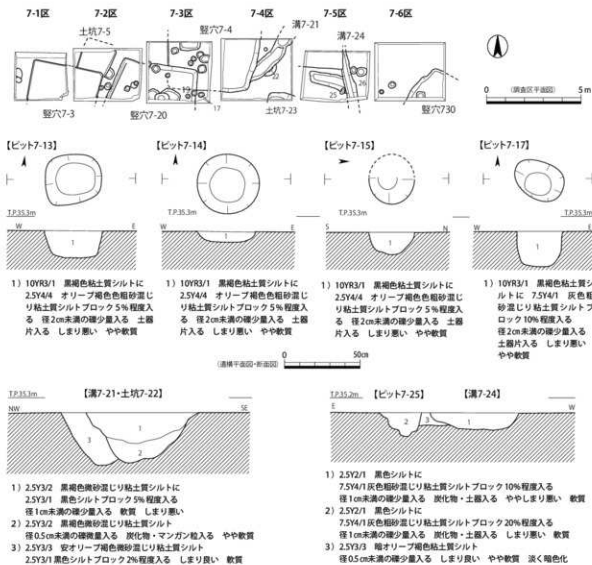


図108 第7区平面図(1:200), 遺構平面図・断面図(1:25)

まりのよいシルト層)の残存を一部で確認した。埋土には炭化物及び土器片が含まれていることから、建物として機能したと推測される。遺構内からは、須恵器甕と杯蓋、土師器甕の破片が出土した。概ね6世紀の製品である。

また、第2区、第3区と同じく平面形状が隅丸方形を呈する大型土坑が数基存在する。土坑

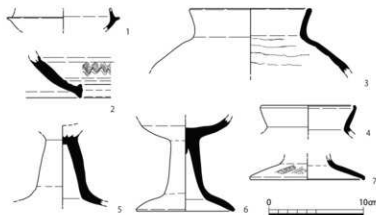


図109 出土遺物実測図(1:4)

5-19は断面形状が逆台形を呈する遺構であり、弥生時代の貯蔵穴に形状が近似する。ただし、断面観察からは、大型の柱穴である可能性も疑われる。埋土からは土師器甕の破片が出土した。古墳時代の遺構である。

このほか、調査区西半部では、湾曲してのびる溝7-35を検出した。埋土に流水痕跡が認められないこと、また遺構群はこれより東に集中することから、区画溝であると推定される。

第6区 第3区で検出した谷の上流にあたる第6区では、想定された範囲において同じく谷の落ち込みを確認した。ただし、東肩が湾曲北して狭まること、また谷底までの深度が浅くなることから、谷頭は近いと見られる。遺構は谷の両岸において、竪穴建物、溝、ビット、土坑を検出した。

竪穴建物6-1は、谷の東岸で検出した。土壌はやや湿潤であるが、掘方は明確で、埋土には一定量の遺物を含む。北東-南西方向に主軸をもつ方形プランで、柱穴と推測されるビットが1基確認できる。埋土からは土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。古墳時代後期の遺構である。なお、この建物の存在は、集落がより東へ連続すること、つまり山科川の段丘沿いに居住域が存在することを示すものであり、既往の調査成果との類似性を見出せる。

第6区西半部にも居住域は広がっており、6-9区と6-10区では竪穴遺構6-20を1棟検出した。西から東へ向かって傾斜する床面には、粘土質シルトブロックの混合層の堆積があり、東辺には壁溝が認められる。検出規模が一辺2.5mと狭いのは、削平によると思われる。竪穴6-20より西には西方向への落ち込みが認められるが、これが第4区で確認された小谷に連続すると推測される。

このほか、第6区では、大型土坑(土坑6-8、土坑6-12)を検出した。土坑6-8は一辺が1m以上を測る大型遺構である。機能は不明であるが、埋土に炭化物や土器片が含まれている。土坑6-12からは、土師器高杯(図109-6)が出土した。

第7区 竪穴建物、溝、ビット、土坑を検出した。特に竪穴建物は稠密に切りあっており、溝、ビットを含めた3時期以上の重複が確認できる。竪穴7-20は一連の遺構として検出したが、西辺と東辺の角度が異なるため、方形プランをもつ竪穴建物が重複する可能性が高い。これらのうちもっとも新しい遺構は竪穴7-20を切るビット群であり、そのひとつであるビット17からは土師器長胴甕(6世紀後半)の破片が出土している。

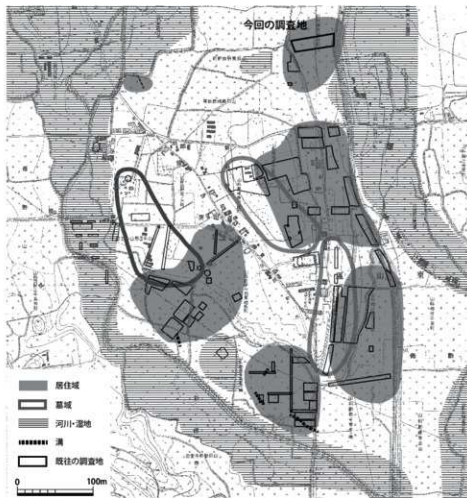


図110 古墳時代後期～飛鳥時代の中臣遺跡概念図

3 まとめ

以上、中臣遺跡の試掘調査について記述した。今回の調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物を中心とする遺構群を多数検出したことにより、中臣遺跡の集落が、現在の包蔵地範囲よりもさらに北へ広がることが確実となった。周辺地ではこれまで試掘調査による遺構の発見が乏しいことから、大規模な発掘調査に結びつかなかった例が多い。今回、遺跡の北東端部において集落の存在が示されたことは、中臣遺跡の展開を考える上でも、非常に貴重な成果と言える。

(黒須亜希子)

引用文献

- 調査①：京都市文化市民局「京都市内遺跡試掘調査概報」平成9年度，1998
 調査②：京都市文化市民局「京都市内遺跡試掘調査報告」平成28年度，2017
 調査⑥、⑦：(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1984
 調査⑧：(財)京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡』昭和54年度山科川中小河川改修事業に伴う発掘調査の概要，1979
 調査⑩：(財)京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-1，2006
 調査⑫：京都市文化市民局「京都市内遺跡試掘調査概報」平成7年度，1996

V-5 伏見城跡

1 調査に至る経緯と経過

調査地は、伏見区桃山町下野地内に所在する(図111)。伏見城跡が築かれた桃山丘陵の西側斜面に相当し、敷地内においても西へ向かって大きく下がる。この区画に共同住宅の建設が計画されたことから、平成29年8月に当課による試掘調査を行った。その結果、南北方向に伸びる石列と整地層、多数の裏込石を発見した。これにより発掘調査が必要と判断されたことから、同年10月より建物の計画範囲を対象として、本発掘調査が実施された(以下、本調査と記述)。本調査では、南北方向の2時期にわたる石垣と暗渠、石組溝が検出されるとともに、調査地外へも遺構が連続することが明らかとなった。

平成30年2月、本調査範囲の南北において同建設に付随する地盤改良工事が実施されたため、当課による立会調査を実施した。その

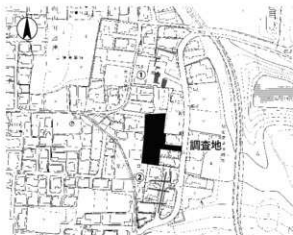


図111 調査位置図(1:5,000)

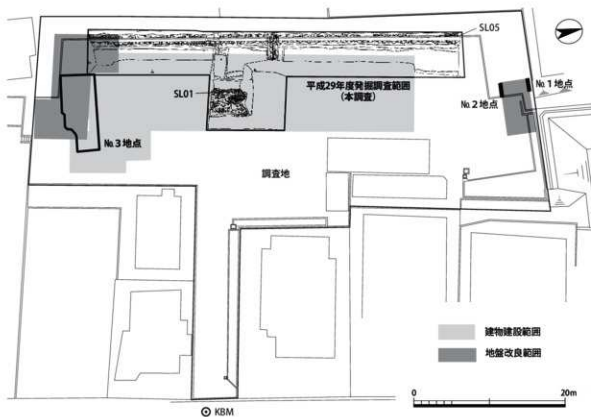


図112 調査区配置図(1:500)

結果、No 3 地点において桃山期～江戸時代初頭の石垣及び石敷遺構、石組階段遺構を発見した。このため急速、記録保存のための延長調査を行った。本文は、これら一連の立会調査に係る報告である。

2 調査成果

(1) 基本層序

調査区は、本調査区北側に2箇所(図2:No 1・2地点)、南側に1箇所(図2:3地点)を設定した。No 1地点では、GL-1.5mまで盛土、-2.1mまで褐色粘土質シルトを主体とする上方からの崩落土及び造成土、-2.5mまで拳大の礫を多く含む明褐色粘土質シルト層(石垣裏込層)、以下、掘削底である-2.6mまで締まりの良い明黄褐色細砂(整地層)を確認した。

No 2地点では、GL-1.5mまで盛土、-2.4mまで焼土及び炭化物を含む明黄褐色～にぶい橙色を呈するシルト層、-3.0mまで拳大の円礫及び角礫を多量に含む灰褐色シルト層(石垣裏込層)、以下、掘削底である-3.2mまで締まりの良い黄褐色砂質シルト層(整地層)を確認した。

No 3地点では、調査地の南西隅から西へ向かい、斜面を断割るように掘削を行った。はじめに本調査で確認されているO1SL石垣の位置を把握するため、想定される地点で深掘りを行った。その結果、およそGL-2.5m(T.P.73.0m)以下において、一辺90cm前後を測る巨石を2～3段積む石垣(SLO1の延長)を確認した。

SLO1石垣付近における基本層序は、GL-1.5mまで盛土、-2.2mまで鈍い赤褐色～褐色を呈する粗砂混じり粘土質シルト(造成土および崩落土)で、瓦や炭化物、焼土のほか、上方からの転石を

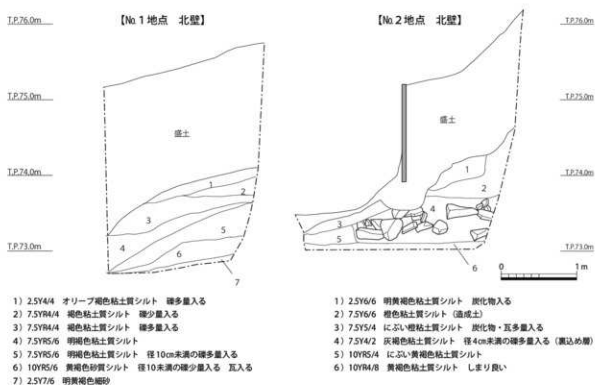
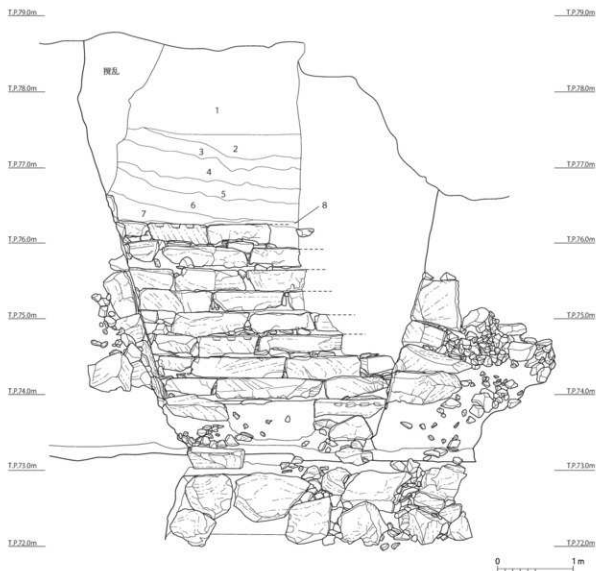


図113 調査区断面図(1:100)

含む。-2.5mまで明黄褐色粗砂混じり粘土質シルト、-3.0mまで締まりの悪い黄褐色粘土質シルト、以下、掘削底である-3.2mまで鈍い黄色粘土質シルトを主体とする地山を確認した。なお、O1SL石垣の掘り方は、造成土および崩落土の下面において成立しており、本調査成果と齟齬のない状況であった。

O1SL石垣より東へ向かって展開する階段部分では、GL-0.2mまで盛土があり、これを除去した



- | | |
|--|--|
| <p>1) 10YR4/6 褐色粗砂混じりシルト 径10cm未満の礫多量入る
炭化物・瓦・焼土入る しまり悪い</p> <p>2) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る
炭化物・瓦・焼土入る しまり悪い</p> <p>3) 10YR4/6 褐色粗砂混じりシルトに
2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロック10%程度入る
径3cm未満の礫少量入る 炭化物・瓦・焼土多量入る
しまり悪い(焼土層)</p> <p>4) 2.5Y5/6 黄褐色粗砂混じり粘土質シルトに
2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロック30%程度入る
径2cm未満の礫少量入る やや軟質 ややしまり良い(造成土)</p> | <p>5) 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂混じりシルトに
2.5Y5/4 黄褐色鮮度質シルトブロック10%程度入る
径2cm未満の礫少量入る 炭化物・瓦・焼土多量入る(焼土層)</p> <p>6) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルトに
10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘土質シルトブロック5%程度入る 径2cm未満の礫
少量入る 炭化物入る しまり悪い</p> <p>7) 10YR4/3 鈍い黄褐色粗砂混じりシルト
一定5cm未満の角礫少量入る 炭化物・焼土多量入る(焼土層)</p> <p>8) 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘土質-粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫
量入る しまり良い(化粧土)</p> |
|--|--|

図114 階段遺構立面図，東壁断面図(1:50)

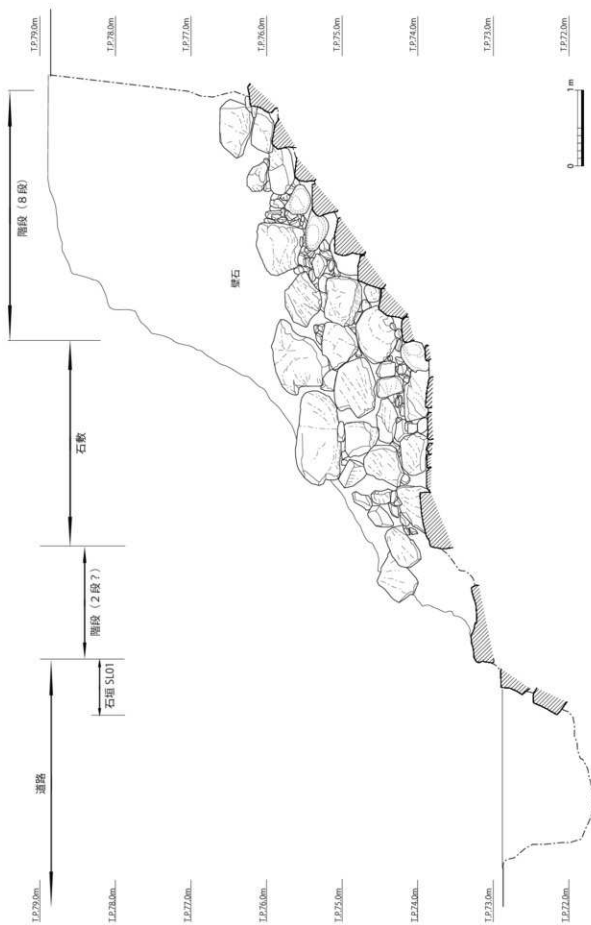


图 115 阶段遺構北石垣立面图 (1 : 50)

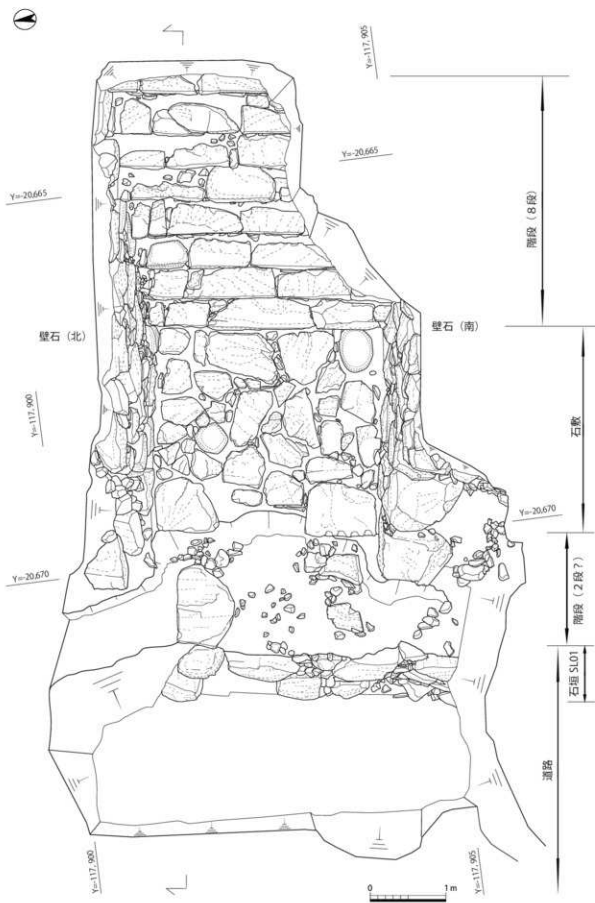


图116 阶段遺構平面图 (1 : 50)

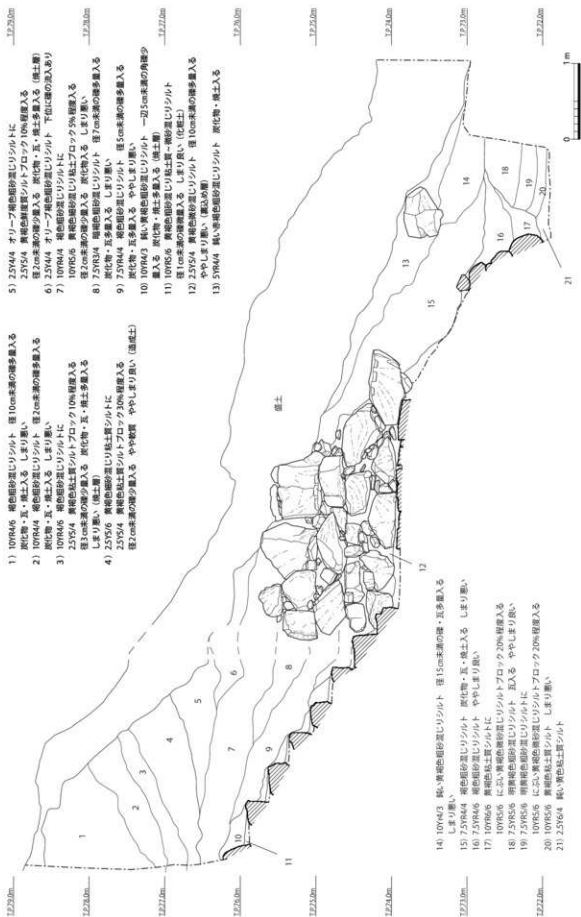


図117 階段遺構南右丘立面図、断面図(1:50)

段階で、階段の壁石が露出した。また、の石敷部分では、-2.5mまで崩落土である暗褐色礫混じり粘土質シルトが堆積し、この層を除去した段階で、石の上面を検出した。また、8段が残る階段の上位部分では、-2.3mまで焼土層と造成土の互層があり、-3.0mまで崩落土、その下にさらに焼土層が存在し、これを除去した段階で階段石を検出した。なお、階段石上面には化粧土と見られる黄褐色粗砂混じり粘土質シルトの薄層が、部分的に残存していた。

(2) 遺構と遺物

階段遺構は、01SL石垣を含む東西長7.5m、南北幅3.0mの範囲にわたり検出した(図5)。

遺構は、01SL石垣と石敷遺構、階段遺構とその壁石に大別できる。01SL石垣は、壁石ほかを支えるための根石として地中に設置されたものであり、階段機能時には地上に見えていない。このため、本調査では01SLの上面が道として機能したものとして報告されている。石垣SL01の西面より0.3m東の地点には平石があり、1.8m東には0.6mの比高差をもって石敷遺構が連続する。残存状態は良くないが、平石から石敷までの1.5mの距離にはこの比高差を埋めるための階段(2段?)が設けられていた可能性が高い。この範囲に径5cm程度の栗石や、巨石の間隙を埋める薄い間詰石が残存するのはその名残であると推測される。

石敷は西端に一辺0.7~0.9mを測る巨石を配し、これより東へ30個程度の平石を敷き詰めてい

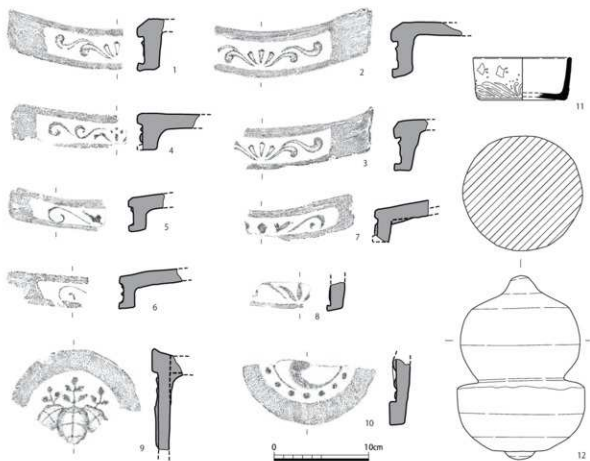


図118 出土遺物実測図1 (1:4)

る。石種は粘板岩、チャート、ホルンフェンスが多く、一部に砂岩が含まれる。敷石上面の窪みや石と石の間隙には、肌理の細かい黄褐色微砂混じりシルトが残っており、これが化粧土として用いられたと考えられる。

続いて階段は、東西長3.3mの間に計8段を確認した。南半部は崩落の危険性があったため掘削を断念したが、北半部は壁石とともに連続して検出することができた。現地形の勾配を考えると、さらに東へ続くものと推測される。石段は、長さ0.8～1.4m、幅0.4m程度に切り出した角柱石を並べて造られており、平面台形を呈する矢穴痕をもつものが含まれる。階段石は底面に平石を噛ませることによって、段先をやや上げ気味に据える。それにより生じた傾斜は、化粧土を敷くことにより解消されている。

なお、この階段上段付近では化粧土の直上に焼土の堆積があり、これを除去した形跡がない。このため、この階段が被災後に埋没し、その後復旧されなかったことが窺える。

壁石は、南北の壁面が残存している。西面はともに失われており、裏込石が露出している。南北壁石ともに最大4段が残存し、72～75度の傾斜をもって上方へ開く。石の表面には被熱の痕跡が認められた。

3 まとめ

以上、伏見城跡の詳細分布調査について報告した。今回の階段遺構の発見は、伏見城跡内では初の事例となる。大名屋敷が丘陵斜面を造成して建設されたことを考慮すれば、他にも存在する必然性が高い遺構であり、その発見は極めて貴重な事例となる。

なお、検出された階段遺構が火災後に廃絶していること、その後複数回の火災と造成が確認



図119 調査区接合図 (1:800)

できること、また石材の矢穴跡と伏見城の築城年代から、階段遺構の造営は伏見城下の造営のなかでも比較的初期段階（慶長年間初頭）に位置づけることができる。当時の状況を描いたと推定される『伏見御城櫓并屋敷取之絵図』によれば、対象地は「松平下野守」の屋敷地と記されており、徳川家康の次男であり豊臣秀吉の養子となった結城秀康か、徳川秀忠の同母弟である松平忠康（忠吉）のいずれかが想定される。

（黒須亜希子）

引用・参考文献

株式会社四門、『伏見城跡 京都市伏見区桃山町下野27-1の発掘調査』、2018年。

森岡秀人、「木幡山伏見城跡の桃山陵墓地内観察と「豊徳」期城郭提唱の意義」『京都橘大学大学院研究論文集』15、京都橘大学、2017年。

VI 調査一覧表

I 2018年1～3月期（平成29年度）

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
1	大蔵省跡	上京区淨福寺通一条下る東西依屋町 642-3, 642-8, 642-21	1/30	盛土以下、聚楽第の濠の埋め土を確認。調査区北側では、GL-1.5 mで黄褐色の地山を確認。	14㎡	17K660
2	主水司跡、聚楽遺跡	上京区中務町 926	3/22	GL-0.9 mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	10㎡	17K759

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
3	北辺三坊七町・八町跡、公家町遺跡、内朝野遺跡、新在家構え跡	上京区京都御苑 3	1/12	GL-0.4～0.6 mで、元治の大火（船御門の變）時に形成されたと推測される焼土層と基礎層を確認。 本文報告 18 ページ。	34㎡	16H474
4	一条三坊十五町・十六町跡、新在家構え跡、巨二条城跡	上京区京都御苑 13 の一部	1/22	GL-1.1 mで近世整地、-0.74 mで石組み溝の成立面を確認。 発掘調査を指導。本文報告 25 ページ。	11㎡	17H537
5	三条一坊十三町跡	中京区大宮通姉小路下る姉大宮町西側 75-1, 77-1, 77-2	3/9	対象地西側ではGL-0.8～1.2 mで湿地状堆積。東側では、-0.9 mで湿地状堆積、-1.0 mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	16㎡	17H559
6	三条三坊五町跡、烏丸御池遺跡	中京区室町姉小路下る投行者町 361, 363, 365	1/9	平安～江戸時代の包含層と遺構面を検出。対象地南半部では、GL-1.85 m平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構群を確認し、礎石立建物が存在したことが明らかとなった。 発掘調査を指導。	60㎡	17H353
7	八条二坊九町跡	下京区油小路下魚ノ瀬下る油小路町 288 他	3/20	GL-1.25 mで室町時代の遺構面、-1.5 mで鎌倉時代の遺構面を検出。 発掘調査を指導。	43㎡	17H557
8	九条二坊十二町跡、烏丸町遺跡、御上屋跡	南区西九条蔵王町 11-6, 11-49	3/19	GL-0.6 mで旧耕土、-0.75 mで灰オリープ色泥砂、-0.85 mで灰オリープ色砂泥、-0.9 mで灰オリープ色泥砂、-1.2 mで径 10cm ほどの礫を多く含む灰褐色土上、-2.0 mで明黄褐色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	23㎡	17H688
9	九条三坊九町跡、烏丸町遺跡	南区東九条上殿田町 48	3/23	平安～鎌倉時代の苑池の遺構の可能性がある木杭列を確認。 発掘調査を指導。	25㎡	17H620
10	九条四坊二町跡、烏丸町遺跡	南区東九条東山王町 6, 8-2	2/7	GL-0.95 mで暗灰黄色泥砂で鎌倉の遺構面、-1.05 mで灰オリープ色シルト、-1.25 mで黒褐色微砂混じり粘土～粘質シルト、-1.1 mで灰オリープ色砂礫の地山を確認。東洞院大路の東側溝と考えられる溝を確認。 発掘調査を指導。	39㎡	17H558

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
11	北辺四坊一町跡	右京区花園寺ノ中町 8	3/7～8	GL-0.5 mで時期不明包含層、-0.75 mで河川堆積、-1.65 mで地山の明黄褐色砂礫を確認。顕著な遺構・遺物なし。	19㎡	17H520
12	二条四坊十一町跡	右京区太秦安井馬場町 16 他	3/1	GL-0.7 mで中世遺構面を確認。耕作溝以外の明確な遺構を検出できず。	66㎡	17H445
13	西京極大路跡、龍理寺跡	右京区太秦安井奥畑町 19-8, 22-15, 29	2/22	GL-0.8 mで平安時代包含層、-1.25 mで粘性がある暗褐色泥砂、-1.3 mで土師器を含む暗オリープ褐色泥砂を確認。計画深度に達したため、地山は確認できず。	11㎡	17H512

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
14	五条一坊十町跡	中京区壬生下溝町2の一部	2/20	GL-0.79mで泥濘堆積の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	28㎡	17H505
15	五条一坊十町跡	中京区壬生下溝町2の一部	2/20	GL-1.96mまで解体機具で、直下に砂礫を確認。顕著な遺構・遺物なし。	8㎡	17H504
16	五条四坊二町跡	右京区西院日野町50, 51, 52-2	2/21	敷地西半部ではGL-1.2mで複数の掘り込み痕をもつ南北溝を検出。東半部では、弧状に曲がる溝を2条検出。周溝の可能性ある。	39㎡	17H676
17	六条三坊四町跡	右京区西院清崎町21	1/24	GL-0.5mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	50㎡	17H631
18	六条四坊七町跡、西京極遺跡	右京区西院月双町115, 114の一部	2/27	GL-0.75mで近代耕土、-1.1mで黄褐色シルトの地山を確認。地山直上で弥生時代の竪穴建物と考えられる遺構や溝状遺構を確認。 発掘調査を指導。	39㎡	17H509
19	七条一坊二町跡	下京区朱雀分水町80 他	2/15 ~ 16・26	GL-0.65mで黄褐色シルトの地山上面で、平安時代後期の遺構を確認。 発掘調査を指導。	226㎡	15H394
20	七条四坊六町跡	右京区西京極北裏町13	3/28	GL-1.04mで灰黄色砂礫の地山を確認。	17㎡	17H773
21	九条二坊一町跡	下京区梅小路高畑町17-2	2/6	GL-0.75mで中世包含層、-1.0mで古代包含層、-1.15mで砂礫の泥濘堆積を確認。	15㎡	17H508

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
22	嵯峨遺跡	右京区嵯峨二尊院前北中院町2-9	1/23	GL-0.2mで褐色シルト、-0.25mで中世包含層もしくは造成上、-0.4mで地山を確認。	15㎡	17S437
23	嵯峨遺跡	右京区嵯峨小倉山堂ノ前町6-16, 7-1, 7-3	3/27	GL-0.42m浅黄色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	35㎡	16S719
24	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺車道町2-1 他5筆	3/14 ~ 16	GL-0.45mで中世整地層、-0.81mで地山を確認。 発掘調査を指導。	122㎡	17S496
25	嵯峨遺跡、宝輪寺境内	右京区嵯峨北堀町32-3 他	3/12 ~ 13	GL-0.31mで近世盛土、-0.5mで中世包含層、-0.7mで地山を確認。地山上面で土坑・柱穴を検出。 設計変更にて、遺構を地中保存。	40㎡	17S525

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
26	栗栖野瓦京跡	左京区岩倉幡枝町628 他	1/17 ~ 18	GL-0.2~0.85mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	126㎡	17S423
27	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金園寺)庭園隣接地	北区衣笠馬場町18, 19-1, 19-2, 20-1, 20-2, 20-3	3/29 ~ 30	GL-0.4m以下で北山殿造営に伴う造成上を確認。 発掘調査を指導。	55㎡	17S827 (17A005)
28	寺町旧城	北区鞍馬口通寺町東人北側上善寺門前町340	1/25	GL-0.4~0.6mで黄褐色粘質シルトの地山を確認。地山上面で東西方向溝を1条検出。	21㎡	17S344
29	上京遺跡	上京区元智願寺通大宮東入寺今町510・512-1	2/23	GL-1.9mの褐灰色記砂で中世の遺構面、-2.7~2.9mまで黄灰色シルトの平安の遺物包含層を確認。 発掘調査を指導。	23㎡	17S639

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
30	山科本願寺南殿跡	山科区首羽伊勢宿町32-78	3/5	GL-0.2mで黒褐色シルト、-0.4mで黒褐色シルト、-0.65mで水成堆積と考えられるクレープ褐色砂礫を確認。顕著な遺構・遺物なし。	8㎡	17S744

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
31	伏見城跡	伏見区露匠町 13-1、36-3、 同区船場町 196-13	2/28	GL1.3 mで江戸時代中期～後期の遺構群を検出。	28㎡	17F613
32	伏見城跡	伏見区桃山町下野 27-1、 27-10の一部	2/7	近世の伝「松平下野守」邸の虎口を検出。 本文報告 81 ページ。	50㎡	16F684

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
33	長岡京左京 一条四坊七町跡	伏見区久我石原町 9-16、 南区久世大蔵町 560-1、 560-32、560-33、615	2/19	GL-0.25 mで長岡京期の柱穴列および弥生時代の溝を確認。専用道路部分のみ詳細調査を指導。 住宅部分は設計変更にて、地中保存。	91㎡	17NC500
34	長岡京左京 九条四坊七町・八町跡	伏見区納所屋柳 他	2/13	GL-0.73～1.42 mで灰色細砂、-1.10～1.27 mで灰白色砂礫～粗砂、-1.79～1.92 mで灰白色粘質土～粘土を確認。湿地状堆積の一部もしくは、旧浚渫の埋理上の可能性がある。	16㎡	17NC499

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
35	史跡及び名勝 嵐山	西京区嵐山中尾下町 25	1/29	GL-0.65～0.81 mで灰オリープ泥砂、-1.0 mで礫混じりオリープ色泥砂を確認。顕著な遺構・遺物なし。	14㎡	29N084
36	史跡及び名勝 嵐山 嵐山谷ヶ辻子町道跡	西京区嵐山谷ヶ辻子町 7-4、 58-1、59	1/23	GL-0.5～0.56 mで灰オリープ泥砂、以下埋没河川を確認。顕著な遺構・遺物なし。	44㎡	29N087
37	史跡及び名勝 嵐山 嵐山谷ヶ辻子町道跡	西京区嵐山東海道町 52-1	1/31	GL-0.5～0.56 mで灰オリープ泥砂、以下埋没河川を確認。顕著な遺構・遺物なし。	16㎡	29N091
38	史跡及び名勝 嵐山 嵐山谷ヶ辻子町道跡	西京区嵐山谷ヶ辻子町 50- 10	1/26	GL-0.6 mで黄褐色シルトの地山を確認。地山上面で平安時代の土坑 1 基を検出。	9㎡	29N083
39	上久世道跡	南区久世上久世 251、253- 2、265-1、265-3	1/31	GL-0.8～1.05 mで黄灰色粘上～黄色粘質土を確認。顕著な遺構・遺物なし。	15㎡	17S513
40	中久世道跡	南区久世殿城町 86-5、 86-6、86-7、86-8	3/26	GL-0.9 mで旧流路を確認。遺物は希薄。	21㎡	17S517
41	東山古墳群	西京区大枝北福西町二丁目 300-3	1/15 ～ 16	斜面地では GL-1.2～1.3 mでふい黄褐色の岩盤層を確認。平地では、GL-0.4～0.62 mで明赤褐色粘質土～にふい黄褐色粘質土、浅黄褐色粘質シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	35㎡	17S665

II 2018年4～12月期（平成30年度）

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
42	大藏省跡	上京区西中筋町 10, 11, 12	12/7	GL-0.5 まで盛土、-1.0 m まで近世～近代堆積層、以下、地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	5㎡	18K116
43	右近衛前跡、 鳳翔道跡	上京区御前通下立亮上天満屋町 312	4/4 5/28 ～6/8	西面大堀内溝を検出。 試掘の延長を指導。本文報告 10 ページ。	136㎡	17K629
44	史跡 平安宮内裏跡、 朝堂院跡、豊楽院跡	上京区千本通下立亮下る小山町 879-2、 中京区聚楽廻東町 35-1	7/11	GL-2.0m まで上取り。顕著な遺構・遺物なし。	8㎡	30N008
45	朝堂院跡、豊楽院跡	上京区竹屋町通千本東入主税町 1143, 1144	12/19	推定龍尾壇付近で整地土を検出。 本文報告 7 ページ。	17㎡	18K445

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
46	北辺三坊七・八町、 一条三坊十六町跡、 公家町道跡、 内膳町道跡、 新在家構え跡	上京区京都御苑 3	4/26 10/24 11/20	新規埋設管の管路西側で現代盛土以下、焼土や灰化物を含む赤褐色泥砂、にぶい黄褐色泥砂の下、GL-0.8 m で非常に締まった黒褐色シルト、江戸時代の土師器皿片を含む黄褐色シルトを確認。 本文報告 18 ページ。	53㎡	16H474
47	一条三坊七町跡、 旧二条城跡	上京区室町通出水上る近衛町 44	10/1	GL-1.9m まで近世～近代堆積層を確認。検出遺構はすべて江戸時代以降と判断。	5㎡	18H141
48	一条三坊十五町跡、 新在家構え跡、 旧二条城跡	上京区京都御苑 438-1	8/27	盛土以下、幕末以下の整地層を確認。近世遺物を多く含む。	31㎡	18H001
49	二条二坊八町跡、 二条城北道跡	上京区堀川通丸太町上る上堀川町 121 他	9/12	GL-1.1 m で地山を確認。一部で中世に悪る遺構を検出。遺存状態は悪い。取り扱い協議中。	49㎡	18H418
50	二条二坊十町跡、 高院院跡、 二条城北道跡	中京区堀川通丸太町下る七町目 5, 6-1	6/25	GL-1.6m で池に伴う埋地堆積。0.9 m で地山確認。地山直上で平安時代の土坑等を検出。 発掘調査を指導。	36㎡	17H679
51	二条三坊十二町跡	中京区烏丸通二条上る再輪屋町 261-1	8/3	GL-2.3 m で明黄褐色粘質土の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	19㎡	18H032
52	三条一坊三町跡	中京区西ノ京南聖町 9、 10-5、10-9、12、24-4	7/30	GL-0.6 ～ 0.8 m で明黄褐色細砂～砂礫の地山を確認。地山上面で朱雀大路東側溝と思われる溝を確認。理上には近世の遺物を含む。	75㎡	18H253
53	三条一坊四・五町跡	中京区西ノ京勤学院 20-2、 同区西ノ京南聖町 2-2	6/26	GL-1.1 m で平安時代の包含層、-1.3m で地山を確認。地山上面で平安時代の溝を検出。 発掘調査を指導。	24㎡	18H189
54	三条二坊二町跡、 堀川御池道跡	中京区大宮通御池上る市之町 180-1 他	9/14	盛土直下に近世遺物包含層。GL-0.75m で地山を確認。地山上面で中世の上坑 1 基を確認したが、全体的に近世以降の遺構群により削平を受け、遺存状態は悪い。	58㎡	18H427
55	三条二坊三町跡、 堀川御池道跡	中京区大宮通御池下る三坊大宮町 148 他	6/6	GL-1.4 m で明黄褐色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	30㎡	18H072
56	三条四坊五町跡、 烏丸御池道跡	中京区堺町通姉小路下る大坂材木町 700、696-1	7/23	GL-1.5 ～ 2.5 m で、平安～桃山時代の遺構面 4 面を検出。 発掘調査を指導。	51㎡	18H101
57	三条四坊十三町跡	中京区御幸町姉小路下る下丸屋町 325、328、330、 322	11/15	GL-2.2m で基礎層である灰黄褐色砂礫層を確認。その直上で鎌倉時代の土坑を 1 基検出。近世以降に削平を受ける。遺存状態は悪い。	44㎡	18H218
58	四条二坊十三町跡	下京区四条通油小路東入る傘鉦町 50 他	12/6	盛土以下、GL-0.84 m で灰色シルト、-1.1 m で明黄褐色の地山を確認。地山上面で土坑等を検出。 発掘調査を指導。	27㎡	18H214
59	四条三坊十四町跡	中京区錦小路烏丸東入元法然寺町 689、687	5/18	平安～江戸時代の遺構を確認。特に平安～室町時代の遺構が良好に残存。2～4 面の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	54㎡	18H100
60	四条四坊一町跡、 烏丸御池道跡	中京区高倉通三条下る丸屋町 165 他	9/25 11/21 ～22	GL-0.75 m で平安～江戸時代の遺構面を検出。室町時代、鎌倉時代の遺構面、柱穴等を確認。 試掘調査の延長を指導。本文報告 27 ページ。	13㎡	18H070

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
61	四条坊七町跡	中京区堺町通六角下る甲屋町 392 他	6/22	平安～室町時代の遺構が良好に遺存していることを確認。発掘調査を指導。	35㎡	18H069
62	五条二坊九町跡、 本陣寺の構え跡	下京区堀川通四條下る四條堀川町 272-6、272-5、 同区雁ヶ井通四條下る高野堂町 405 の一部 他 6 筆	5/28	盛土以下、GL-1.0 m で確認じり黒褐色シルト（整地上）、-1.3 ～ -1.4 m で灰白色砂礫（無遺物層）に至る。整地上上面で土坑や柱穴を確認。	41㎡	17H147
63	五条二坊十六町跡	下京区西洞院通四條下る妙伝寺町 701	11/14	GL-0.9 m で河川堆積みられる明黄褐色微砂。以下、基盤層と考えられる砂礫層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	75㎡	18H248
64	五条三坊一坊跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区妙伝寺町 710 他	11/26 ～ 27	GL-0.62 m で近世～中世整地層、-1.0 m で中世整地層、1.14 m で平安時代後期整地層、-1.3 m で地山を確認。	57㎡	18H065
65	五条三坊十町跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区綾小路烏丸西入童待寺町 171	12/10 ～ 12	GL-1.4 m まで近世包含層、-1.6 m まで中世包含層。以下、平安時代末期の整地層を確認。整地層上面で室町時代の土坑及び平安～鎌倉時代の土坑を検出。試掘の延長を指導。	91㎡	18H043
66	五条三坊十三町跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区因幡堂町 717、658-2	5/21	平安後期～室町時代の遺構面を確認。発掘調査を指導。	12㎡	18H082
67	五条三坊十三町跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区東洞院通高辻下る灯籠町 562 他	6/5	GL-1.9 ～ 2.3 m で地山を確認。地山上面で、東洞院大路西側溝及び東洞院大路西端地内溝と考えられる遺構を検出。本文報告 37 ページ。	22㎡	18H068
68	五条四坊十三町跡	下京区魁屋町通高辻下る鍵屋町 221-2 他	8/23 ～ 24	GL-1.9 ～ 2.2 m まで近世視見。以下、砂礫層を確認。GL-1.6 m で平安時代後期の土坑を検出。	59㎡	18H071
69	五条四坊十六町跡、 寺町旧域	下京区寺町通四條下る貞安前之町 620	8/31	GL-0.5 m で近世境土、-0.7 m で近世整地層、-0.9 m で中世末～近世盛土、-1.12 m で中世整地層、-1.14 ～ 1.3 m で平安時代後期～中世整地層。以下、河川堆積を確認。	48㎡	18H357
70	六条二坊十町跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区五条油小路西入北側小泉町 87、89、90、94	12/3	GL-0.65 m で地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	27㎡	18H590
71	六条四坊二町跡	下京区五条通東洞院東入万寿寺町 140 之他、 同区開之町通五条上る朝麦町 115 他	11/21	GL-1.3 m の灰オリーブ粘質土上面で、近世前期～後期の遺構を検出。GL-1.5 m で灰色砂礫の地山を確認。	40㎡	18H119
72	七条四坊七町跡、 寺町旧域	下京区高倉通花屋町下る若松町 434-1、435-1、435-2、438-1、 同区富小路通花屋町下る唐物町 437、438-1、459-3	5/24 ～ 25	GL-1.78 m で桃山期～江戸時代末の包含層及び遺構面を確認。地山上面において桃山期の土坑を 1 基検出。	85㎡	17H854
73	八条一坊一町跡	下京区観喜寺町 13 他	11/28 ～ 29	GL-1.5 ～ 1.8 m で地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	223㎡	18H124
74	八条一坊十二町跡	南区八条町 471-5 他	10/29 ～ 30	敷地西半で、GL-0.45 m で整地層、-0.6 m で地山を確認。整地層上面で溝・土坑を検出。取扱い協議中。	62㎡	18H537
75	八条二坊一町跡、 東市跡	下京区大宮通本津屋橋上る上之町 416、416-2 の一部	8/10	GL-1.3 ～ 1.6 m で灰色～オリーブ黄色細砂礫の地山を確認。調査区西端の地山上面で大宮大路東側溝と考えられる南北方向溝を検出。本文報告 40 ページ。	19㎡	18H103
76	八条三坊八町跡、 東本願寺前古墓群	下京区七条新町東入西堀町 146	4/16	GL-0.55 m で中世の遺構面、-1.1 m で鎌倉時代の遺構面、-1.3 m で地山を確認。七条大路の内溝と考えられる溝を検出。発掘調査を指導。	63㎡	17H596
77	八条四坊十二町跡	下京区東之町 他 地内	7/18	GL-1.8 ～ 2.87 m まで河川氾濫堆積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	50㎡	17H518
78	九条一坊三町跡	南区八条内田町 65、65-7	12/18	盛土以下、GL-0.4 m まで近世～近代堆積層、-0.5 m まで近世包含層。以下、地山及び埋没道路を確認。	27㎡	18H180
79	九条三坊八町跡、 烏丸町遺跡	南区東九条室町 55	4/5	盛土以下、GL-0.8 m で湿地堆積、-1.1 m でオリーブ黄色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	25㎡	17H477
80	九条四坊一町跡、 烏丸町遺跡	南区東九条東山王町 14-1	5/28	平安末期～鎌倉時代の東洞院大路東側溝を検出。本文報告 42 ページ。	20㎡	17H120

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
81	九条四坊一町跡	南区東九条東山王町 21-4, 22-1, 23	4/10	近代盛土以下、自然流路を確認。顕著な遺構・遺物なし。	15㎡	17H565
82	九条四坊五町跡、烏丸町道跡	南区東九条上御霊町 15-1 他	8/28	CL.0.27 ~ 2.34 mまで河川堆積。顕著な遺構・遺物なし。	54㎡	18H120

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
83	北辺三坊六町跡	北区大將軍取田町 21-17	9/18	現代耕土以下、CL.0.9 mでふい黄褐色泥砂の中世包含層、-1.1 mで褐色泥砂、-1.2 mで微砂混じり褐色泥砂の地山を確認。	58㎡	18H144
84	一条二坊十一町跡	中京区西ノ京中保町 81-1	10/4	調査地南側では、地山上面で近世以降の遺構を確認。北側では、室町時代以前、室町時代、江戸時代の遺構3面を確認。発掘調査を指導。	40㎡	18H492
85	一条二坊十一町跡	中京区西ノ京中保町 81-1	9/7	CL.0.9 ~ 1.2 mまで近世包含層。以下、褐灰色砂礫混じり粘質土やふい黄褐色粘質土の無遺物層を確認。CL.2.4 mまで浅黄色粘質土と明黄褐色砂礫の互層となる。	56㎡	18H433
86	一条二坊十四町跡、御土居跡	中京区西ノ京北門町 地内	8/22	GL.0.1 ~ 1.0 mに砂礫と粘土から成る御土居の構築土を複数確認。 本文報告 44 ページ。	12㎡	18H385
87	二坊三坊十一町跡	中京区西ノ京小堀池町 10-1, 10-2	9/3	GL.1.2 ~ 1.5 mで粘性の強い黄色粘質土の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	50㎡	18H038
88	二条四坊五町跡	右京区太秦安井柳通町 9-4 の一部 他	11/19	CL.1.46 mで河川堆積である黄褐色細砂礫、-1.74 mで明黄褐色泥砂の基盤層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	17㎡	18H544
89	二条大路跡	右京区西ノ京藤ノ木町 12-5 他、 同区西ノ京月輪町 1-1	8/1	CL.1.0 mで黄褐色粘質シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	35㎡	18H266
90	二条四坊十五町跡	右京区太秦安井北御所町 15	9/5	CL.0.4 mで黒色粘質土、-0.6 mでふい黄褐色粘質土の基盤層を確認。基盤層上面で、柱穴を1基検出。	10㎡	18H399
91	三条三坊十二町跡、西ノ京道跡	中京区西ノ京桑原町 67, 右京区西院金堀町 15-4, 15-6	4/27	CL.3.47 mでふい黄褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	67㎡	17H634
92	四条一坊二町跡	中京区壬生天満町 21 の一部、21-4 の一部、21-6, 同区壬生花井町 1, 1-6	9/10	GL.0.61 mで近世耕作土、-0.71 mで黒褐色粗砂、-0.78 mで明黄褐色砂礫を確認。顕著な遺構・遺物なし。	23㎡	18H364
93	四条一坊十四町跡、壬生道跡	中京区壬生森町 65	7/26	GL.0.7 m以下で河川堆積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	24㎡	18H194
94	四条一坊六町跡	中京区壬生花井町 3 の一部、3-3, 3-4	8/20	CL.1.33 mまで近代擾乱。以下-1.96 mまで灰色シルト、砂礫、水成堆積層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	10㎡	17H530
95	四条三坊十一町跡、西ノ京道跡	右京区西院春栄町 39 他	10/17 ~ 18	盛土以下、GL.0.9 mで黄色シルト～泥砂の地山を確認。地山上面で土坑・ビット、四条坊門小路の南側溝と考えられる溝を確認。 発掘調査を指導。	75㎡	18H482
96	五条三坊十四町跡・西京極道跡	右京区西院日野町 105	8/17	CL.0.8 mで中世包含層、-0.9 mで古墳時代以降包含層、-1.15 mで地山を確認。地山上面で方形周溝基、溝を検出。	40㎡	18H048
97	六条一坊四町跡	下京区中堂寺南町 131 他	4/3 4/24 5/8 5/29	旧耕作土以下、CL.0.8 mで土取り穴の埋土である灰色砂泥、-1.0 mで黄褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	126㎡	17H756
98	六条二坊八町跡	中京区壬生東高田町 1-15, 1-20	6/11 ~ 12	盛土直下 CL.0.7 mで黄褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	13㎡	17H467
99	六条二坊九町・十・十五・十六町跡、西院道跡	右京区西院高田町 5, 27	12/20 12/28	GL.1.75 mでふい黄褐色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	104㎡	18H186

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
100	六条三坊十一町跡	右京区西院西満崎町 1, 2, 3, 13	7/12 ～ 13	GL-0.2～0.5 mで黄褐色粘質土の地山を確認。地山上面で行い、恵正利小路の東側溝および中世耕作溝を検出。	90㎡	18H290
101	六条四坊八町跡、 西京極道跡	右京区西院月双町 57, 58-1	10/9 ～ 10	近世包含層以下、GL-1.7 mで灰色シルトの時期不明遺物包含層、-1.9 mで灰色粘土の溜地状堆積、-2.0 mで暗オリーブ灰色粘土を確認。顕著な遺構・遺物なし。	51㎡	18H421
102	七条一坊四町跡 (朱雀大路)	下京区朱雀正会町 1-9 他	5/2	旧耕土以下、GL-1.7 mでふい黄色泥砂、-1.87 mで時期不明遺物包含層、-2.71 mで黄褐色砂礫、-2.42 mで灰色シルト、-2.59 mで地山を確認。	103㎡	18H059
103	七条一坊四町跡 (朱雀大路)	下京区朱雀正会町 3-12 他	5/2	GL-2.1～2.6 mで褐色砂礫の地山を確認。一部流路堆積内に土師器片を含むが、遺構密度は希薄。	31㎡	17H635
104	七条一坊四町跡、 堂ノ口町道跡	下京区朱雀正会町 1-30、 同区朱雀堂ノ口町 20-4	7/9	GL-0.7 mで灰オリーブ色粘質シルトの整地上を確認。その上面で室町時代土坑や落込み状の遺構を検出。 発掘調査を指導。	62㎡	18H102
105	七条一坊十一町跡	下京区西七条御前町 94	6/29	GL-0.7 mで褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	37㎡	18H074
106	七条二坊七町跡、 衣田町道跡	下京区西七条石ヶ坪町 16, 18-1	6/20	盛土以下、GL-0.5 mで黄褐色粘質シルトの平安時代整地上、-0.6 mで明黄褐色粘質土の地山を確認。以下、流路理土を確認。 本文報告 55 ページ。	105㎡	18H108
107	八条一坊一町跡	下京区朱雀内畑町 7-3, 7-4, 40	8/8 8/27	GL-1.6～1.9 mで褐色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	24㎡	18H376
108	八条四坊一町跡	右京区西京極御田町 5, 5-1, 2, 3	4/12	現代耕土以下、GL-1.1 mで中近世耕土、-1.6 mで黄褐色シルト～細砂、以下-2.5 mまで自然流路堆積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	85㎡	17H482
109	八条四坊八町跡	右京区西京極前田町 5-1, 5-2, 5-8, 5-11	12/17	盛土以下、GL-0.85 mまで近世耕作土、-1.0 mまで中世耕作土、-1.2 mまで時期不明包含層、以下、-1.5 mまで埋没流路を確認。	4㎡	18H502
110	九条一坊十六町跡、 西寺跡、唐橋道跡	南区唐橋門脇町 17-7	10/5	GL-1.6 mでやや風みがかった褐色細砂の無遺物層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	8㎡	18H494
111	九条一坊十六町跡、 西寺跡、唐橋道跡	南区唐橋門脇町 8-2 の一部	10/11	GL-1.64 mまで盛土のみ。顕著な遺構・遺物なし。	8㎡	18H051
112	九条二坊四・五町跡、 唐橋道跡	南区唐橋大宮尻町 22	12/10 ～ 14	盛土以下、GL-0.62 mで旧耕作土、-0.84 mで床上、-1.0 mで明黄褐色礫混じり泥砂(地山)を確認。顕著な遺構・遺物なし。	126㎡	17H809

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
113	円宗寺跡	右京区御室芝橋町 1-4, 30-4, 3, 1-3, 1-22	9/11	GL-0.5 mで黄褐色粘質土の地山を確認。その上面で近世の東西溝を 1 条検出。	48㎡	18S397
114	常盤柏ノ木古墳群	右京区常盤柏ノ木町 2-2 の一部	6/15	旧耕作土以下、GL-0.65 mで褐色砂礫、-1.5 mでオリーブ褐色砂礫を確認。顕著な遺構・遺物なし。	41㎡	17S698
115	太秦馬塚町道跡	右京区太秦中筋町 12-8, 12-9	8/6	盛土以下、GL-0.4 mまで黒褐色細砂混じりシルト(包含層または客土)、-0.65 mまで黒色粘質シルト、以下、オリーブ黄色細砂混じりシルトの地山を確認。地山上面において複数条の溝と 2 基の土坑、ピットを検出。	43㎡	18S337
116	一ノ井道跡	右京区太秦一ノ井町 24-1	4/18 ～ 19	盛土以下、GL-1.1 mまで夢大の礫を含む中世包含層、以下、地山を確認した。地山上面で飛鳥～奈良時代の溝を検出。 本文報告 58 ページ。	74㎡	17S616

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
117	大深町 須志器堂跡	北区西賀茂今原町 104	10/22	近代堆積層以下、GL-0.54～0.79 mで明黄褐色砂礫混じり粘質土及び明黄褐色の岩盤の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	25㎡	18S107
118	新守庵瓦葺跡	北区西賀茂北新守庵町 135	12/14	GL-0.75 mで地山を確認。地山上面で焼土・炭混じりの土坑を検出。	26㎡	18S178
119	御上屋跡	北区大宮西輪台町 他 地内	5/14 ～ 15 6/14	KBM+1.78 mで御上屋土層。KBM-1.25 mで土塁もしくは堀埋土。KBM-1.68 mで内溝等を検出。 本文報告 44 ページ。	43㎡	17S757
120	植物園北道跡	北区上賀茂池端町 22, 28 の各一部	12/6	盛上以下、GL-0.4 mで暗褐色シルト、-0.55 mで黒色泥砂、-0.9 mで地山砂礫層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	39㎡	18S647
121	植物園北道跡	左京区下鴨南芝町 30-1	8/9	盛上以下、GL-0.5 mまで旧耕作土、-0.6 mまで暗灰黄色シルト、-0.7 mまで暗灰黄色粘砂混じり粘土質シルト（古墳時代後期包含層）、-0.95 mまで黒褐色粘砂混じりシルト、以下、褐色細砂混じり粘土質シルトの地山を確認。古墳時代包含層除去面で、型穴建物と考えられる遺構を検出。 発掘調査を指導。	43㎡	18S272
122	史跡 賀茂御祖神社 境内（下鴨神社）	左京区下鴨泉川町 59	4/12 ～ 10/29	各調査区において、西参道・田参道の路面、築地基礎部、河合大路向側溝等を確認。 本文報告 63 ページ。	68㎡	29N114
123	史跡 御上屋	北区兼野西上屋町 1-40、 1-97	11/12	GL-0.4 mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	12㎡	30N027
124	北野天満宮	上京区馬喰町 931 他	8/14	GL-0.35 mで近世包含層、-0.55 mで灰黄褐色砂泥の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	5㎡	18S284
125	上京遺跡	上京区元智願寺通油小路西 入仲之町 463-2、 同区東堀川通今出川下る東 入西今町 386、 同区小川通今出川下る西入 東今町 381	10/12	GL-0.6 mで近世整地層、-0.9 mで中世整地層、 -1.2 m以下で地山を確認。各面で成立する土坑 を検出。ただし、残存状態は悪い。	26㎡	18S162
126	上京遺跡	上京区今出川通室町西入堀 出シ町 288、290-1、-2、 291-1、-2、292、293の 一部	10/23	現代擾乱以下、GL-0.2 mで整地土層と火災処理 層の互層、-1.5 mで暗灰黄色砂礫の地山を確認。 顕著な遺構・遺物なし。	32㎡	18S497
127	北野庵寺	北区北野下白梅町 56	8/15	盛上以下、GL-0.6 mまで平安時代包含層、-1.0 mまで瓦を含む奈良時代包含層。以下、地山を 確認。地山上面でピットを検出。 発掘調査を指導。	26㎡	18S007

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
128	如意寺跡	左京区麩谷谷町 1-1	4/9	和中庵にともなう庭の石組遺構を確認。	15㎡	17S672
129	得長寺院跡、白河街 区跡、岡崎道跡	左京区岡崎徳成町 5	8/13	GL-0.8 mで灰黄褐色泥砂の平安時代包含層、 -0.9 mで暗褐色砂礫の地山を確認。地山直上で 土坑を検出。 発掘調査を指導。	9㎡	18R254

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
130	御上屋跡、寺町垣域	中京区河原町通三条上る恵 比須町 434-1、 同区三条通寺町東入石橋町 23-2 他	9/10	GL-0.5 m以下、江戸時代の遺構面が連続、-1.0 mで無遺物層、-1.2 mで沓形堆積層を確認。	24㎡	18S029
131	六波羅寺境内、 六波羅政庁跡	東山区五条通大和大路上る 東	10/3	GL-1.43～2.1 mまで擾乱により削平。顕著な 遺構・遺物なし。	8㎡	18S121
132	音羽・五条坂京跡 (道仙堂)	東山区五条坂東四丁目 448- 3	6/14	表土直下において現存する京の前庭部石積の裏 込めを確認。一部で横面を検出。付近に現存の 堂以前の堂が存在する可能性がある。 協議の結果、堂は現地保存。	3㎡	18S131

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
133	六波羅宮正統、 首羽・五条坂遺跡	東山区五条橋東四丁目 450-1他	10/15 ～16	GL-0.4m以下で平安後期～室町時代の遺構面を 3面確認。 発掘調査を指導。	113㎡	18S160
134	首羽・五条坂遺跡	東山区五条橋東六丁目遊行 前町 556	12/13	盛土以下、GL-0.05 mで黄褐色砂泥の地山を確 認。便所裏・がいし廃棄土坑を検出。	55㎡	18S341
135	法住寺観跡	東山区三十三間堂廻り 657 他	6/8	GL-0.78 mまで近現代盛土を確認。	10㎡	18S017
136	安祥寺下寺跡	山科区御阪平林町 1-49	7/4	GL-0.9mで褐色シルトの地山を確認。顕著な遺 構・遺物なし。	7㎡	18S268
137	安祥寺下寺跡	山科区御阪平林町 1-49	7/4	GL-0.7mで褐色シルトの地山を確認。顕著な遺 構・遺物なし。	11㎡	18S267
138	山科本願寺跡 (寺内町遺跡)、 左義長町遺跡	山科区西野離宮町 39、 44-1	6/27	現代耕土以下、GL-1.2～2.0mで河川氾濫堆積 を確認。顕著な遺構・遺物なし。	74㎡	18S219
139	中臣遺跡	山科区東野森野町 45-1	8/21	GL-0.7 mまで遺構面を検出。 遺構面を地中保存。	55㎡	18N085
140	中臣遺跡	山科区東野舞台町 93-1	5/1	GL-1.4 m前後で褐色砂礫の地山を確認。顕著な 遺構・遺物なし。	6㎡	18N018
141	中臣遺跡	山科区助修寺西栗栖野町 270	4/23	GL-0.25mで明黄褐色シルトの地山を確認。顕著 な遺構・遺物なし。	23㎡	18N054
142	中臣遺跡	山科区御辻番所ヶ町口 188、 189	11/8	盛土以下、GL-2.35 mまで暗褐色～黒褐色微砂 混じりシルトの古墳時代後期包含層、以下地山 を確認。地山上面で古墳時代後期の溝、ピット、 土坑を検出。 遺構面を地中保存。 本文報告 69 ページ。	15㎡	18N289
143	中臣遺跡	山科区助修寺東金ヶ崎町 6、 13	6/13	GL-1.9 mで遺構面と考えられる褐色砂礫を確認。 遺構面を地中保存。	34㎡	18N079

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
144	がんせんどう廃寺	伏見区深草谷口町 111-20	5/11	GL-0.7 mで地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	11㎡	17S813
145	伏見城跡	伏見区桃山町下野 27-1、 27-10の一部	5/31、 6/7～ 11	近世の伝下野守部の虎口を検出。 本文報告 81 ペー ジ。	40㎡	16F684
146	伏見城跡、 木橋の園跡	伏見区桃山山町 91-1、 138、139	11/9	GL-3.0 mまで現代盛土を確認。伏見城期の遺構 面は未確認。	9㎡	18F536
147	史跡 醍醐寺境内	伏見区醍醐醍醐山町国有無 番地 (醍醐山国有林 31・ 33 林班)	4/25	GL-0.25mにて黄色微混じり砂泥の地山を確認。 顕著な遺構・遺物なし。	16㎡	29N056
148	向島城跡	伏見区向島二ノ丸町9の一 部、6-1の一部、7-1の一部、 4-4の一部	6/18	盛土以下、湿地堆積及び河川堆積の細砂礫を確 認。顕著な遺構・遺物なし。	52㎡	18S022

烏羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
149	烏羽離宮跡	伏見区竹田田中宮町 43、44	4/13	GL-0.7 mで上部土壌化した灰色細砂、以下-1.8 mまで水成堆積を確認。土坑1基検出。	57㎡	18T009
150	富ノ森城跡	伏見区横大路西海道 地内	11/6 ～7	現代耕土以下、GL-0.3 mまで暗灰黄色微砂混じ り粘土質シルト、-0.8 mまで暗灰黄色微砂混じ り粘土質シルト、-1.2 mまで黒褐色微砂混じ り粘土質シルトの中世包含層、以下、-3.2 mまで 灰色微砂混じり粘土質シルトを確認。中世包含 層除去面で、微高地を検出した。	142㎡	17S747
151	淀城跡	伏見区淀木津町 186-1	7/5	GL-0.75～1 mで淀城に伴う造成土と近世後半の 遺構を検出。	38㎡	18S252

長岡京地区 (NG)

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
152	長岡京北辺 三坊二町跡、 東院跡	南区久世殿城町 309-1, 309-2, 310-1, 310-2, 311-3	9/28	GL-1.45 mまで耕土・床上、-1.85 mでオリーブ 黄色シルトを確認。顕著な遺構・遺物なし。	41㎡	18NG275
153	長岡京左京 一条三坊十一町跡、 一条条間大路跡	南区久世東上川町 17-1 他 6 筆	5/9 ～ 10	GL-0.5 ～ 1.0 mで地山を確認。地山上面で弥生 時代と長岡京期の遺構を確認。発掘調査を指導。	121㎡	18NG053
154	長岡京左京 四条二坊十六町跡、 芝ヶ木道跡	伏見区羽束師菱川町 423, 427	10/25 ～ 26	現代耕土以下、GL-0.19 mでふい・黄褐色粘質 土の中世包含層、-0.29 mで明黄褐色粘質土の地 山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	84㎡	18NG406
155	長岡京左京 五条二坊十五町跡	伏見区羽束師菱川町 366-1	5/21	調査区北端部において、長岡京期の包含層 と遺構面を検出。	46㎡	18NG042
156	長岡京左京 五条三坊一町跡	伏見区羽束師菱川 262-20 他	9/20	現代耕土以下、GL-0.5 mでマンガンを含むに ふい黄色シルト、-0.7 mで増灰黄色砂礫の洪水堆積 、-0.9 mでオリーブ褐色砂泥の地山を確認。-1.2 mまで灰色シルトの湿地堆積が連続。顕著な遺 構・遺物なし。	22㎡	17NG845
157	長岡京左京 六条四坊八町・九町跡	伏見区羽束師古川町 139-2 の一部 他 11 筆	5/16 ～ 17	現代耕土以下、GL-0.86 mで明褐色砂礫の床上、 -0.93 mで明黄褐色シルト、-1.1 mで黄褐色砂、 -1.17 mで明黄褐色シルト、-1.71 mで明黄褐色 シルト、-1.92 mで灰色シルトの湿地堆積を確認。 顕著な遺構・遺物なし。	85㎡	18NG113
158	長岡京左京 七条四坊二町跡	伏見区淀樋爪町 197-7, 202-2	7/20	GL-0.5 mで鉄分を含む黄色シルト、-0.7 mでオ リーブ黄色シルト、-1.0 mで緑灰色粘土を確認。 顕著な遺構・遺物なし。	50㎡	18NG024
159	長岡京右京 北辺四坊十六町跡、 上里北ノ町道跡	西京区大原野上里北ノ町他 地内	5/30 ～ 6/1	GL-0.74 mでオリーブ色砂泥、-1.0 mで明黄褐 色砂泥、-1.12 mで灰オリーブ色砂泥、-1.46 m で黄色シルト、-1.96 mで明黄褐色礫混じり砂砂 を確認。顕著な遺構・遺物なし。	34㎡	18NG027

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
160	史跡及び名勝 嵐山、 嵐山谷ヶ辻子町道跡	西京区嵐山谷ヶ辻子町 26-4	12/6	GL-0.3 mで遺物包含層を確認。顕著な遺構・遺 物なし。	14㎡	30N021
161	上久世道跡	南区久世上久世町 81	8/8	GL-0.75 mで古墳時代前期遺構面を検出。埋設 流路が大平を占めるため、遺構自体は希薄。	38㎡	18S109
162	中久世道跡	南区久世中久世町 2-103	12/25 ～ 26	GL-0.9m以下で湿地状堆積を確認。顕著な遺構・ 遺物なし。	52㎡	18S196
163	中久世道跡	南区久世殿城町 70	10/19	GL-0.65 mで地山を確認。地山上面で弥生時代 と中世遺構群を確認。発掘調査を指導。	22㎡	18S519
164	大藪道跡	南区久世樂山町 1103-1,104- 1,105-1,106-1,597	4/20	GL-0.5 mで溝を一条、0.75 mで土坑状の断 面を確認。顕著な遺構・遺物なし。	100㎡	17S712
165	大藪道跡、 下久世道跡	南区久世殿城町 526-1の一部	7/2 7/27	GL-0.65 mで地山を確認。この上面で弥生時代 と中世の遺構群を検出。発掘調査を指導。	109㎡	18S203
166	福西古墳群	西京区大枝東長町 1-41,1- 42,1-430,1-434	9/26	道路部はGL-0.38 mまで耕土。平坦面は、3 m以 下まで現代盛上を確認。顕著な遺構・遺物なし。	35㎡	18S437
167	上里北ノ町道跡	西京区大原野上里北ノ町他 地内	7/17	GL-1.14 mまで竹林盛上、-1.74 mまでにふい・黄 褐色シルト、-2.3 mまで灰色シルトの湿地状堆 積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	10㎡	18S259

京北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	京都市番号
168	鳥谷古墳群	右京区京北下中町鳥谷 6-16, 6-25, 6-26	11/1 ～2	現代造成土以下、地山を確認。本来の地形は造成の際に大きく改変されていることを確認。顕著な遺構・遺物なし。	56㎡	18S500
169	塔遺跡	右京区京北塔町郷蔵前 42-1 他	7/11	盛土以下、GL-1.1 mで灰褐色～黒褐色の粘土質シルトを確認。顕著な遺構・遺物なし。	20㎡	18S250

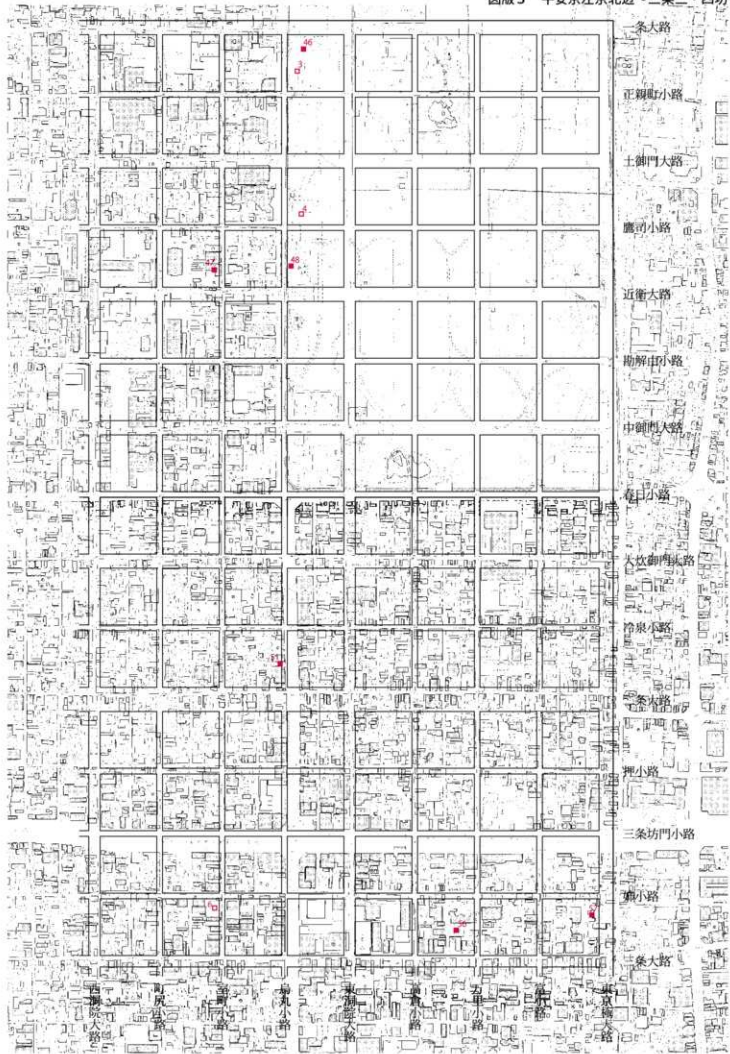
图 版

凡 例

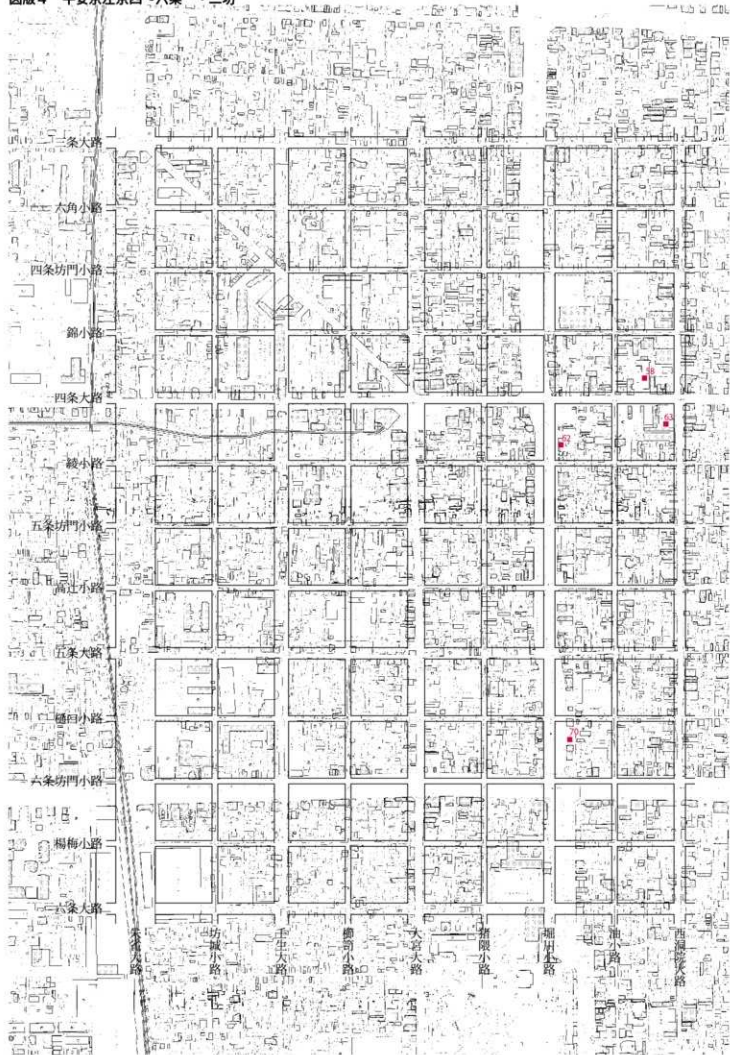
- 平成30年1月～3月（平成29年度） 試掘調査地点
- 平成30年4月～12月（平成30年度） 試掘調査地点

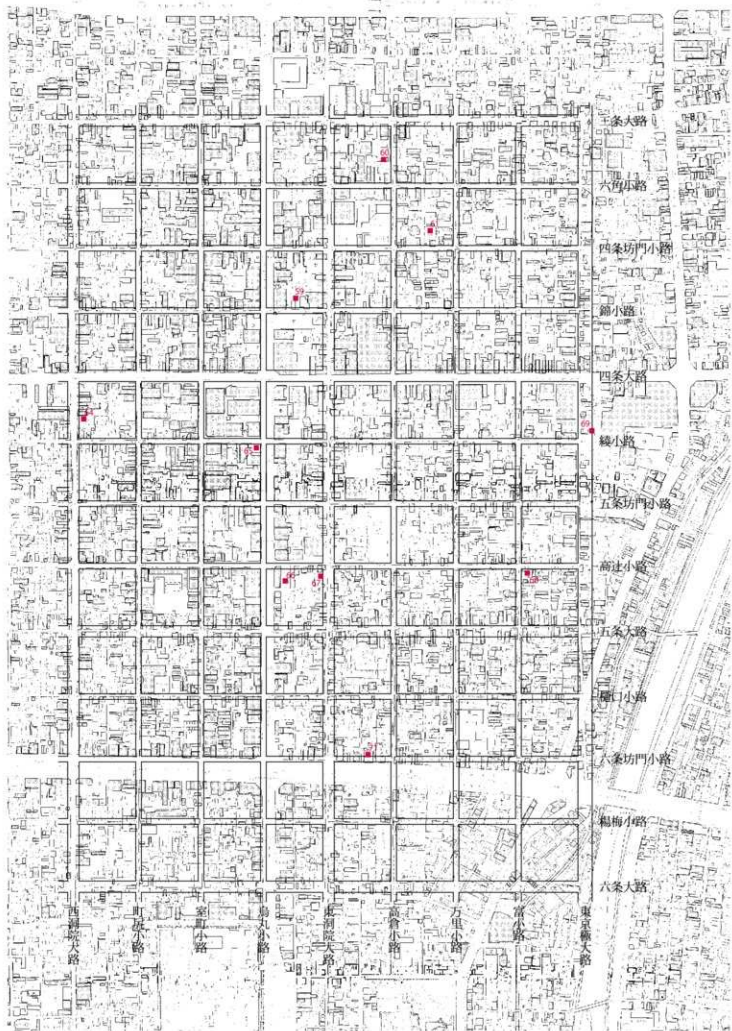


图版3 平安京左京北边~三条三·四坊



圖版4 平安京左京四~六条一・二坊

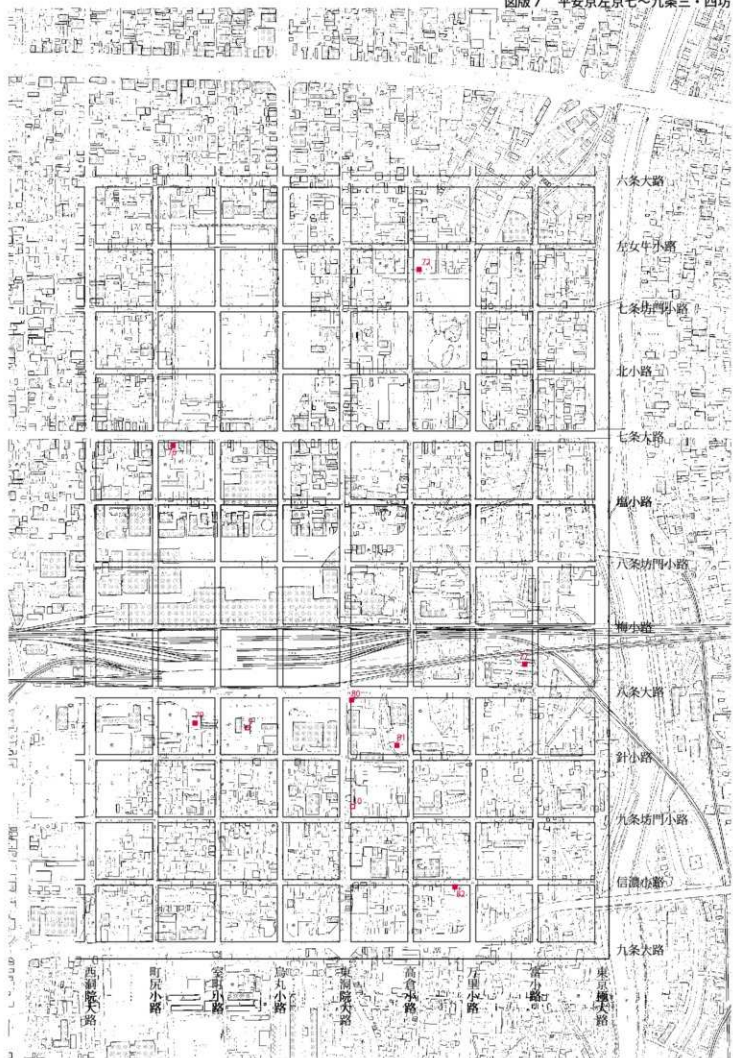




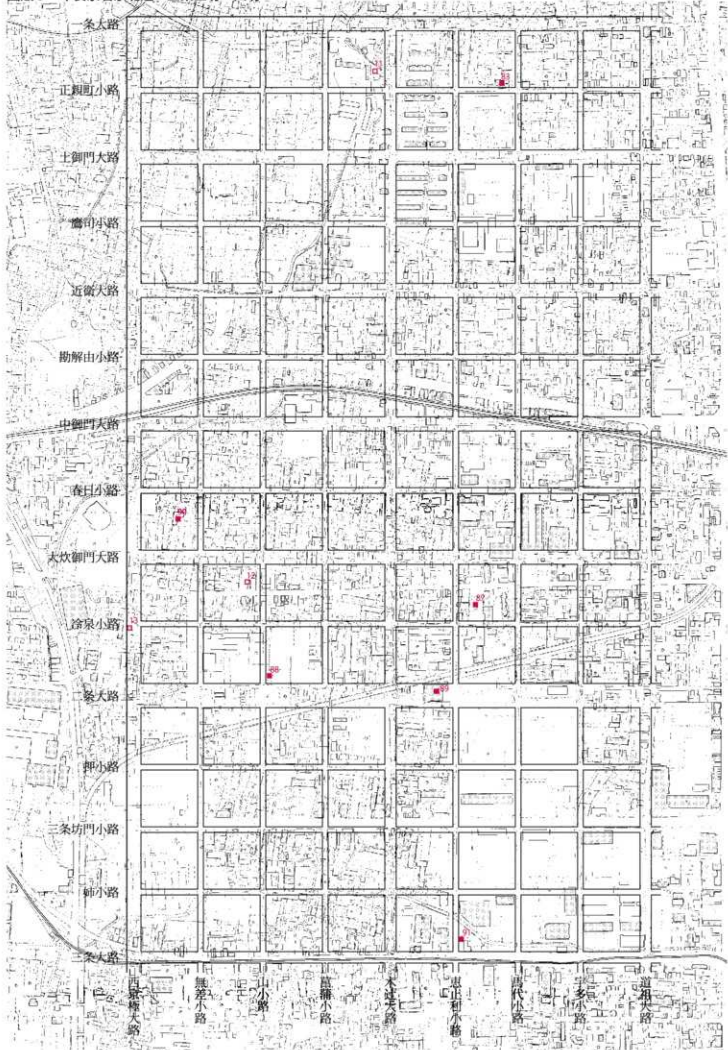
圖版6 平安京左京七~九条一・二坊



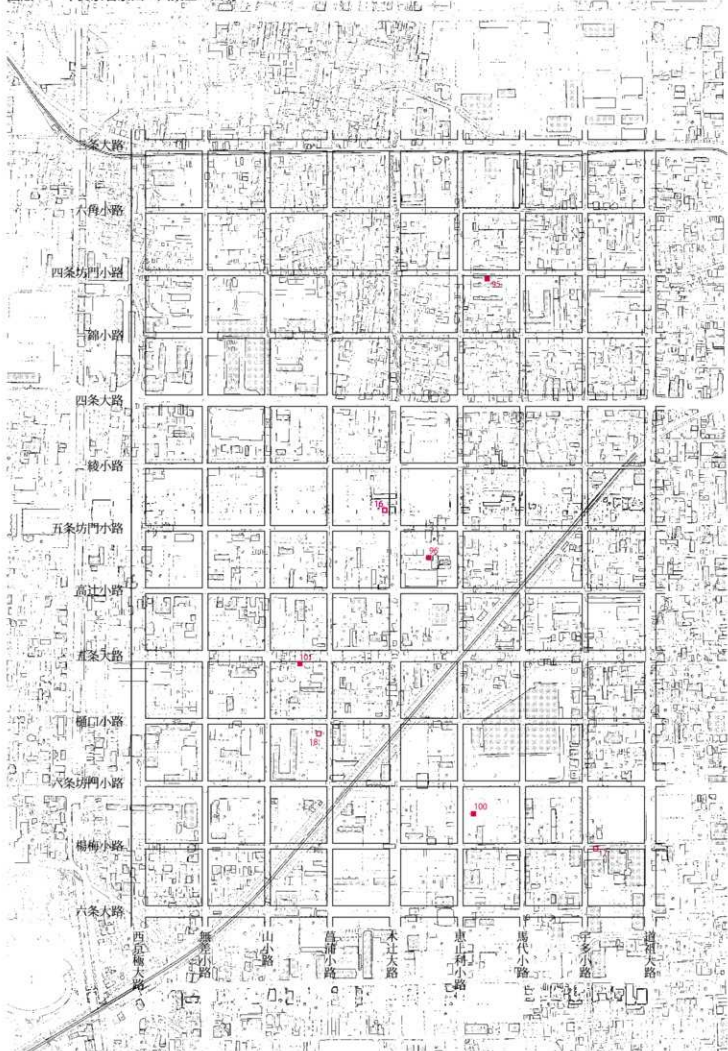
圖版7 平安京左京七~九条三・四坊



図版8 平安京右京北辺～三条三坊・四坊



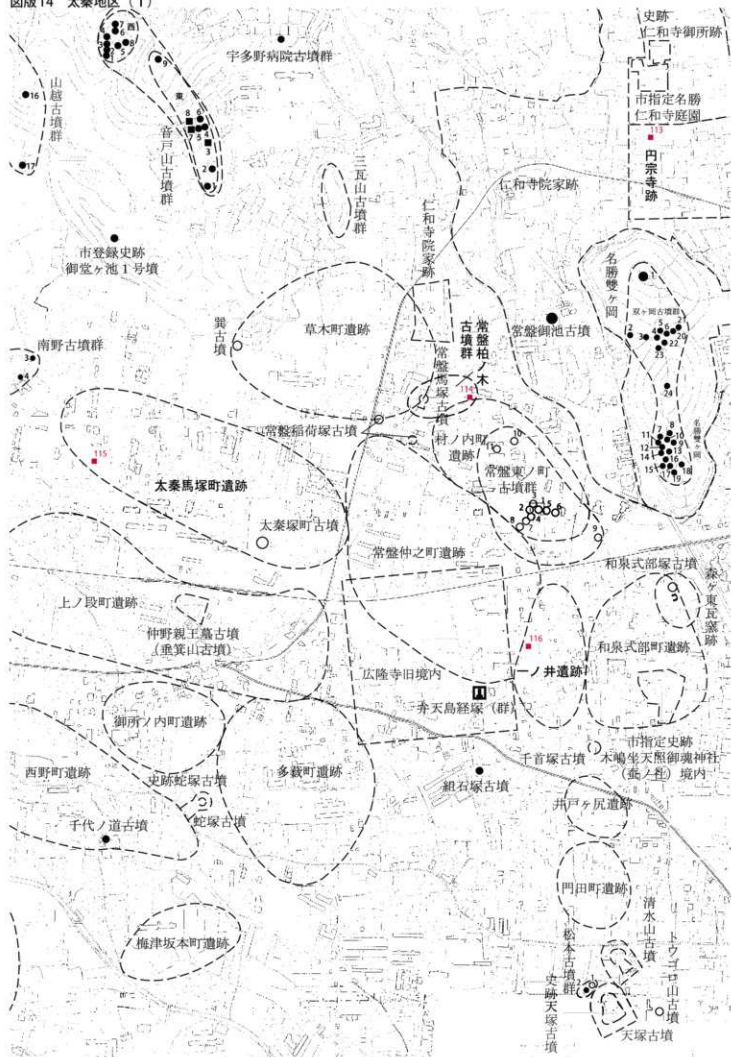
図版10 平安京右京四～六条三・四坊

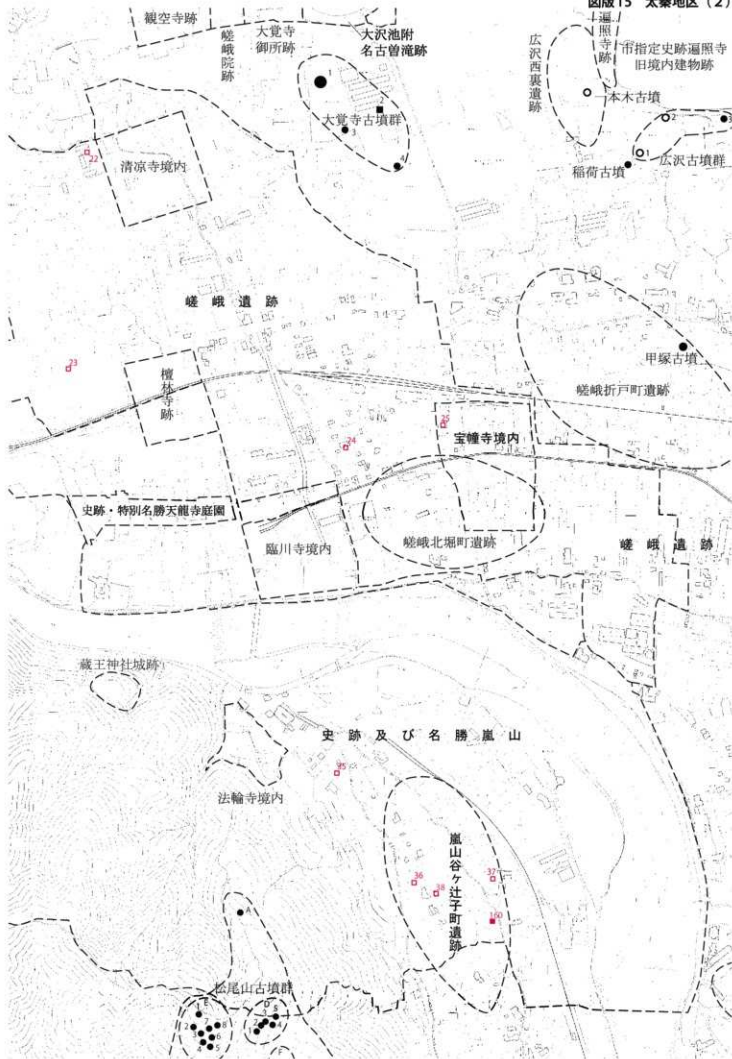


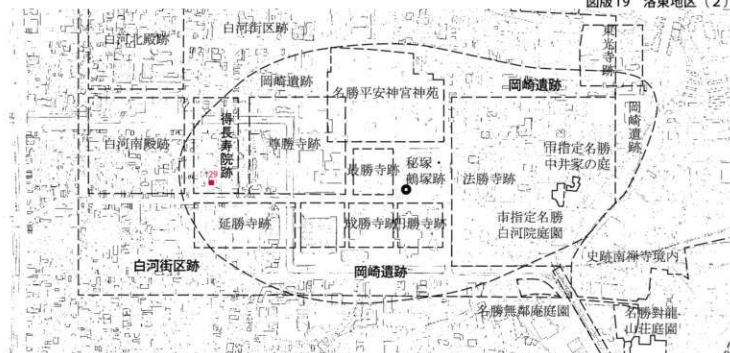
圖版 12 平安京右京七~九条三・四坊



図版14 太秦地区 (1)







1 得長寿院跡, 白河街区跡, 岡崎遺跡



2 安祥寺下寺跡

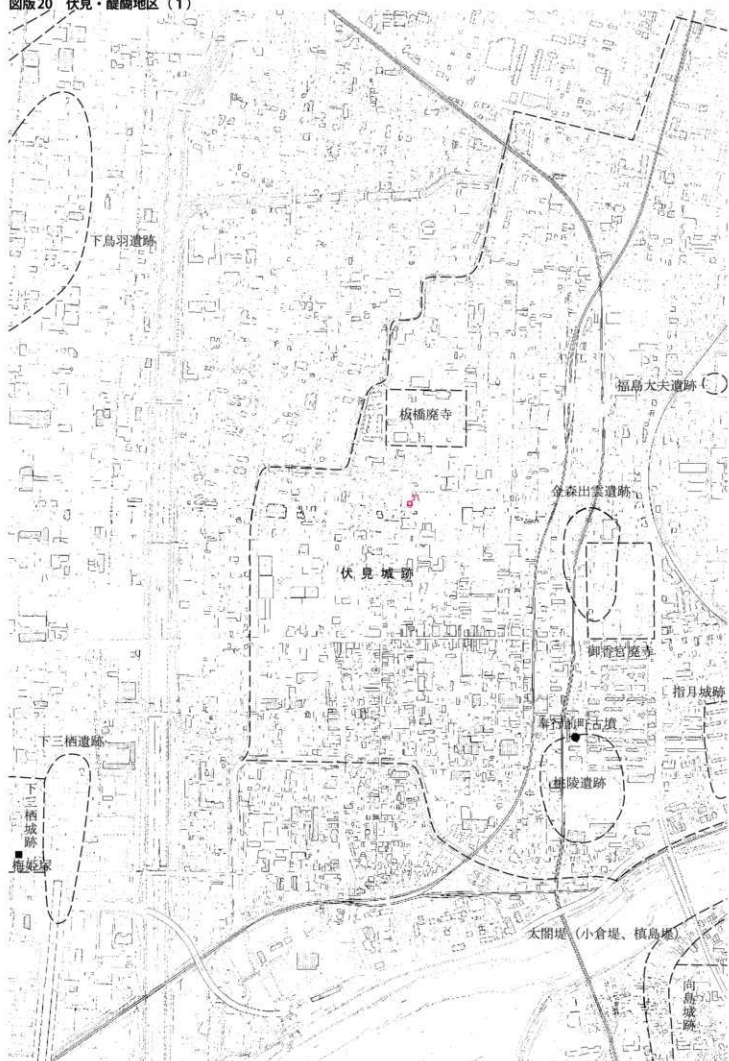


3 山科本願寺南殿跡



4 山科本願寺跡(寺内町遺跡), 左義長町遺跡, 中臣遺跡

図版20 伏見・醍醐地区(1)





図版22 伏見・醍醐地区 (3)



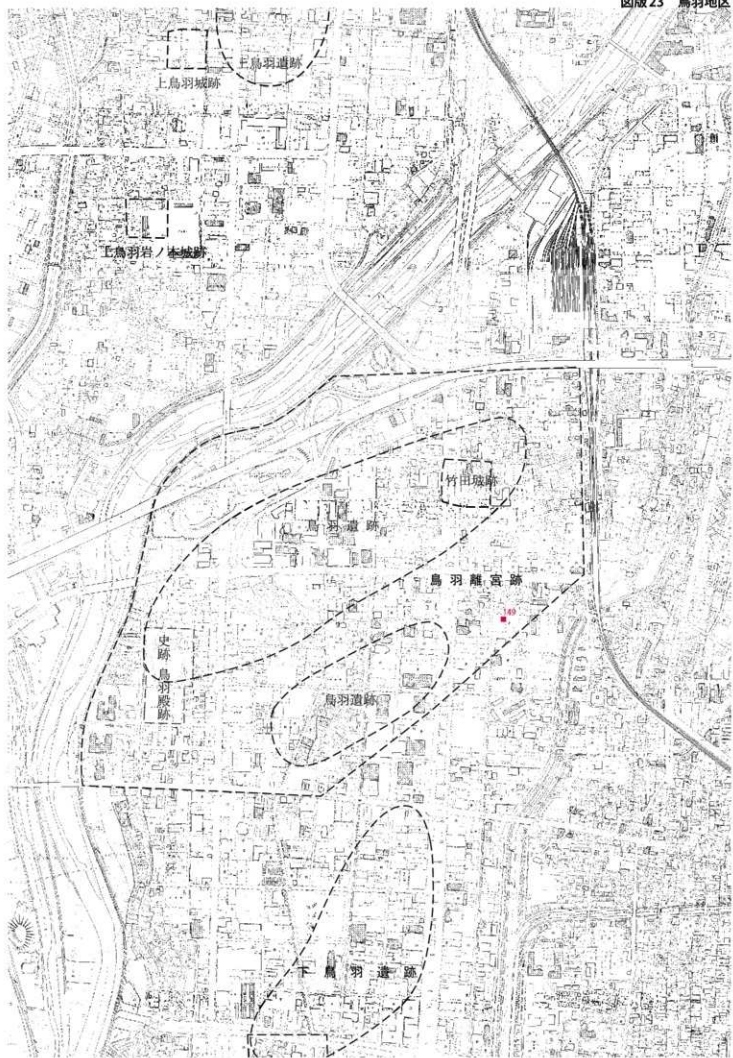
1 がんせんだう廃寺

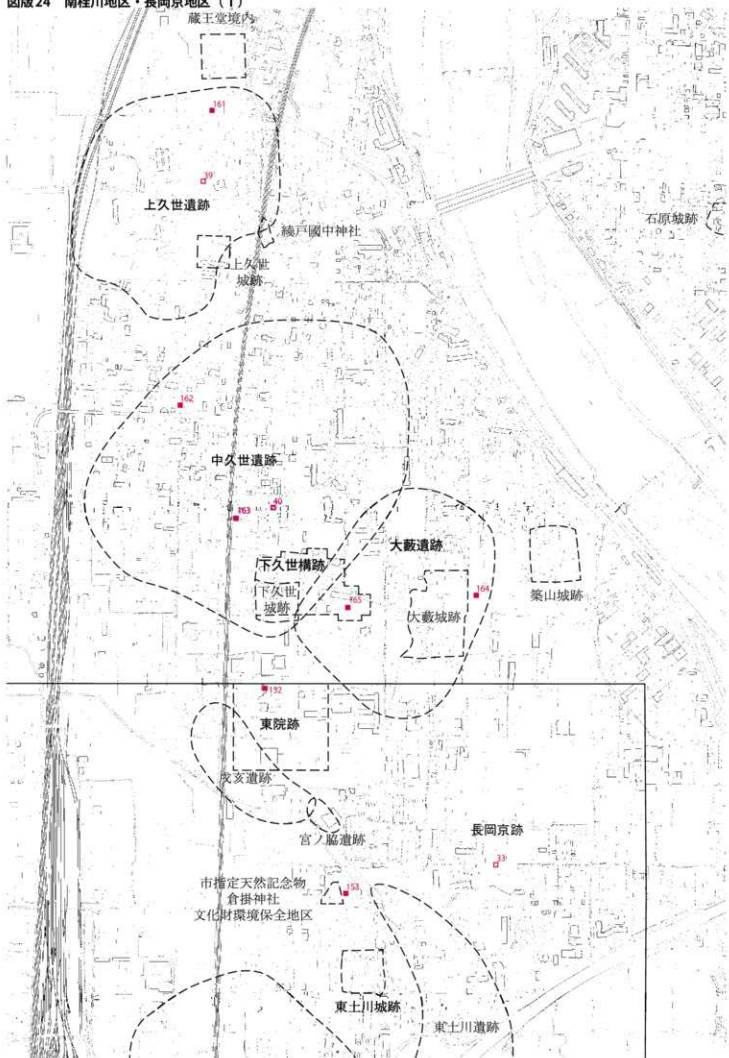


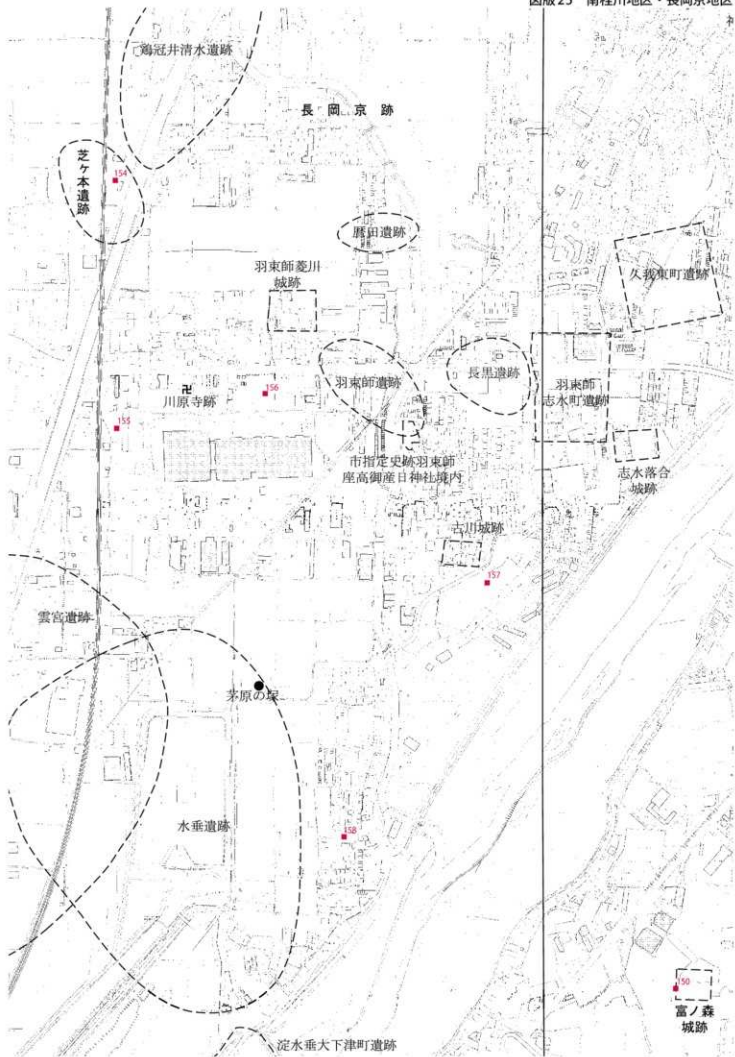
2 向島城跡



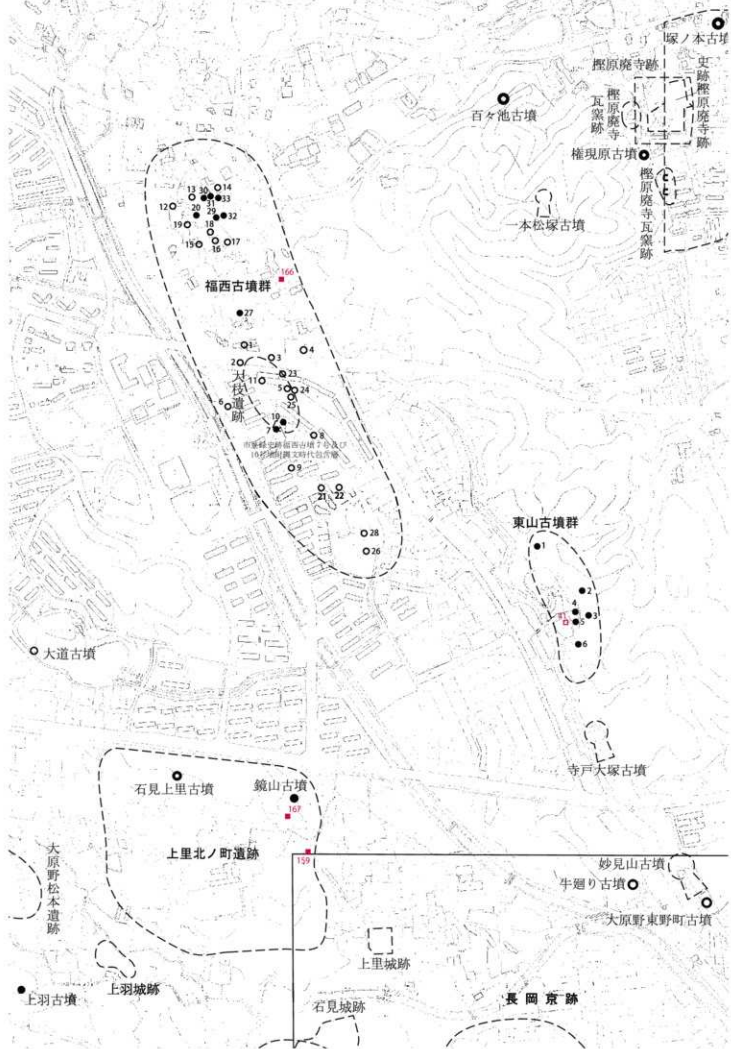
3 史跡醍醐寺境内

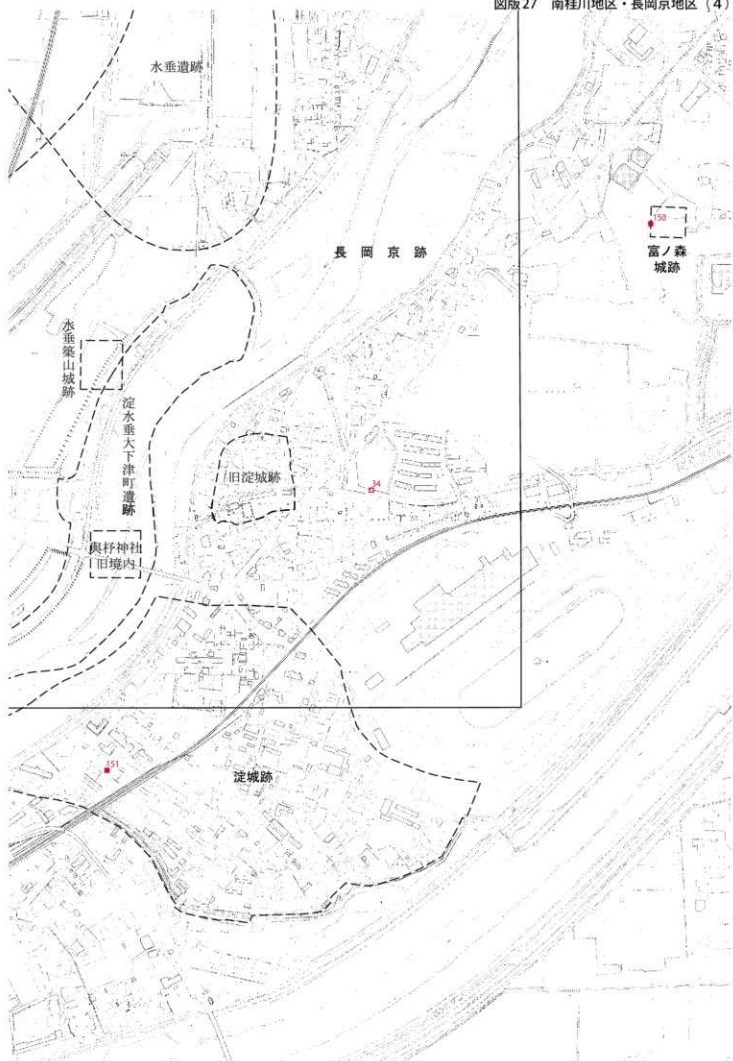






図版26 南桂川地区・長岡京地区(3)





九門（公門）屋敷跡



1 鳥谷古墳群



2 塔遺跡



1 朝堂院跡遺構面検出状況（南西から）



2 右近衛府跡調査区全景（南東から）



1 12区築地基底部および石組溝（東から）



2 17区築地基底部および石組溝（北東から）



3 12区築地基底部および石組溝（南東から）



4 17区築地基底部および石組溝（北西から）



5 11区南北溝（北から）



6 15区東壁（西から）



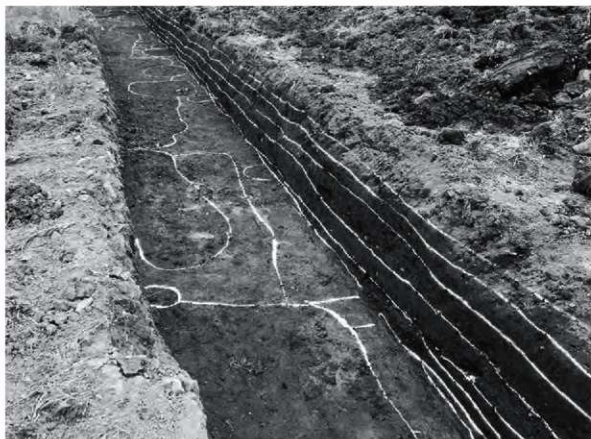
1 第2区全景(西から)



3 第3区全景(西から)



2 第3区遺構検出状況(南から)



4 第3区全景(東から)



1 第5区東半部全景(北西から)



2 第5区遺構検出状況(南西から)



1 第5区遺構検出状況(北から)



2 第6-1区全景(東から)



3 第6-3区全景(南東から)



4 第6-7区全景(南東から)



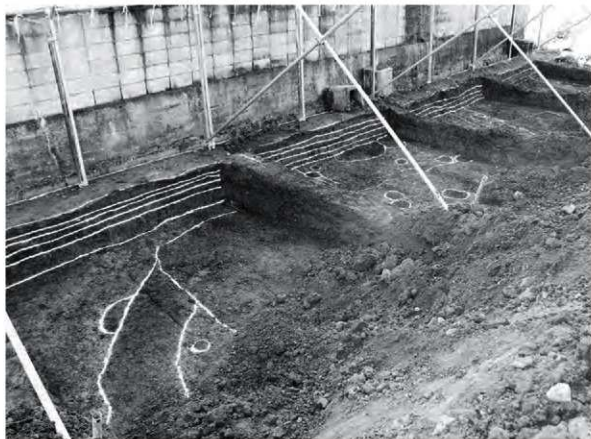
5 第6-8区全景(南東から)



6 第6-9区全景(南東から)



7 第6-10区全景(南東から)



1 第7区全景(北東から)



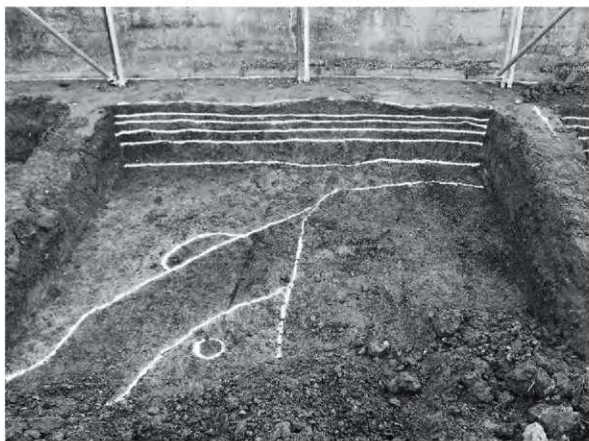
2 第7区竪穴7-20検出状況(北西から)



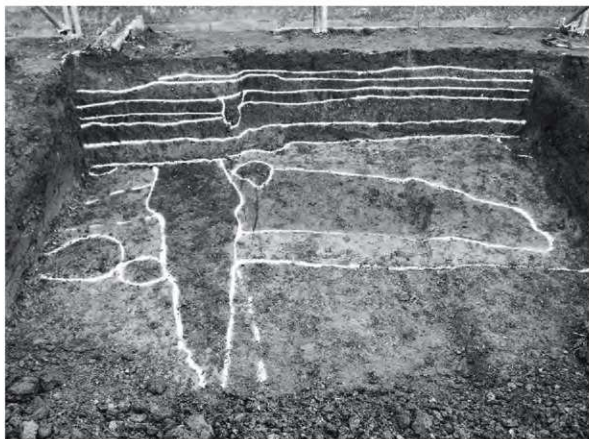
1 第7-2区全景(北から)



2 第7-3区全景(北から)



1 第7-4区全景(北から)



2 第7-5区全景(北から)



1 石垣検出状況(西から)



2 石畳検出状況(西から)



1 階段検出状況(南西から)



2 階段検出状況(南東から)

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしつちょうさほうこく へいせいさんじゅうねんど							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・廣富亮太							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2019年(平成31年)3月29日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安宮 朝堂院跡、 聚楽遺跡	京都市上京区 竹屋町通千本東入 主税町1143、1144	26100	1 237	35度 01分 04秒	135度 44分 35秒	2018/12/12	24	共同住宅 建設
平安宮 右近衛府跡、 鳳鳴遺跡	京都市上京区 御前通下立売上る 天満屋町312	26100	1	35度 01分 14秒	135度 44分 10秒	2018/4/4 5/28～6/8	136	福祉施設 建設
平安京左京北辺 三坊七町・八町跡、 一条三坊十六町跡、 公家町遺跡、 内膳町遺跡、 新在家構え跡	京都市上京区 京都御苑3	26100	2 240 241 244	35度 01分 23秒	135度 45分 34秒	2017/7/7 ～ 2018/11/20	87	御苑内 整備
平安京左京一条 三坊十五町跡、 新在家構え跡、 旧二条城跡	京都市上京区 京都御苑13	26100	2 243 244	35度 01分 20秒	135度 45分 35秒	2017/12/28	11	警察施設 改修
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮 右近衛府跡、 鳳鳴遺跡	宮殿跡 集落跡	江戸時代		溝、土坑、竈		土師器、須臾器、 陶磁器、瓦		
平安宮 朝堂院跡、 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代 江戸時代		土坑、整地跡、 溝		土師器、瓦、緑釉瓦		龍尾塚推定範囲で整 地層と土坑を検出。
平安京左京北辺 三坊七町・八町跡、 一条三坊十六町跡、 公家町遺跡、 平城跡、 内膳町遺跡、 新在家構え跡	都城跡 邸宅跡 平城跡 散布地	江戸時代		築地基礎、 石組溝		土師器、陶磁器		公家町内の区画施設 を検出。
平安京左京一条 三坊十五町跡、 新在家構え跡、 旧二条城跡	都城跡 平城跡	江戸時代		築地基礎		土師器、瓦質土器		庭田親邸南築地(?) を検出。

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく へいせいさんじゅうねんど							
書名	京都市内遺跡試験調査報告 平成30年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	馬瀬智光・西森正晃・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・廣富亮太							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2019年(平成31年)3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京四条 四坊一町跡, 烏丸御池遺跡	京都市中京区 高倉通三条下る 丸屋町165他	26100	2 464	35度 00分 28秒	135度 45分 43秒	2018/9/25 11/21～22	13	ホテル 建設
平安京左京五条 三坊十三町跡, 烏丸綾小路遺跡	京都市下京区 東洞院通高辻下る 灯笼町562ほか	26100	1 712	34度 59分 58秒	135度 45分 40秒	2018/6/5	22	ホテル 建設
平安京左京八条 二坊一町跡, 東市跡	京都市下京区 大宮通木津屋橋上る 上之町416.416-2の一部	26100	1 718	34度 59分 18秒	135度 44分 58秒	2018/8/10	19	ホテル 建設
平安京左京九条 四坊一町跡, 烏丸町遺跡	京都市南区 東九条山王町14-1	26100	1 759	34度 59分 03秒	135度 45分 41秒	2018/5/28	20	ホテル 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京四条 四坊一町跡, 烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 室町時代(南北朝期)	墓, 土坑	土師器, 陶磁器	南北朝期の墓を検出。			
平安京左京五条 三坊十三町跡, 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	平安時代	溝	土師器, 瓦	東洞院大路西側溝と 同大路西築地内溝を 確認。			
平安京左京八条 二坊一町跡, 東市跡	都城跡 市場跡	鎌倉時代	溝		大宮大路東側溝を確 認。			
平安京左京九条 四坊一町跡, 烏丸町遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 ～鎌倉時代	溝		東洞院大路の東側溝 を確認。			

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないせきしくつちょうさほうこく へいせいざんじゅうねんど							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・廣富充太							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2019年(平成31年)3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京一条二坊十四町跡、御土居跡	京都市中京区西ノ京北内町地内、北区大宮西脇台町ほか 地内	26100	1	35度01分13秒 35度03分10秒	135度43分48秒 135度44分38秒	2018/4/12 8/22	43 12	公園施設整備
平安京右京七条二坊七町跡、西市跡、衣田町遺跡	京都市下京区西七条西石ヶ坪町16.18-1	26100	1 714 713	34度59分14秒	135度44分03秒	2018/6/20	105	共同住宅建設
史跡 賀茂御祖神社旧境内	京都市左京区下鴨泉川町59	26100	A 309	34度59分14秒	135度44分03秒	2017/4/12	68	防犯設備設置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京一条二坊十四町跡、御土居跡	都城跡 土塁跡	平安時代 室町時代(桃山期)	溝、堀 土塁構築土		現地保存を図る。			
平安京右京七条二坊七町跡、西市跡、衣田町遺跡	都城跡 市場跡 集落跡	平安時代	流路	土師器、灰輪陶器、 緑軸陶器				
史跡 賀茂御祖神社旧境内	史跡	平安時代後期 江戸時代	築地、溝 路面整地層	土師器、瓦				

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく へいせいさんじゅうねんど							
書名	京都市内遺跡試験調査報告 平成30年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・西森正児・家原圭太・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・熊井亮介・熊谷舞子・新田和央・黒須亜希子・清水早織・廣富亮太							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2019年(平成31年)3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一ノ井遺跡	京都市右京区 太秦一ノ井町24-1	26100	913	35度 00分 55秒	135度 42分 35秒	2018/4/18	74	共同住宅 建設
中臣遺跡	京都市山科区 柳辻番所ヶ口町 188, 189	26100	632	34度 58分 05秒	135度 48分 36秒	2017/6/20	163	宅地造成
中臣遺跡	京都市山科区 東野舞台町 47-1,48,49-1,50-1,51-1	26100	632	34度 58分 32秒	135度 48分 29秒	2017/7/14	176	公園施設 整備
伏見城跡	京都市伏見区 桃山町下野 27-1, 27-10の一部	26100	1172	34度 56分 13秒	135度 46分 25秒	2018/2/7 ～2/9	50	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
一ノ井遺跡	散布地	江戸時代		溝、土坑		土師器、緑輪陶器		
中臣遺跡	集落跡	古墳時代後期		ビット、溝、 土坑		土師器、須恵器		
中臣遺跡	集落跡	古墳時代後期		竪穴建物、 ビット、溝、 土坑		土師器、須恵器		集落の発見により包 蔵地範囲を拡大。
伏見城跡	平城跡	室町時代(桃山期) ～江戸時代初頭		石垣、石敷、 階段		瓦、青磁、石製品		松平下野守屋敷西面 石垣と入口となる階 段を発見。

京都市内遺跡試掘調査報告

平成30年度

発行日 2019年3月29日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394
Y・J・Kビル2階
TEL.(075)366-1498
印刷 奥田印刷株式会社
京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町79
TEL.(075)254-0646